

炉辺のこおろぎ

目次

第一声
第二声
第三声

解説

ジェフリー卿に

このささやかな物語を

捧げる

かれの友人の

愛情と愛着をこめて

著者

一八四五年十二月

第一声

やかんが始めたのだ！ ピアリングルのおかみさんがどう言ったかなんて、聞きたくない。わたしのほうがよく知っているのだ。ピアリングルのおかみさんは、どちらが先には始めたかわからなかった、と未来永劫まで記録に残しておくかもしれない。だが、わたしに言わせれば、やかんが始めたのだ。わたしは、当然知っているはずではないか！ こおろぎが鳴きだすまえにやかんが始めたのだ、部屋の隅っこにある、青白い文字盤のついた、小さなオランダ時計*で、たっぷり五分も早く。

いったい、こおろぎが参加するまえに柱時計は打ち終わらなかったし、柱時計のてっぺん

* 「オランダ時計」振り子の代わりに、紐の先に付けた二本の分銅で動く旧式な柱時計。二十六、八十ページの挿絵を参照。

にいる小柄な干し草作り^{*}は、ムーア風の宮殿のまえで、引きつけでも起こしたかのように、ぎくしゃくと大鎌を左右に振って、架空の草地を半エーカーも刈り倒さなかったとでも言うのか！

なにね、わたしは生まれつき独断的なたちじゃない。だれだって、それは知っている。よほどの確信がないかぎり、わたしは、ピアリビングルのおかみさんの意見に楯ついて、自分の意見を主張するなんて金輪際しやしない。だれがどう言おうともだ。

しかし、これは事実の問題だ。そして、その事実たるや、こおろぎがそこにいるという気配を示すよりも少なくとも五分まえに、やかんが始めたということだ。反論するなら、十分まえだ、と言ってやろう。

そもそもどんなふうに、ことが起こったのか、語ってみよう。次のような明白な事実がなかったなら、わたしは開口一番、そうしたはずだった——つまり、もしもわたしが話をしな

* オランダ時計の上部に乗っている、草刈り鎌をもった人形のこと。この人形が分銅の動きにつれて一秒ごとに大鎌を左右にぎくしゃくと振る仕掛けになっている。

ければならないとするなら、ことの起こりからは始めなくてはならない。ならば、やかんから始めないで、どうして、ことの起こりから始めることができようか？

とくとわかっていただきたいが、どうやら、やかんとこおろぎとのあいだには、試合、もしくは、腕くらべがあつたらしいのだ。そして、これこそ、ことが起こつたきつかけであり、ことが起こつたいきさつである。

ピアリングルのおかみさんは、冷え冷えする黄昏たそがれのなかへ出て行ていき、はいている。パティン*で中庭じゆうにユークリッドの第一定理+みたいな、粗雑な跡を無数につけながら、カタカタ音を立てて、濡れた石の上を渡つた——それから、ピアリングルのおかみさんは、用水桶のところではやかに水を満たした。やがてパティンを脱いだぶんだけ背が低くなつて

* どの道などを歩くときに靴の下に付ける履き物で、木底の下に高さ一インチか、二インチの楕円形の鉄製の輪が付いている。

+ 「ユークリッドの第一定理」は、二等辺三角形をとりかこむ相交わる二つの円にかかわるものであるが、ここでは、二つの円が交差しているような模様が地面に付いたことを言っている。「雪の朝二の字二の字の下駄の跡——捨女」を参照。

(それもずいぶん低くなって、というのはパティンは丈があつたけれど、おかみさんはいかにも背が低かつたのだ)、やかんを暖炉の火にかけた。

そうしながら、ピアリングルのおかみさんは機嫌を失つた、いや、いつとき、機嫌を置き忘れてしまつた。というのは、水が、気もち悪いほど冷たくて、パティンの環を含めて、あらゆる種類の物質に浸みとおるように思われる、あのつるつるすべる、雪解け水みたいな、^{みぞれ}霰のような状態になつていたので——おかみさんのつま先をぬらしたばかりか、脚にはねかかりさえしたからだ。

そして、だれしも自分の脚をだいぶ自慢にしており(それも、もつともな理由があつて)、そしてストッキングについてはとくにこぎれいに行つておるときには、こういうことは、その瞬間はがまんしかねるものなのだ。

おまけに、やかんは、腹ただしく、強情だつた。暖炉のいちばん上の^{きん}棧にちゃんと乗つかつてくれようとしないうし、石炭の小さな塊の上にすなおに落ち着くことも聞き入れようとしなかつた。やかんは、酔っぱらつたように、是が非でも前へつんのめつて、やかんの大ばか

者め、炉端に水をポタポタしたたらせるのだった。

やかんは、けんか腰で、火にむかつて不機嫌にシューシューいたり、水をはね散らかしたりした。とどのつまり、蓋ふたは、ピアリビングルのおかみさんの指に反抗して、まず、裏返しになり、つづいて、もっとりっぱな大義名分に使ったらよさそうな器用な頑固さを見せて、横ざまにやかんのなかに飛び込んで——どん底まで沈んでしまった。

そして、ロイヤル・ジョージ号*の船体が、海中から引き揚げられるときだって、ピアリビングルのおかみさんに再び引き揚げられるまえに、やかんの蓋がおかみさんに向かって示した、猛烈な抵抗の半分だってしはしなかつたのだ。

やかんは、そのときでさえ、ひどくむつりして、強情そうに見えた。けんかなら来いというふうに取っ手を持ちあげ、小生意気に口をぴんと立てて、ピアリビングルのおかみさんを馬鹿にするのだった。まるで、「沸騰なんかしてやらないぞ。だれが何と言ったって！」と言っているみたいに——。

* イギリスの旗艦で、一七八二年スピットヘッドで沈没した。

だが、ピアリビングルのおかみさんは、上機嫌をとりもどして、ぼちやぼちやした小さな手をこすり合わせてちりを落とし、笑いながらやかんのまえにすわった。とかくするうちに、陽気な炎は燃えあがり、また弱まって、オランダ時計のてっぺんにいる小柄な干し草作りをパツと照らしたり、かすかに光らせた。おしまいには、干し草作りは、ムーア風の宮殿のまえでじつと動かなくなり、動いているのは炎ばかりと思われるくらいだった。

けれども、干し草作りは、動いていた。一秒に二度ずつ、きちんと規則正しく、引きつけを起こしていた。でも、時計がまさに打とうとしているときのかれの苦しそうな様子ときたら、見るも恐ろしいほどだった。そしてカッコウが宮殿の引き戸から顔を出して、六度鳴き声をあげるとき、そのたびごとに、その声は、幽霊の声のように——あるいは、何か針金みたいなものが脚を引っ張ってでもいるように、干し草作りをガタガタゆさぶるのだった。

干し草作りの真下の錘おもりとロープの激しい動揺と、ぐるぐるまわる騒音がすっかり静まっではじめて、このびっくりした干し草作りは、正気に返るのだった。かれが肝をつぶしたのも無理はない。なにしろ、こうした、ガラガラいう、骸骨みたいな柱時計は、作動するとき

ひどく人をまごつかせるものだからだ。

そこで、いったい、どういうやからが、とりわけ何だつてオランダ人が、こんなものを発明したがつたのか、わたしは大いに不思議に思っている。一般に信じられているところでは、オランダ人は、だぶだぶの服を着込み、下半身にやたら衣類をまとうのが好きだと言われている。だから、かれらは、柱時計をあんなにひどくひよる長く、無防備にしておくなんてばかなまねは、絶対にしないはずなのだ。

ほら、まさにそのときだったのだ、やかんが楽しく夜を過ごしはじめたのは！

まさにそのときだったのだ、やかんが、次第にやわらかく、美しい、音楽的な声になってきて、もうどうにも、のどの奥でゴロゴロという音を立てずにはいられなくなって、はじめのうちこそ、まだあいそよくする決心がつきかねているかのように抑えていた、短い、響きがいい声で、夢中になって鼻を鳴らしはじめたのは！

まさにそのときだったのだ、お祭り気分を押さえつけようと無駄な試みを二、三度してみただあとで、気むずかしさも、遠慮も、すっかりかなぐり捨てて、涙もろいナイチンゲールさ

えとても思いつかなかったような、気もちのいい、晴れやかな、流れるような歌を、いきなり歌いはじめたのは！

それに、いかにもわかりやすい歌！ いやはや、本のようにたやすく理解できたかもしれないような歌——ひよつとしたら、読者やわたしに挙げられる本よりも、もっとよく理解できたかもしれないほど、わかりやすい歌だった。

やかんの暖かい呼気が白い雲となって噴き出して、楽しげに、優雅に、二、三フイート立ちのぼり、それから、そこを室内の自分の空と見立てて、炉辺にたれこめた。そして、鉄でできた身体からだがブンブン音を立てて、火の上で揺れたくらい威勢のよい快活さで、朗々と歌ったので、蓋までが、ついさつきまで反抗していた蓋までが——素晴らしいお手本の影響力とは、ざっとこんなものだ——ジググみたいな踊りを踊りだし、相棒の扱い方をまるつきり知らない、耳も聞こえず口もきけない新米のシンバルのように、ガチャガチャ音を立てた。

このやかんの歌が、だれか戸外のひと、その瞬間、居ごこちよい小さな家と、勢いよく燃える暖炉に向かって進んでくるだれかにとって、招待と歓迎の歌であったことは、みじんも

疑いがない。ピアリピングルのおかみさんは、暖炉のまえで物思いにふけりながらすわっていたとき、そのことをはっきり知っていた。

やかんは、こう歌った——暗い晩だ。道端には、朽葉がつもっている。上空は、どこもかしこも霧と暗やみが立ちこめ、下は、どこもかしこもぬかるみと粘土ばかり。陰鬱な、曇っている外気全体のなかに、ただひとつ、明るい点がある。明るい点と言っているのかどうか。それは、濃い、怒ったような深紅色のざらざらする光にすぎないのだから。そこは、太陽と風とが力を合わせて、こんな天気にしてしまったのはおまえのせいだ、と雲に烙印を押ししたところだ。そして、いかにも広々とした、さえぎるものもない田舎は、長い、単調な、黒々とした一条の筋に見える。道しるべの上には白霜、小道には雪どけ水、氷は水でなく、そして水は自由の身ではない。何もかも本来あるべき姿をしていない。でも、かれが帰ってくる、帰ってくる、帰ってくる！

そして、はばかりながら、このときだったのだ、こおろぎが本気で調子を合わせはじめたのは！ コーラスのつもりで、ものすごくでっかい、リ・リ・リ、リ・リ・リ、リ・リ・リ！ という鳴

き声で加わったのだ。やかんとくらべれば、びっくりするほどからだの大きさ（大きさだつて！ だって、見えないじゃないか！）と釣りあわない声だったので、たとえ、そのときその場で火薬をつめすぎた鉄砲のように暴発したとしても、また、その場で犠牲者として倒れ、リ・リ・リ・リ……と鳴いて、小さいからだを粉々にしてしまったとしても、それは、当然の、避けられない結果であり、こおろぎは、そういう結果をわざわざ求めていたのだと思われたことだろう。

やかんは、ついに独唱を終えていた。やかんは、衰えることのない意気込みで歌いつづけたが、こおろぎが、第一ヴァイオリンを弾いて、ゆずらなかった。あれまあ、なんとリ・リ・リ、リ・リ・リと鳴いたことか！ そのかん高く、鋭い、刺し通すような声は、家じゅうに鳴りひびき、外の暗やみのなかで星のようにキラキラ光るように思われた。

いちばん声高のときには、そのなかに名状しがたい、細い、震え声とおののきがあつて、それでこおろぎが強烈な熱狂のあまり、有頂天になって、また跳ねたくなっていることがわかった。それにしても、かれらはとてもうまくやっていた、こおろぎとやかんは。歌のリフ

レインは、依然として同じで、前よりもいよいよ、ますます声高に、競い合って、それを歌った。

美しい小柄な聞き手は——というのは、ピアリビングルのおかみさんは、美しくうら若かったのだ。ただし、ちよっぴり、いわゆるぼちゃぼちゃした体型をしていたが、わたし自身はそれをとやかく言うつもりはない——ロウソクに火をつけ、柱時計のてっぺんで、毎分、かなり平均したリズムで鎌を左右に振っている干し草作りをちらりと見、それから、窓の外を見たが、窓ガラスに映った自分自身の顔のほかは、暗やみのために何も見えなかった。そして、わたしの意見は（読者もきつと同感だと思うが）、たとえば、おかみさんがずっと遠くの方をながめたとしても、彼女の顔の半分ほども気もちのいいものは何も見えなかっただろう、というものである。

ピアリビングルのおかみさんが戻ってきて、もとの席にすわったとき、こおろぎとやかんは、なおも、まったくすさまじい勢いで、歌くらべをつづけていた。やかんの弱点は、明らかに、いつ、自分が勝負に負けたのかわからない、という点だった。

そこには競走のすべての興奮があつた。リ・リ・リ、リ・リ・リ！ こおろぎが一マイルさき。ブン、ブン、ブーン！ やかんは、大ごまのように、遠くのほうでがんばっている。リ・リ・リ、リ・リ・リ！ こおろぎがコーナーをまわつた。ブン、ブン、ブーン！ やかんは、かれなりにこおろぎにくつついている。負けるなんて、まるで考えてはいない。リ・リ・リ、リ・リ・リ！ こおろぎはいよいよ元気だ。ブン、ブン、ブーン！ やかんは、ゆっくりだが、着実だ。リ・リ・リ、リ・リ・リ！ こおろぎは、相手をやっつけようとかかっている。ブン、ブン、ブーン！ やっつけられるもんか、とやかん。

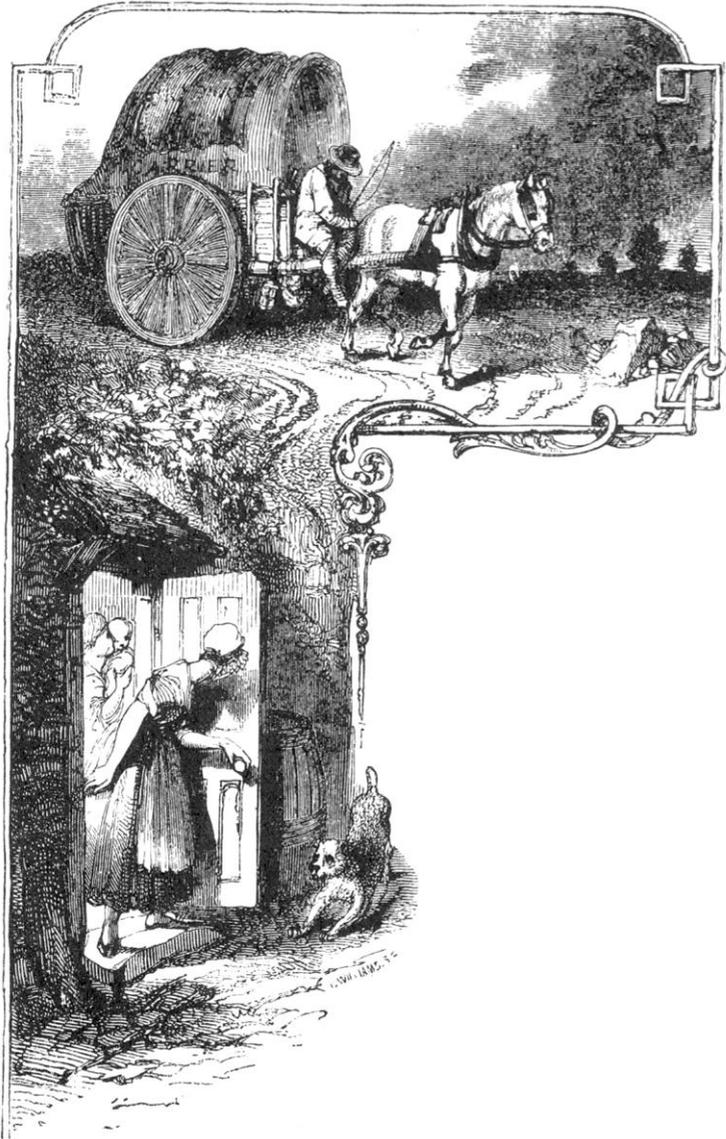
とうとう、おしまいには、かれらは試合であわてふためき、あたふたしたものだから、ごつちやになつてしまつて、やかんがリ・リ・リと鳴いて、こおろぎがブン、ブンと言つたのか、こおろぎがリ・リ・リと鳴いて、やかんがブン、ブン言つたのか、それとも両方とも、リ・リ・リと鳴いて、両方ともブン、ブンと言つたのか、いやしくもそれを正確に決めようとすれば、読者やわたしよりもっと明晰な頭脳が必要だつただろう。

だが、このことだけは疑いがない。やかんとこおろぎが、まったく同時に、かれら自身に

しかわからない、ある融和力によって、窓から外へ、そして小道のはるか遠くまで輝き出ているロウソクの光のなかに、めいめい、炉辺の慰めの歌をそそぎこんだのである。そして、この光は、その瞬間、暗やみを縫ってロウソクの光にむかつて近づいてきたひとを、突然、パツと照らし、文字どおり瞬またたくまに、万事をそのひとに告げて、こう叫んだのた。「お帰んなさい、親分！ お帰んなさい、大将！」

この目的を達成するや、やかんは、くたくたに疲れ切って、吹きこぼれ、火から下ろされた。ピアリビングルのおかみさんは、それから戸口へ走っていった。そこでは荷馬車の車輪の音、馬のひづめの音、男の声、興奮した犬が勢いよく飛びこんで来たり、飛び出していくのやら、赤んぼうが不意に、そして不思議にも姿を見せたことやらで、まもなく大騒ぎがもちあがった。

赤んぼうがどこからきたのか、また、ピアリビングルのおかみさんが、どのようにして一瞬のうちにそれを受け取っていたのか、わたしにはわからない。だが、生きた赤んぼうがピアリビングルのおかみさんの腕に抱かれていた。そして、彼女よりもはるかに背が高く、は



るかに年上の、がっしりした体つきの男にやさしく炉辺のほうへいざなわれていったとき、おかみさんは、赤んぼうにかなりの誇りをもっているように思われた。男は、おかみさんにキスする ため には ず っ と 下 ま で 腰 を か が め な く てはならなかった。だが、おかみさんにはそうするだけの価値があつたのだ。腰痛もちの六フィート六インチの大男だって、そうしたかもしれない。

「おやまあ、ジョンー！」

ピアリビングルのおかみさんは言った。

「こんなお天気のせい、なんてひどい格好をしているのでしよう！」

ジョンは、まぎれもなく、天気のため相当ひどい格好であつた。濃い霧が、解けたキャンデーのように、まつ毛の上にとろっとした塊りとなつてぶら下がり、霧と火がいつしよになって、ほおひげにまで虹がかかっていた。

「だって、おちびさん、わかるだろう」

ジョンは、首に巻いたえり巻きを取って、両手を暖めながら、ゆっくりとした口調で答えた。

「夏の天気とはちよつぷり違うよ。だから、不思議はないさ」

「あたしのこと、おちびさんなんて呼んでほしくないわ、ジョン。あたし、そう呼ばれるの好きじゃないの」

ピアリビングルのおかみさんは、そう呼ばれることが本当、に大好きだということを、はっきりと示すような口調で、口をとがらせて言った。

「それじゃあ、ほかの何だい？」

ジョンは、ほほえみながら、妻を見おろし、そして、かれのでっかい手と腕が許すかぎり、やんわりと妻の腰を抱きしめながら答えた。

「おちびさんが……」

ここで、ジョンは、赤んぼうの方をちらつと見た――

「おちびさんが赤んぼうを抱いて*――いや、やめておこう。しやれを台なしにするといけ

* 算数の加算で一〇になると「点を打ってひと桁あげる」ことを a dot and carry と言うが、ここでは「ちびが（赤んぼうを）抱いて」の意味をきかせたもの。

ないからな、しかし、もうちよつとで、しやれになるところだったね。こんなにもうちよつとつてことは、これまででないよ」

かれ自身に言わせれば、何かとても気のきいたことを言いそうになったことがしばしばあった、このドタドタと歩く、動作ののろい、正直者のジョンは。このジョンは、とても重たいが、気もちはとても軽やかで、表面はとてもがさつだが、心のなかはとてもやさしく、外面はとても鈍いが、内面はとてもはしっこく、とても鈍重だが、とても善良だった！ おお、母なる自然よ、この貧しい運搬屋の胸に秘められた——ついでながら、かれは運送屋にすぎなかった——本物のこころの詩を、あなたの子どもたちに授けたまわんことを！ そうすれば、あなたの子どもたちが散文を話し、散文の生活を送ることも耐えることができるし、また、かれらを友としてつきあえることに対して、あなたを祝福することができるのだ！

ちびが、小さなからだつきで、赤んぼうを、ほんとに人形のような赤んぼうを抱いて、甘えた、考えこんでいるような風情で、暖炉の火をちらちら見やりながら、奇妙な、半ば自然な、半ば氣どつた、そして全身で寄り添うような、気もちよさそうな仕草で、運送屋の大

きな無骨なからだに、小さな華奢な頭をもたせかけているのを見るのは愉快だった。

ジョンがやさしくも不器用に、自分の粗野な支えを、ちびの小さい必要に適用させようと、がつしりした中年男のからだを、ちびの花盛りの若さに不似合いではない、寄りかかるためのつえにしようと努力しているのを見るのは、愉快だった。

ティリー・スロウボーイが、赤んぼうを渡されるのをうしろで待ちうけながら（十三歳になったばかりのくせに）、寄り添っている二人に特別な注意を払って、口と目を大きくあけて、頭をまえに突き出し、その光景が空気でもあるかのように吸いこんでいるのを見るのは、愉快だった。

また、運送屋のジョンが、さきに述べた赤んぼうのことをちびに言われて、いましもその赤んぼうにさわろうとしたときに、もしかしてこわすかもしれない、と考えでもしたように手を引っこめ、身をかがめて、気だてのよいマスティフ犬が、いつかカナリヤのひなの父親になったら、きつと見せるような、一種の戸惑いと誇りをもって、安全な距離をおいてながめているのを見るのは、これまた楽しいことだった。

「この子、きれいじゃない、ジョン？ 眠っているところなんか、すっごくかわいらしいじゃない？」

「とてもかわいいよ」

ジョンが言った。

「とつてもかわいいよ。この子は、たいてい、ほんとに眠っているんじゃないかね？」

「まあ、ジョンたら！ とんでもないわ！」

「そうかい」

考えこみながら、ジョンが言った。

「この子の目は、たいてい、閉じられてると思っていたんだがな。おーい！」

「まあ、ジョン、ほんとにびっくりするじゃないの！」

「この子がそんなふうに目を上に向けるのは、よくないんじゃないかな、ん？」

びっくりしたジョンが言った。

「ごらんよ、両方の目を同時にぱちぱちさせているぜ！ それに、口をごらんよ！ ほら、

金魚か銀魚みたいにハーハー息をしている！」

「あなただって、おとうさんになる資格はないわね。ほんとよ」

ちびは、経験豊かな主婦のように、威厳をこめて言った。

「でも、子どもがどんな小さな病気に苦しむものか、あなたにはわかりっこないわね、ジョン！ あなたって、病氣の名前さえ知らないんですものね、このおばかさん」

そして、ちびは、赤んぼうを左腕にうつぶせにして、気つけとして背中をピシヤリとたたいたあとで、笑いながら夫の耳をつねった。

「そうだよ」

ジョンは、外套を脱ぎながら言った。

「まったくそのとおりだよ、おちびさん。おれは、そういうことはあんまり知らないな。」

おれの知っているのは、ただ、今夜はかなり頑固に風と戦ってきたことだけさ。家へ帰る途中ずっと、北東の風が吹きまくって、荷馬車のなかまでまともに吹きこんできたんだよな」

「かわいそうに、あなた、そうだったの！」

ピアリングルのおかみさんは叫んで、すぐにてきぱきと働きはじめた。

「さあ！ ティリー、あたしがちよつと用事をするあいだ、大事な赤ちゃんを預かっててちょうだい。まあ、かわいい、この子が息ができなくなるまでキスしたいくらいよ、ほんとによ！ さあ向こうへお行き、ワンちゃん！ 向こうへお行き、ボクサー！

でも、まずお茶を淹れましょうね、ジョン。それから、小包のお手伝いをするわ。せわしいミツバチみたいだね。へ小さいせわしいミツバチは*——とかなんとか言うのよね、ジョン。学校へ行ってたとき、へ小さいせわしいミツバチは▽つて歌、習ったことあった、ジョン？」

* アイザック・ウォッツ（一六七四—一七四八）の「怠惰といたずらを諫める」という教訓詩の第一節からの引用。

小さいせわしいミツバチは

明るい毎時間を利用して

すべての開いたお花から

ひねもす蜜を集めている

「全部はおぼえてないな」

ジョンが答えた。

「もうちよつとでおぼえてしまふところだったんだよ、一度ね。でも、たぶん、それを台なしにするのがおちだったろうよ」

「ハ、ハ」

ちびは笑った。ちびは、この上もなく楽しそうな、小さな笑い方をするのだった。

「なんてかわいいおばかさんなんでしょう、あなたって、ジョン、ほんとに！」

この意見にちつともさからわないで、ジョンは、戸口と窓のまえをあちらこちら、キツネ火のように踊っているカンテラをもった少年が、馬の世話をちゃんとやっているかどうかを見とどけに、外へ出ていった。馬は、そのサイズをお教えしても、とても信じてもらえないほど太っていた。また、非常に年をとっているの、誕生日は太古の霧のなかに消えてしまっていた。

ボクサーは、自分の気配りは家族全般にあたえるべきであり、しかも公平に分配しなければ



ばならないと感じて、あきれるほどの移り気を發揮して、家のなかへ駆け込んだり、外へ飛

び出したりした。いま馬小屋の入口でブラシをかけてもらっている馬のまわりを、ワン、ワンほえながら、くるくる回っていたかと思うと、こんどは、女主人に荒々しく飛びかかるふりをして、急にひょうきんに、ぴたっと立ち止まったりした。

かと思うと、暖炉のそばの低い子守椅子に腰かけているティリー・スロウボーイの顔に、不意に湿った鼻づらをくつつけて、ティリーにキヤーツと悲鳴をあげさせた。かと思うと、赤んぼうに出しやばりの興味を示したり、次には、暖炉のあたりをくるくる回って、今夜はそこに腰を落ち着けるんだとばかり横になったりした。

かと思うと、再び起きあがって、いま約束を思い出したので、それを果たすために外出するところだと言わんばかりに、あるかないかわからないほど短いしっぽを振り振り、悪天候のなかへトコトコ早足で出ていったりした。

「さあ！ 炉棚の上に、ティーポットの用意ができましたよ！」
ちびは、ままごとをしている子どものように、きびきびと忙しそうに言った。

「それに、冷えたひざ肉のハムもあるわ。バターもあるわ、パリパリしたパンも、何もか

もあるわよ！ 小包みがあるのなら、それを入れる洗濯かごがここにあるわ——ジョン、どこにいるの！ かわいい赤ちゃんを、炬格子の下へ落とすしちやだめよ、テイリー、何をしていますね！」

スロウボーイ嬢は、この注意をやや活発にはねつけたけれど、この娘については、この赤んぼうを危ない目に遭わせる、まねな、驚くべき才能を持ちあわせていて、彼女特有のもの静かなやり方で、この赤んぼうの短い命を危険におとし入れたことが過去何回かあったということは、心にとめておいてもよいかもしれない。

この若いご婦人は、やせこけて、棒を飲んだような姿勢をしているので、そのとがった木釘のような肩にゆるくかかっている衣服が、たえずすべり落ちる危険がありそうに思われた。彼女の服装は、へんてこな仕立てのフランネルの下着が、ことあるごとにちよこちよこのぞいて目につくことと、また、背中のあたりに、くすんだ緑色のコルセットがちらちら見えることで目立っていた。

つねにあらゆることに口をぽかんとあけて感心し、おまけに、奥さんと赤んぼうの非の打

ちどころのない様子をたえずつくづく見ほれていたの、スロウボーイ嬢は、ちよっぴり判断を誤って、自分の頭と心にも同等の敬意を表していた、と言っていいかもしれない。

そのため、赤んぼうの頭のほうはそれほど優遇しないで、モミ材のドア、食器棚、階段の手すり、寝台の柱、その他ほとんどもない物にときどきぶつける羽目になったけれど、その判断の誤りは、とりもなおさず、テイリー・スロウボーイが、自分がそんなにも親切に扱われ、そんなに居ごこちのよい家庭に置いてもらっていることに気づいて、たえず驚いていることの正直な結果であった。

というのは、スロウボーイの両親は、ともに名もない人たちで、テイリーは、養育院で棄^{フアウドリング}て、児として育てられたからである。この単語は、愛^{フォンドリング} 児と母音ひとつの長さしか違わないのだが、意味はずいぶん異なっていて、まったくべつなものを表しているのだ。

小柄なピアリビングルのおかみさんが、夫とともに戻ってきて、洗濯かごをそれはもう一生懸命に引っぱるのだが、なんの役にも立っていないのを見れば（というのは、夫が運んでいるのだから）、夫を楽しませたのとほとんど同じくらい、読者を楽しませたことだろう。

それは、おそらく、こおろぎを楽しませたかもしれない。とにかく、たしかに、こおろぎは、いままたもや、リ・リ・リ、リ・リ・リと猛烈に鳴きだしたのだ。

「やあやあ！」

ジョンは、例によってゆっくりとした口調で言った。

「今夜は、いつもより陽気に鳴いているみたいだね」

「そして、きっとあたしたちのところに幸運をもってくるのよ、ジョン！ これまでも、いつもそうだったわ。炉端にこおろぎがいるのは、世界じゅうでいちばん幸運なんだわ！」

ジョンは、妻こそがかれのこおろぎの頭かしらであるということをも、もうちよつとで考えつくところだった、と言いでもするかのように、妻の顔を見た。そして、妻の言うことに全面的に賛成した。しかし、それは、おそらく、例によって間一髪というやつだった。というのは、ジョンは何も言わなかったからである。

「あたしをはじめて、こおろぎの快活な、かわいい歌を聞いたのはね、ジョン、あなたがあたしをうちへ連れてきた、あの晩のことだったわ——あなたが、あたしをここの新しいおう

ちへ連れてきてくれたときよ、小さな主婦としてね。かれこれ一年前のことよ。あなたおぼえている、ジョン？」

「そうとも。ジョンはおぼえていた。もちろん、そうに決まっている！」

「あのリ・リ、リ・リ・リーという鳴き声は、あたしにとつて、それは大変な歓迎だったわ！ 将来の約束と激励でみちあふれているようだったわ。あれはこう言っているみたいだった。あなたは、あたしに親切にやさしくしてくれるでしょう。そして、あなたの愚かな、小さい妻の肩の上に、賢いおつむがのっかっているなんて期待しないでしようよ、ってね（あつむのとき、あたし、そのことが心配だったのよ、ジョン）」

「ジョンは考えこんで、そうとも、そうとも、そんなことは期待してはいなかった、おまえの肩もおつむも、あるがままに受けいれて満足していたんだ、と言うかのように、妻の一方の肩をぼんとたたき、つづいて、頭をなでた。実際、そうするのも無理はなかった。肩も頭も、たいそう魅力的だったのである。」

「こおろぎが、そう言ったような気がしたときにね、ジョン、本当のことを言っていたん

だわ。だって、あなたはあたしにとって、たしかに、いつもいちばんよい、いちばん思いやりのある、いちばん愛情深いだんなさまでしたもの。ここは幸せな家庭だったわ、ジョン。それだから、あたし、こおろぎが大好きなの！」

「それじゃあ、むろん、おれもそうだよ」

運送屋は言った。

「おれだってそうだよ、おちびさん」

「あたし、こおろぎが大好きよ、何度も何度も鳴くのを聞いてきたし、その無邪気な音楽がいろいろの思いをあたえてくれたんですもの。ときどき、日暮れどきにちよっぴり寂しく、沈んでいるときにね、ジョン——赤ちゃんが生まれて、あたしの相手になって、家のなかを陽気にしてくれるようになるまえのことよ——あたしがもし死んだら、あなたがどんなに寂しがるだろうかとか、あなたがあたしを失くしたことを、もしあたしにわかったとしたら、あたしはどんなに寂しがるだろうか、って考えたときにね、ジョン、炉端のリ・リ・リ、リ・リ・リという鳴き声は、あたしにとっては、すつごく美しい、すつごくいとしい、もう

ひとつの小さい声のことを告げているように思えたの。そして、その声の近づくのが聞こえたとき、あたしの心配は夢のように消えてしまったの。

そして、あたしがよく心配していたとき——あたし、かつてはほんとに心配したのよ、ジョン、あたしって、若かったでしょ——あたしたちの結婚は、不釣り合いな結婚ってことになるんじゃないだろうか、あたしはまるつきり子どもで、あなたはあたしの夫というよりも、むしろ保護者といったところでものね。そして、あなたがどんなに一生懸命努力したって、あなたが望んだり祈ったりしているようには、あたしを愛することができないんじゃないかって、ね。そのリ・リ・リ、リ・リ・リという鳴き声が、あたしを再び元気づけ、あたしの心にあらためて信頼と自信を満たしてくれたのよ。今夜あなたが帰ってくるのを待ちながら、あたし、こんなことを考えていたの。だから、こういったことのために、あたしはおおろぎが大好きなんだわ！」

「おれだってそうだよ」

ジョンはくりかえして言った。

「だが、おちびさん？ おれが、おまえを愛するようになりたいと願ったり祈ったりしたんだって！　なんてことを言うんだい！　おまえをここに連れてきて、あのこおろぎの小さな女主人にするずっとまえから、おれは、おまえを愛するようになってたんだぜ！」

ちびは一瞬、片手を夫の腕に置いて、心かき乱されたような顔つきで、夫を見あげた——まるで、何か夫に言おうとしたかのように。次の瞬間、かごの前にひざまずいて、陽気な声でしゃべりながら、せつせと小包をえり分けていた。

「今夜はたくさんはないのね、ジョン。でも、ついさつき、荷馬車のうしろに荷物がいくつも見えたわ。手間はいつそうかかるかもしれないけど、それだけ引き合うわけでしょう。だから、不平を言う理由なんかないわね、でしょ？　それに、あなたは帰る道すがら、たぶん、配達してきたんでしようし？」

「ああ、そうだよ」

ジョンは言った。

「相当たくさんね」

「おや、この丸い箱はなあに？ おやまあ、ジョン、ウエディングケーキじゃあないの！」

「女っていうものは、ほうつといても、そういうものを嗅ぎつけるんだね」

ジョンは、感心したように言った。

「ところが、男だったら、そんなことは絶対考えつかなかっただろうね！ 一方、こいつはおれの信念なんだが、たとえ茶箱のなか、折りたたみ式寝台の台、塩漬けのサケの樽のなか、あるいは、どんなに思いもよらぬもののなかにウエディングケーキを詰めておいたって、女なら必ず、たちどころに見つけ出すだろうよ。そうだよ、ケーキ屋さんのところに、それを取りに立ち寄ったのさ」

「それに、あたしには見当もつかないくらいの重さがあるわ——まるまる百ポンドはあるわね！」

ちびは、それを持ちあげようと、大げさな身ぶりをしながら叫んだ。

「これはだれの、ジョン？ 届け先はどこなの？」

「裏に書いてある宛先を読んでごらん」

ジョンが言った。

「あら、ジョン！　これは驚いたわ、ジョン！」

「ああ、だれだって思いもよらなかっただろうて！」

ジョンは答えた。

「まさか、あなた」

床にすわって、相手にむかってかぶりを振りながら、ちびはことばをつづけた。

「まさか、おもちゃ屋のグラフ・アンド・タクルトンだって言うんじゃないでしょうねえ！」

ジョンは、うなずいた。

ピアリビングルのおかみさんも、また、少なくとも五十回はうなずいた。賛成してではなく——黙りこくり、憐れみと驚きをこめて。そのあいだ、ありったけの小さい力をこめてくちびるをゆがめ（そのくちびるは、決してゆがめるために作られたのではない。それはもうたしかだ）、茫然として、穴のあくほど、善良な運送屋の顔を見つめていた。

一方、そのあいだ、赤んぼうをあやすために、いま話されている会話の断片から、意味を

すっかり抜きとって、名詞という名詞を複数に変えて機械的に口真似をするという才能に恵まれていたスロウボーイ嬢は、その幼い赤んぼうに大声でたずねていた。じゃあ、それはおもちや屋たちのグラフ・アンド・タクルトンたちでしたかとか、あなたは、ウェディングケーキたちを買いにケーキ屋さんたちのところへ寄りますかとか、おとうさんたちが箱たちを家々に持ち帰ったとき、おかあさんたちは、その箱たちのことを知っていたのですか、などなど。

「それじゃあ、そんなことが本当に起ころうとしてるのね！」

ちびが言った。

「だって、彼女とあたしは、少女のころいっしょに学校へ行ってたのよ、ジョン」

ジョンは、その学校時代のままの妻のことを考えていたかもしれない、ひよつとしたら、もうちよつとで考えるところだったかもしれない。ジョンは、うれしそうに、考えこみながら、妻をじっと見ていたが、ひとことも返事はしなかった。

「それに、あのひと、あんなに年寄りよ！ 彼女にはとても不釣り合いだわ！ —— っ

たい、あなたよりいくつ年上なの、ジョン、グラフ・アンド・タクルトンって？」

「はて、おれは今晚一回で、グラフ・アンド・タクルトンが四回に飲むぶんよりも、何杯多く飲むんだろなあ！」

ジョンは、上機嫌に答えて、丸テーブルの方へ椅子を引きよせ、コールドハムを食べはじめた。

「食べることにかけては、おれはわずかしか食べないが、そのわずかをおれは楽しんで食べるんだよ、おちびさん」

このことでさえ——食事時のジョンのいつもの感想で、無邪気な思いちがいのひとつでさえ（というのには、ジョンの食欲はつねに旺盛で、ジョンの言うこととは、はっきりと矛盾していたのだ）、ジョンの小さな妻の顔に微笑を浮かべさせなかった。

ちびは、小包にかこまれて立って、一方の足でゆっくりとケーキ箱を押しやり、目は下に向けられていたけれど、いつもあんなに大事にしている、きゃしゃな靴は一度も見なかった。

思いにふけて、ちびはお茶のことも、ジョンのことも気に留めずに、そこに立っていた

(ジョンは妻に声をかけ、妻をびっくりさせようと、ナイフでテーブルをコツコツたたいたのだけれど)。

とうとう、ジョンは立ちあがって、妻の腕にさわった。すると、ちびは、ちよつとジョンを見、それから、自分がうっかりしていたことを笑いながら、急いで茶盆のうしろの自分の席へもどっていった。しかし、前のような笑いではなかった。笑い方も、快い笑い声も、すっかり変わっていた。

こおろぎもまた、鳴きやんでいた。なぜかしら、部屋もまえほど陽気ではなくなった。似てもつかないものになってしまった。

「それで、小包はこれで全部なのね、ジョン？」

長い沈黙を破って、ちびは言った。その沈黙のあいだ、正直者の運送屋は、例のお気に入りたの所感の一部を実際に例証することに専念していた——つまり、ごくわずかししか食べないというのは認められなかったにせよ、たしかに、食べるものは味わいながら食べていた。

「それじゃ、小包はこれで全部なのね、ジョン？」

「それで全部だよ」

ジョンが言った

「いや——まてよ——こりや——」

ナイフとフォークを下に置いて、長く息を吸みながら言った。

「こりや大変だ——あの老紳士のことをきれいに忘れちゃってた！」

「老紳士って？」

「荷馬車のなかだよ」

ジョンは言った。

「わたのなかで眠っていたんだよ、最後に見たときには。家んなかにはいつてから、二度ばかり、もうちよつとであのひとのことを思い出すところだったんだが、また頭からすっぽり抜けちゃまったんだ。おーい！　もしもし、そのひと！　起きた、起きた！　そうそう、それでこそりっぱな男だ！」

ジョンは、ロウソクを手にして、あわててドアの外へ飛び出して、そこで、こういう後半

のことばを言ったのだ。

スロウボーイ嬢は、何か神秘的にへ老紳士^{*}のことが言われているのを感じて、まごついた想像のなかで、そのことばから宗教的な、ある連想をしたため、ひどく動揺して、暖炉のそばの低い椅子からあわてて立ちあがり、女主人のスカートの近くに庇護をもとめて、戸口を横切ろうとしたときに、見知らぬ老人とぶつかったので、本能的に手のとどく範囲内にあつたただひとつの攻撃用の道具で、相手に突撃、というよりも頭突きをくらわせた。

この道具がたまたま赤んぼうだったので、大変な騒動と恐慌がつづいて起こり、その騒ぎをまた、利口者のボクサーが大いに増大する結果になった。というのは、この善良な犬は、主人よりも思慮深かったので、眠っている老紳士が、荷馬車のうしろにしばらくつけてある、二、三本のポプラの苗木を盗んで逃げると大変だから、どうやら見張りをしていたらしいのだ。そして、なおも老人のあとをびったりと付きまとい、実際に老人のゲートルをくわえ

* 「老紳士」(The Old Gentleman)と各語を大文字ではじめるとは、戲言的に「悪魔」という意味で用いられる。スロウボーイ嬢は、老紳士をこの意味にとって狼狽したのである。

たり、ボタンめがけて猛攻撃を加えたりした。

「あなたは、真正正銘、よく眠るお方ですな」

ジョンは、静けさがもとに戻ったときに言った。そのあいだ、老紳士は帽子を脱いだまま、身じろぎもせずに、部屋の真ん中につっ立っていた。

「だから、ほかの六人*はどこいるのかと聞いてみたくなりますよ——でも、それじゃあ、しやれになっちまうでしょうよ。だから、わたしが言ったんじや台なしになるに決まってるよ。でも、もうちよつとでしたね」

運送屋は、くつくつと笑いながらつぶやいた。

「ほんとに、もうちよつとのところでした！」

その見知らぬひとは、長い白髪をしていて、老人にしては奇妙に輪郭のはっきりした、端

* 「ほかの六人」——紀元二五〇年ローマのデキウス皇帝がキリスト教徒を弾圧したとき、エフェソスの七人の青年貴族が洞窟にとじこめられたが、奇跡的に一八七年間眠ったあと救助された。キリスト教会史のなかの伝説。ギボンの『ローマ帝国衰亡史』の第三三章に記述がある。

正な顔たちをし、黒い、キラキラした、射るような目のもちぬしだったが、微笑を浮かべてあたりを見まわし、それから、運送屋のおかみさんに重々しく頭を下げてあいさつした。

その服装はひどく風がわりで、へんてこで——ずっと、ずっと時代おくれだった。その色合いは、どこもかも茶色だった。手には大きな茶色の棍棒、いや散歩用のステッキをもっていった。これを床にたたきつけると。バラバラになって。腰掛けになった。その上に、落ち着き払って腰を下ろした。

「ほら！」

運送屋は、妻のほうを向きながら言った。

「おれが見つけたときも、あんなふう道端にすわっていたんだよ。一里塚みたいにしやきつと背すじを伸ばしてね。しかも、それに負けないくらい耳が聞こえないんだ」

「戸外にすわってたんですって、ジョン！」

「戸外にだよ」

運送屋は答えた。

「ちょうど日暮れどきだった。へ運賃払い済み〜と言って、十八ペンスくれたんだよ。それから荷馬車に乗ったんだ。それで、そこにいるわけさ」

「いまに出ていくんでしょね、ジョン！」

とんでもない。かれは、しゃべろうとしていただけだった。

「すみませんが、わたしは呼びにこられるまでは、留め置きということになったんです」
見知らぬ男は、穏やかな口調で言った。

「気にせんでください」

そう言って、大きなポケットのひとつからは眼鏡を、もうひとつのポケットからは本をとりだして、ゆつくりと読みはじめた。ボクサーのことなんか、あたかも家で飼っている子羊みたいに、てんで気に留めていなかった！

運送屋と細君は、困ったような視線を交わした。見知らぬ男は、顔をあげて、細君から運送屋へとちらっと視線を走らせて言った。

「娘さんですか、あなた？」

「女房ですよ」

ジョンが答えた。

「めいごさんかな？」

よそ者は言った。

「女房ですよ」

ジョンは、怒鳴った。

「まさか？」

よそ者は言った。

「ほんとうに？ とてもお若い！」

かれは、静かに向きなおって、読書をつづけた。しかし、ものの二行も読まないうちに、再び読むのをやめて言った。

「赤ちゃんは、あなたのですかな？」

ジョンは、相手にむかつてすごく大きくうなずいた。あたかも、メガホンでそうだと言っ

たのに相当するほどの大きなうなずきだった。

「女の子ですか？」

「おとこーの子！」

ジョンは、怒鳴った。

「ほんとですか？ ひどくお若い！」

ピアリビングルのおかみさんが、すぐ口をはさんだ。

「二か月と三日です！ ちょうど六週間まえに種痘したばかりです！ とつてもうまくつきまゝした！ お医者さまは、すつごく美しい子どもだ、と言っておられます！ 生まれて五か月めの子どもの平均と同じです！ 物の見分けもつくようになりました、とつてもすばらゝしく！ あなたには本当とは思えないかもしれませんけど、もう立つちもできまゝす！」

息を切らした小さな母親は、きれいな顔が真っ赤になるまで、このきれぎれのことばを、老人の耳もとで金切声で叫んでいたが、ここで動かしがたい、誇らかな事実として、老人の

前に赤んぼうをかざして見せた。

一方、テイリー・スロウボーイは、ケッチャー、ケッチャーという調子のよい叫び声——それは、みんながよく知っている「くしやみの歌」*の節をつけた、だれも知らないことばのように響いた——をあげながら、まったく無意識の、あどけない幼児のまわりを、牝牛のようにはね回った。

「ほら！ このひとの迎えが来たぞ、まちがいない」

ジョンが言った。

*ここは、『マザーグース』のなかの「バラの輪」という、次の歌を背景にしている。

バラの輪をつくりましょ

ポケットにはお花がいっぱい

ひとつはあなた、ひとつはわたし

もうひとつはモーゼちゃんに——

ハクシヨン、ハクシヨン、みんなで倒れましょ

ハクシヨンに相当する英語は *Hush-a, Hush-a* で、スロウボーイ嬢の *Ketcher, Ketcher* と音声的な類似がある。

「戸口にだれかやって来た、あけておやり、ティリー」

けれども、ティリーがそこまで行かないうちに、ドアは、外からあけられた。それは、いささか原始的なドアで、掛け金についてはいるが、だれでもその気になれば、はずせるのだった——そして、その気になったひとは、事実、非常にたくさんいた。というのは、運送屋自身はあまりおしゃべりではなかったけれど、あらゆる種類の隣人が、かれと愉快なことをひとこと、ふたこと交わしたがっていたからだ。

ドアがあけられると、一人の小柄な、やせた、考えこんだような、すすけた顔をした男がはいってきた。この男は、何かの古い箱の麻布の覆いで、厚地のオーバーを自分で作ったものらしい。というのは、ドアを締めて、悪天候を追い出しておくために、くるりと後ろむきになったとき、その衣装の背中のところ、大きな黒の頭文字で G & T と印刷された文字が見えたからだ。それにまた、肉太の字体で「ガラス」という文字が書いてあった。

「こんばんは、ジョン！」

その小柄な男は言った。

「こんばんは、おかみさん。こんばんは、テイリー。こんばんは、見知らぬお方！ 赤ちゃんは元気かね、おかみさん？ ボクサーも、だいぶ元気だろうね？」

「みんなびんびんしているわ、ケーレブ」
ちびが答えた。

「それを知りたければ、たとえば、このかわいい坊やを見さえすればいいんだわ」

「また、たとえば、あんたの顔を見さえすればいいのさ、まったくのところ」

ケーレブが言った。

しかし、ケーレブは、おかみさんを見なかった。ケーレブは、きよろきよろした、考えこんだような目つきのもちぬしで、その目は、かれが何を言っている、いつもべつな時とところに向けられているように思われた。この描写は、かれの声にもひとしく当てはまるだろう。

「あるいは、たとえば、ジョンだな」

ケーレブは言った。

「あるいは、びんぴんしてるってことなら、テイリーだね。あるいは、たしかにボクサーだな」

「最近忙しいかい、ケーレブ？」

運送屋が訊いた。

「うん、かなり忙しいよ、ジョン」

ケーレブは、少なくとも賢者の石*を探しまわっている男のように、困惑した態度で答えた。

「だいぶ忙しいよ。このところ、ノアの方舟はこぶねの注文が殺到してるんでね。ノアの家族にもっと手を加えたかったところだが、あの値段じゃ、どうしたらそれができるかわからんよ。

どれがセムで、どれがハムで、どれがその女房たちだか、もつとはつきりとわかるように作れたら、気が済むんだがなあ。ハエだって、あの寸法じゃないんだよ、象とくらべるとなああ！ そうだ！ わしに何か小包のたぐいが届いているかい、ジョン？」

運送屋は、脱いでいた外套のポケットに手を突っこみ、コケと紙で注意深くくるんだ、ち

* 錬金術によって卑金属を金や銀に変えると信じられていた石。

つぼけな植木鉢を取り出した。

「さあ、あつたぞ！」

運送屋は、いかにも大事そうに、それをきちんと整えながら言った。

「葉っぱ一枚だって痛んでないよ。蕾もいっぱいだ！」

それを受け取って、お礼を言ったとき、ケーレブのどんよりした目が輝いた。

「高いよ、ケーレブ」

運送屋が言った。

「この季節にはとても高いんだ」

「そんなこと、かまわんさ。いくらしたって、わしには安いもんさ」

小男は答えた。

「ほかに何かあるかな、ジョン？」

「小さな箱がひとつあるよ」

運送屋が答えた。

「ほら、これだよ！」

「へケイレブ・プラマー行き」

小男は、宛先を一字一字拾い読みしながら言った。

「へ現金在中」。現金在中って、ジョン？ わし宛のもんじゃないと思うな」

「取扱い注意だよ」

運送屋は、相手の肩越しに見ながら言った。

「どこで現金在中だなんて読めるんだい？」

「ああ！ たしかにね！」

ケーレブは言った

「そのとおりだ。取扱い注意だ！ そうだ、そうだ、そいつはわしのさ。本当に、現金在中だったかもしれないんだ、もしへ黄金の南アメリカにいたわしのかわいいせがれが生きていたとすればな、ジョン。あんたは、せがれを息子みたいに可愛がってくれたじゃないか？ そうだなんて言う必要はないよ。むろん、わしは知っているのさ。へケイレブ・プラマー行き。」

取扱い注意。そう、そう、そのとおりさ。これは、娘の仕事に使う人形の目玉がはいつてる箱なんだ。箱のなかにはいつているのが、娘自身の目だったらしいのにと思ふよ、ジョン」

「そうだったらしいがね、いや、そうだったらしいのにな！」

運送屋は声を強めて言った。

「ありがとうよ」

小男は言った。

「とてもやさしいことばだね。あの娘が人形たちを見ることは絶対ないと思ふとね——なのに、人形たちは一日じゅう、あんなにずうずうしく、あの子をじろじろ見つめているんだよ！　そこが身を切られるようにつらいところなんだ。お代はいくらだい、ジョン？」

「お代はなんて訊いたら、あんたをだいなしにしちやうぞ」

ジョンが言った。

「おちびさん！　もうちよつとだったかい？」

「なるほど！　そういう言い方って、あんたらしいよ」

小男は言った。

「いつもながら親切なことだ。えーっと、これで全部だったよな」

「違うね」

運送屋は言った。

「もういっぺん、よく考えてみなよ」

「何か旦那宛のものかい、え？」

ケーレブは、しばらく考えこんだあとで、言った。

「たしかに。それこそわしを取りにきたものなんだ。ところが、わしの頭は、あのノアの方舟やいろんなことばかり考えこんでいたんでね。旦那は、まだ来てないんだろう？」

「来てないよ」

運送屋は答えた。

「あのひとは、忙しすぎるんだよ、求婚でね！」

「でも、まもなくやってくるよ」

ケーレブは言った。

「だって、こう言ってたんだから、帰りは道の左側を歩いていれば、十中八九、車に乗せてやるからな、ってね。ところで、わたしはもう帰ったほうがいい——おかみさん、すまないがね、ちよつくら、ボクサーの尾っぽをつねらせてくれないかな？」

「まあ、ケーレブ、何てことを訊くの！」

「なに、気にしなさんな、おかみさん」

小男は言った。

「ひよつとしたら、犬だっていやがるだろうしな。ほえる犬がほしいという半端な注文が、ついさつきはいったところなんだよ。それで、一個六ペンスで、できるだけ本物に似たものを作ってみたいと思ってるんだ。それだけの話さ。気にしなさんな、おかみさん」

たまたま、折よく、ボクサーは、提案された刺激をうけもしないのに、ひどく熱心にほえはじめた。しかし、これは、だれか新しい客が近づいてきたことを意味しているので、ケーレブは、本物についての研究はもっと都合のいいときまで延期することにして、例の丸い箱

を肩にかつぎ、急いでいとまを告げた。

ケーレブは、そういう手間は省いたほうがよかったかもしれない。戸口でぼったりとその訪問客と出会ったからである。

「おや！ ここにいたのかい、そうかい？　ちよつと待ちな。家まで乗せていってやるよ。ジョン・ピアリビングル、こんにちは。それより、あんたのきれいなおかみさん、こんにちは。日一日ときれいになるね！　できるものなら、ますます健康で！　そしてますます若くなる」

話し手は、何やら考えこみながら、小声で言った。

「こいつはしゃくだね！」

「あなたがお世辞を言うのを聞いたら、びっくりしたでしょうね、タクルトンさん」

ちびは、あまりいい顔をしないで言った。

「あなたの婚約の話聞いていなければね」

「それじゃあ、一部始終、知っているのかね？」

「どうにか、やっと信じられるようになったところですよ」

ちびが言った。

「激しくもがいた挙句だろうね？」

「ええ、とつても」

玩具商のタクルトンは、グラフ・アンド・タクルトンとして——というのは、それは商会だったのだ——かなり一般に知られていた。もつとも、グラフのほうは、その名義と、それから、だれかが言ったように、辞書の意味どおりの「粗野な」という性質を、商売のなかに残して、ずつとまえに株を売り払って、手を引いてしまっていた——玩具商のタクルトンは、その天職を両親や後見人たちによつてすっかりまちがわれた男だった。

もしも、かれらが、タクルトンを金貸しとか、やり手の弁護士とか、執達吏とか、ブローカーとかにしていたなら、若いころに不満たらたらの日々を送り、それから、意地の悪い取引を思う存分におこなったあとで、わずかばかりの新鮮さと物珍しさのため、ついには愛想のよい人間になっていたかもしれない。

しかし、玩具製造という平穩な仕事に拘束され、いらいらした末に、家庭の人食い鬼となり、一生、子どもたちを食いものにして生き、そして子どもたちの不倶戴天の敵となっていた。

ぞっとするような仮面、おぞましい、毛むくじやらで、赤い目をしたビックリ箱人形、吸血鬼風、どうあっても転がろうとはせず、いつもいつも前へ飛んできて、幼児たちを穴のあくほど見つめてこわがらせる、悪魔のような起きあがりこぼしなどに、かれの魂は無上の喜びをおぼえるのだった。そんなものが、タクルトンの唯一の息抜きであり、また安全弁だった。

タクルトンは、あらゆるおもちゃを軽蔑していた。おもちゃなど、金輪際買わなかっただろう。ブタを市場に追っていくハトロン紙で作った農夫、弁護士の失われた良心のことを吹聴して歩く町の触れ役、靴下のつくろいや、パイを切ったりする、動く老婦人、その他同様な商売道具の見本の顔に、こわい表情を悪意からそっと忍びこませて、大喜びしていた。

ぞっとするような仮面、おぞましい、毛むくじやらで、赤い目をしたビックリ箱人形、吸

血鬼風、どうあっても転がろうとはせずに、いつもいつも前へ飛んできて、幼児たちを穴のあくほど見つめてこわがらせる、悪魔のような起きあがりこぼしなどに、かれの魂は無上の喜びをおぼえるのだった。そんなものが、タクルトンの唯一の息抜きであり、また安全弁だった。

タクルトンは、そういうものを発明する名人だった。何であれ、小型の悪魔を思わせるものは、タクルトンにはすぐくおもしろかった。タクルトンは、幻灯用の鬼のスライドをこしらえて、損さえした（かれは、そのおもちゃが大いに気に入っていたのだ）。そこには、悪魔の一団が、人間の顔をした、一種の超自然的な甲殻類として描かれていた。

巨人の肖像画に凄みをもたせるために、どれくらい資本をすったこともあった。また、絵がうまくもないくせに、職人に教えるために、チョークで、そういう怪物たちの顔にある種のひそかな邪悪な目つきを描いてみせることができた。その目つきは、クリスマスや夏休みのあいだじゅう、六歳から十一歳までのすべての若い紳士たちの心の平和を、まちがいなく奪ってしまったのだった。

タクルトンのおもちゃに対する態度は、（大半のひとと同様に）、ほかのすべてのことにおいても変わらなかった。だから、ふくらはぎまでとどくグリーンのマントのなかには、あごまでボタンをかけた、珍しく愉快な男がおり、また、折り返しがマホガニー色の頑固な感じのブーツをはいた、またとなく上等な人物で、またとなく愉快な話し相手であることも、読者は容易に想像できるはずである。

それでも、玩具商のタクルトンは、結婚しようとしていた。こういったすべてのことにもかわらず、タクルトンは結婚しようとしていた。しかも、若い女性と、美しく、うら若い女性と――。

脂気のない顔をゆがめ、体をねじらせ、鼻柱がかくれるまで帽子をグイと引き下げ、両手をポケットの底に突っこみ、無数の大ガラスを煮詰めたエキスのように、片方の小さな目の小さな端から、皮肉な、意地の悪い根性のすべてをのぞかせたまま、運送屋の台所に立っているタクルトンは、あんまり花婿のようには見えなかった。ところが、その花婿にタクルトンはなるつもりだった。

「三日後。次の木曜日。一月の最終日。その日がおれの結婚式さ」

タクルトンは言った。かれは、いつも一方の目を大きくあけていて、ほとんど閉じているもう一方の目が、いつも表情に富んでいるということを、わたしは話しただろうか？ まだではないだろうか。

「その日がおれの婚礼の日さ！」

タクルトンは、コインをジャラジャラいわせながら言った。

「おや、それはまたおれたちの結婚記念日だよ」

運送屋が大きな声で言った。

「ハ、ハ！」

タクルトンは笑った。

「奇妙だな！ あんたらもおれたちとちようどそっくりの夫婦なんだな。そっくりのな！」

この鳥^{おこ}漕がましい断定を聞いたときの、ちびの憤りは、とてもことばでうまく言い表すことができない。次は何を言い出すのか？ この男の想像力は、ひよつとすると、ちようどそ

つくりの赤ん坊が生まれることを思いつくかもしれない。この男は気違いだ。

「あいな！ あんたにちよつと話があるんだ」

タクルトンは、運送屋をひじて突っついて、少しわきへ連れていきながら、低い声で言った。

「結婚式には来てくれるだろうね？ おれたちは、同じ船に乗ってるんだもん、あんな？」

「どうして同じ船なんだい？」

運送屋がたずねた。

「年齢がちよつぱりかけ離れているところさ」

タクルトンは、もう一度相手を突っつきながら言った。

「前もってうちへ来て、ひと晩過ごしてくれないか」

「どうして？」

ジョンは、この押しつけがましい歓待にびっくりして、聞きただした。

「どうしてって？」

相手は答えた。

「そいつは、新しい招待の受け方だな。そりゃあ、楽しむためさ——ほら、つきあいとか、そういったことのためさ！」

「おたくは、絶対につきあい上手じゃないと思ってたんだが——」
ジョンは、例によって率直に言った。

「チエツ！ なるほど、あんたにはざつくばらんにかなくちゃだめなんだな」
タクルトンは言った。

「それじゃあ、実を言うとな、あんたたち二人には、そのう——お茶を飲むひとたちのいわゆる、見て気もちのいい様子があるんだよなあ、あんたとおかみさんにはさ。じつはそうでもないってことは、おたがい承知してはいるけどな、しかし——」

「いいや、承知していないね」

ジョンが口をはさんだ。

「いったい、何の話をしているのかね？」

「そうかい！ それじゃあ、承知してない、ことにしておこう」

タクルトンは言った。

「承知してないことに同意しよう。お好きなように。そんなこと、どうだっていいじゃないか？ さつき言おうとしていたのは、あんたたちにはそういう風情があるから、あんたたちがつきあってくると、未来のタクルトン夫人にいい効果を及ぼすだろう、ってことなのさ。それで、この件についてちや、あんたのおかみさんは、おれにあんまり好意をもっていないと思うんだが、それでも、おれの意見に賛成しないわけにいかないさ。だって、あんたのおかみさんには、なんでもない場合でさえ、いつだって効き目のある、こぢんまりと気もちのいい風情があるからな。来るって言うてくれるな？」

「おれたちは、自分たちの結婚記念日を（その日にかぎってだがね）うちで祝うことに決めているんだよ」

ジョンが言った。

「六か月前から、おたがいに約束をしているんだよ。おれたちの考えじゃ、いいかい、家つてものは——」

「ばかばかしい！ 家って何だい？」

タクルトンが大声で言った。

「四つの壁とひとつの天井じゃないか！ （あのこおろぎを殺したらどうかね。おれなら殺すね！ おれはいつでも殺してやるんだ。あの鳴き声が大きらいだ。）おれの家にも四つの壁とひとつの天井がある。ぜひ来てくれ！」

「おたく、わが家のこおろぎを殺すのかい、えっ？」

ジョンは言った。

「バリバリ踏みつぶしてやるのさ」

相手は、かかとで床をドシンと踏みつけながら答えた。

「来ると言ってくれだろうな？ 女同士が、めいめい、自分たちはおとなしく満足していきましょう、これ以上楽になりやしない、と説得し合うのは、おれにとっても、あんたにとっても利益になるんだよ。おれは、女たちの癖つてもものを知っている。ひとりの女が何と言ったとしても、もうひとりの女は負けるもんかか決心する。いつだってさ。女たちのあいだに

は、大変な競争心があるんだよ、あんた。そこで、あんたのおかみさんが、おれのかみさんにむかって、へあたしは世界一幸福な女で、あたしの夫は世界一素的な夫よ。だから、あたしは夫に首ったけなの」と言おうものなら、おれのかみさんは、あんたのおかみさんに、同じことか、それ以上のことを言って、そして、半分はそう信じるようになるのさ」

「じゃあ、おたくのおかみさんは、そうはしないと言うつもりかね？」

運送屋はたずねた。

「そうはしないって！」

タクルトンは、短く、かん高い声で笑って、叫んだ。

「どうしないってんだよ？」

運送屋は、「あなたに首ったけでないのか、ってことさ」とつけ加えようかと、かすかに思った。ところが、袖なし外套の立てた襟ごしにいまにも飛び出しそうに、自分のほうにキラキラと光って向けられている、半ば閉じられている目にたまたまぶつかったので、これでは首ったけにほられるなんて、とてもじゃないが有りそうも無いと感じて、ことばを変え

て、「おかみさんは、そうは信じていないのか、ってことさ」と言った。

「ああ、この野郎！ 冗談言ったら」

タクルトンが言った。

けれども、運送屋は、相手のことばの主旨を十分につかむには、少々手間どったけれど、あまり真剣な顔で相手を見つめていたので、向こうももう少し説明しないわけにはいかなかった。

「おれは、こんな気もちになってるんだよ」

タクルトンは言った。そして、左手の五本の指をかざして、中指をトンとたたいて、「これがおれだ、すなわち、タクルトンだ」という意味を表そうとした。

「おれはね、あんた、若い妻、しかも見目麗しい妻と結婚しようという気もちになってるんだ」

ここで、かれは花嫁を表すつもりで小指をトンとたたいた。お手柔らかにではなく、ピシッと、権力の意識をもってたたいた。

「おれはその気もちを満足させることができるし、また事実、満足させるんだ。それがおれの気まぐれさ。だが——ほら、あれを見ろよ」

タクルトンは、ちびが思いにふけりながら暖炉のまえに腰かけ、えくぼのできたおとがいを手でささえ、赤々と燃える炎を見つめている姿を指さした。運送屋はちびを見、それからタクルトンを見、それからちびを見、それからまたタクルトンを見た。

「もちろん、おかみさんは、夫を尊敬し、従っている、だろ？」
タクルトンは言った。

「おれは、多感の男じゃないから、おれにはそれだけで十分だ。しかし、結婚にはそれ以上のものが何かあると思うかね？」

「おれの考えじゃあ」

運送屋は答えた。

「ないと言うやつがいたら、だれでも窓からほうり出してやるだろうよ」

「いかにもそのとおり」

相手は、いつになく、てきばきとした調子で、同意を表した。

「たしかにね！ まちがいなく、あんたはそうするだろうさ。もちろんさ。それはもう疑いなしだ。おやすみ。よい夢を！」

運送屋は戸惑い、われにもなく不快な、不安な気もちになった。かれは、それを態度に表さずにはいられなかった。

「じゃあ、あんた、おやすみ！」

タクルトンは、あわれむように言った。

「おれは帰るよ。おれたちは、実のところ、まったくよく似ているな、うん。あすの晩は割いてくれるんだろうな？ なるほど！ 次の日は、ひとを訪問するんだね。そこであんたらと会うことにしよう。未来のかみさんを連れてくよ。あれのためになるだろう。承知してくれるんだね！ ありがとう。や、ありや何だ？」

それは、運送屋の妻があげた大きな叫び声だった。大きな、かん高い、出しぬけの叫び声で、ガラスのうつわのように、部屋じゅうに響きわたった。彼女は、椅子から立ちあがり、

恐怖と驚きでくぎづけにされたひとのように、立ちすくんでいた。例の見知らぬ男は、からだを暖めようと暖炉のほうへ歩み出てきて、彼女の椅子から半歩と離れていないところに立っていた。しかし、まったくじつとしていた。

「おちびさん！」

運送屋はさげんだ。

「メアリー！ ダーリン！ どうしたんだ？」

たちまち、みんなが運送屋の妻をとりまいた。ケーキボックスの上でうとうととしていたケーレブは、一時失っていた落ちつきをまだ十分にとりもどしていなかったので、スロウボーイ嬢の髪の毛をひつつかんだ。しかし、ただちに謝った。

「メアリー！」

運送屋は、妻を両腕でささえながら叫んだ。

「気分が悪いのかい？ どうしたんだ？ 教えてくれ、ねえおまえ！」

メアリーは、それに答えて、両手をたたいて、激しく発作的に笑いだしただけだった。そ

れから、夫の両腕をぬけて床にくずれ落ち、エプロンで顔をおおって、激しく泣いた。それから、また笑い、それから、また泣いた。それから、なんて寒いんでしょう、と言ひ、夫に炉端へ連れていってもらひ、そこで、まえと同じように腰を下ろした、例の老人は、まえと同じように、身じろぎひとつせずに立っていた。

「もうよくなつたわ、ジョン」

メアリーは言った。

「もうすっかり元気よ——あたし——」

ジョンだつて！ しかし、ジョンは、メアリーの反対側にいた。なぜメアリーは、顔を見知らぬ老紳士のほうへ向けているのか。まるで老紳士に話しかけてでもいるのようによ！ メアリーは、頭がおかしくなっているのだろうか？

「ただの幻よ、ジョン——一種のショックで——何かが突然、目のまえに現れたのよ——何だかわからないわ。もうすっかり消えたわ、すっかり消えたわ」

「消えちまつてよかつたよ」

タクルトンは、表情に富んだ目で部屋じゆうをぐるりと見まわしにながら、つぶやくように言った。

「どこへ消えたのかな。それに、何だったんだろう。フン！ ケーレブ、こっちへおいで！ あの白髪の男はだれだい？」

「知りませんね」

ケーレブは、ささやき声で答えた。

「一度も見たことがありませんよ、生まれてこのかた。クルミ割り器にはうってつけの姿ですよ。まったく新しい型ですね。クルミをはさむ部分が下のチョッキのなかで開くように作れば、さぞ素的でしょうね」

「見てくれもそれほど悪くないな」

タクルトンは言った。

「あるいは、マツチ箱でもいい」

ケーレブは、しげしげと相手を凝視しながら言った。

「何という型だろう！ 頭のねじをゆるめて、マッチを入れる。足の裏のところでマッチをする、すると、紳士のマントルピースに置くにや、あつらえ向きのマッチ箱ですぜ、ああして立ったままの姿で！」

「見てくれはまったく悪くない」
タクルトンが言った。

「中身はまるでからっぽさ！ さあ！ あの箱を持ってこい！ もうよくなったかね？」

「ええ、すっかり消えましたわ！ すっかり消えましたわ！」

小柄な女は、手を振って、急いでタクルトンを追ひ払いながら言った。

「おやすみなさい！」

「おやすみ」

タクルトンは言った。

「おやすみ、ジョン・ピアリビングル！ その箱を注意してもつんだぞ、ケーレブ。落とすでもしたら、殺してやるからな！ 外は真つ暗で、天気はますます悪くなる、え？ おや

すみ！」

それから、もう一度部屋を鋭い目つきで睨みまわして、戸口から出ていった。ケーレブは、ウェディング・ケーキを頭にのせて、そのあとに従った。

運送屋は、小柄な妻にひどくびっくり仰天させられたし、妻を落ちつかせたり、介抱することでも忙しくしていたので、見知らぬ男がいることをほとんど意識していなかったが、ようやくいま、ただひとりの客として、男が再びそこに立っているのに気がついた。

「このひとは、あの連中の仲間じゃないんだよ、そうだろ」

ジョンは言った。

「それとなく出ていくように言わなくちやいけないな」

「あの、すみませんかな」

老紳士は、ジョンのほうへ歩み出ながら言った。

「おかみさんが具合がよくないようなので、なおさら相すまんのですが、なにしろ耳が遠いものですから」

と耳にさわって、かぶりを振りながら、

「どうしてもいてくれないと困る付き添いが、まだ到着しないところをみると、何か手違いがあったにちがいないと思うのです。今夜の荒れ模様の天気で、あなたの乗り心地のいい荷馬車の避難所（あれ以上お粗末なものにぶつかりませんように！）があんなにありがたく思われたわけですが、その天気もますますひどくなるようです。ご親切なおぼしめしで、ここでベッドを拝借できませんかな？」

「はい、はい」

ちびが叫んだ。

「はい！ いいですとも！」

「おや！」

運送屋は、その承諾の早さにびっくりして言った。

「そうだな！ おれはべつに反対じゃない。でも、まだどうもはっきりしないんだが――」

「しっ！」ちびがさえぎった。

「まあ、ジョンたら！」

「だって、このひとはまるで耳が聞こえないんだよ」

ジョンが言いはった。

「わかつてるわ、でも——はい、いいですとも。はい！ よろしゅうございますとも！ あたし、このかたにベッドを作ってあげるわ、すぐにね、ジョン」

ベッドを作り飛んでいく、妻の心の動揺とそわそわしたそぶりが、あまりにも奇妙だったので、運送屋は、すっかり面食らって、突っ立ったまま、妻を見送っていた。

「それで、おかあさんたちがベッドたちを作ってくれたんですか！」

スロウボーイ嬢は、赤んぼうに向かって叫んだ。

「そうして、帽子たちをもちあげると、髪の毛がとび色にちぢれていて、炉端たちにすわっている大事なかわい子ちゃんたちを、こわがらせたのですか！」

疑惑と混乱の状態におちいると、それに付随して、つまらないことに妙に心がひっかかるということがままた起こるものだが、運送屋は、ゆっくりと行きつ戻りつしながら、こんなば

かげたことばさえ、心のなかで何度も何度もくりかえしている自分を発見した。あまり何度もくりかえしたので、そのことばをそらで覚えてしまい、なおも学課のように、くりかえし、くりかえし暗唱していた。

そのとき、ティリーは（子守の慣習に従って）健康上適当だと考えるだけ、赤んぼうの小さい毛のない頭に手でまさつを加えたあとで、もとのとおり、赤んぼうの帽子を結んでかぶせ終わっていた。

——そして、炉端にすわっている大事なかわいい子ちゃんたちをこわがらせた。いったい、何がちびをこわがらせたんだろう！

運送屋は、ゆつくりと行きつ戻りつしながら考えた。

ジョンは、玩具屋の遠まわしのことばを心中からはねつけはしたものの、それでも、そのことばは、かれの心を漠然とした、はっきりしない不安で満たした。というのは、タクルトンは、頭の回転の速い、悪賢い男だが、自分は、呑みこみがおそい人間だということを痛切に感じていたので、切れ切れの暗示はいつも気になって仕方がなかったからである。

ジョンは、タクルトンが言ったことばと、妻の異常な行動を心のなかで結びつけるつもりは、たしかになかったけれど、しかし、この二つの、熟考に値する題目が、いっしょにジョンの心のなかにはいつてきて、その二つを切り離すことができなかつた。

やがてベッドが用意された。そして、客は一杯のお茶のほかは、軽い食事をいっさいことわって、引き下がった。

それから、ちびは——もうすっかりよくなつたわ、もうすっかりよくなつたわ、と言つて——夫のために炉すみに肘掛椅子をととのえ、パイプにたばこを詰めてわたした。

そして、炉辺の夫のそばの、いつもの小さな自分のスツールにすわつた。

ちびは、いつもその小さなスツールにすわりたがるのだった。思うに、彼女は、それはなだめすかし、ご機嫌をとつてくれる、かわいいスツールだ、といったふうに考えていたにちがいない。

ちびは、まさしく、世界じゅうでパイプの詰める最高の名人であつたと言えるだろう。

ちびがパイプの火皿に、あの丸ぼちやの小さな指をつっこみ、それから管のなかをきれい

にするためにプツとパイプを吹く。それを終えてしまうと、その管のなかに本当に何かがつまっていると考えるようなふりをして、何べんもそれを吹く。それから、素的な小さな顔を、すごく挑発的にしかめて、望遠鏡のようにパイプを目に当てて、なかを覗きこんでいる様子は、まったく素晴らしいながめだった。

たばこについて言うなら、ちびは、その道の達人だった。そして、運送屋がパイプを口にくわえたとき、一本のこよりでパイプに火をつけるさまは——かれの鼻先まで近づけながら、それでいて鼻を焦がすことがないのだ——まさに芸術だった、高級な芸術だった。

そして、こおろぎとやかんは、また出てきて、そのことを認めた！ 明るい火も、再びパツと燃えあがって、そのことを認めた！ 柱時計の上の小柄な干し草作りも、顧みられぬ仕事をづけながら、そのことを認めた！ 運送屋は、額のしわをのぼし、顔をほころばせながら、だれよりもさきに、そのことを認めた！

そして、運送屋がまじめな、考えこんだ様子で、愛用のパイプをスパスパふかし、オランダ時計がカチカチ時を刻み、赤い火がキラキラと輝き、こおろぎがリ・リ・リ、リ・リ・リ



ーと鳴いたとき、かれの炉辺と家庭の守護神が（こおろぎは、まさにそれだった）、妖精の姿となつて部屋のなかに出てきて、家庭のさまざまな幻影をかれのまわりに呼び出した。

あらゆる年齢の、あらゆる大きさのちびで、部屋がいつぱいになった。野原で花を摘みながら、かれの前を走っていく、陽気な子どもちびたち。かれ自身の武骨な姿の懇願に半ばしりごみ、半ば応じる、恥ずかしがり屋のちびたち。戸口で馬車から下り立ち、いぶかりながら家の鍵を手にする新婚のちびたち。

架空のスロウボーイたちに付き添われて、赤んぼうを抱いて、洗礼に連れていく、いかにも母親らしい小柄なちびたち。田舎の舞踏会で踊っている娘たちを見守っている、いまなお若々しく美しい主婦のちびたち。バラ色の頬をした孫たちの群れにとりかこまれ、抱きつかれている、でっぴりしたちびたち。杖によりすがりながら、ゆつくりと、よたよた歩く、しわくちやのちびたち。

年とつた運送屋たちも現れた。足もとには、目の見えない、おいぼれたボクサーが寝そべっている。それから、若い御者の乗った新しい荷馬車（幌ほろには「ピアリングル兄弟商会」と

書いてある)、世にもやさしい手で介護されている病人の老運送屋たち、死んでこの世を去った、老運送屋たちの墓場で青々と苔むした墓石たちがあらわれる。

そして、こおろぎが、こういったすべてのものをかれに見せたとき——目はじつと火を見すえていたけれど、運送屋は、これらのものをはっきりと見たのだ——かれの心は晴ればれと楽しくなった。それから、運送屋は、かれの家庭の守護神にありつたけの感謝をささげ、そして、読者と同様、もはやグラフ・アンド・タクルトンのことなど、気にしなくなった。

しかし、同じ妖精のこおろぎが、ちびのスツールのあんなに近くにすわらせて、ただひとり、ぽつねんとそこにとどまっていた、あの男の若い姿は、いったい、何であったのか？ なぜ、あの姿は、あんなにちびのすぐそばからいつまでも離れないで、片腕を炉棚にのせて、「結婚してしまっただって！ しかも、ぼくとじゃなく！」としつこく、くりかえしていたのか？

ああ、ちび！ 不実のちび！ おまえの夫の見たあんなにたくさんの幻影のなかにも、そんな姿のはいりこむ場所などない。なぜ、そんなものの影がかれの炉の上に落ちたのだろうか

か
？

第二一声

ケーレブ・プラマーとその盲目の娘は、物語本式に言えば、たった二人きりで暮らしていた——この単調な世のなかでとにかく何かを語ってくれることに対して、願わくは読者の賛同を得て、わたしは物語本を祝福したい！——ケーレブ・プラマーと盲目の娘は、小さな、割ったクルミの殻かのような木造の家に、たった二人きりで暮らしていた。

その家は、実のところ、グラフ・アンド・タクルトン邸の出っ張った、赤レンガの鼻先にできた吹き出物にすぎなかった。グラフ・アンド・タクルトンの屋敷は、その通りで非常に目立つものだったが、ケーレブ・プラマーの住まいときたら、ハンマーのひと打ちか、ふた打ちで叩きこわして、そのかけらを荷馬車で運び去ることができたかもしれない。

もしも、だれかが、そのような襲撃が加えられたあとで、ケーレブの住居がなくなつたこ

とに気づいたとしたら、あんなものを取り壊したのは大変な改善だ、ときつと褒めてくれたことだろう。その家がグラフ・アンド・タクルトンの屋敷にくつついでいる様子は、あたかも、エボシ貝が船の竜骨にくつつき、カタツムリがドアにくつつき、ひとかたまりの毒キノコが木の幹にくつついでいるさまに似ていた。

しかし、グラフ・アンド・タクルトンという十分に成長した幹が伸びてきたのは、この芽からだった。そして、そのぐらぐらする屋根の下で、先々代のグラフが、小規模ながら、むかしの少年少女たちのために玩具をこしらえ、その少年少女たちは、その玩具で遊んだり、そのからくりを見つけたり、それをこわしたりして、眠りについたのだった。

ケーレブとそのかわいそうな盲目の娘は、ここに住んでいた、とわたしは言った。むしろ、ケーレブは、ここに住み、かわいそうな盲目の娘のほうは、どこかべつのところ——貧しさも、みすぼらしさもない、苦勞もはいらぬ、ケーレブがしつらえた魔法の家に住んでいた、と言うべきだった。ケーレブは、決して魔法使いではなかった。しかし、いまなおわれわれに残っている唯一の魔術——献身的な、不滅の愛の魔術を、ケーレブは自然から学んで

いた。そして、自然の教えから、すべての奇蹟が生じたのだった。

盲目の娘は、天井が変色していることも、壁がしみだらけになっていることも、ここかしこ漆喰がはげていることも、高い個所の割れ目がふさがれもせず、日に日に広がっていくことも、梁が朽ちてだらんと下がりがけていることも、まるで知らなかった。

盲目の娘は、鉄が錆びつきかけていることも、木部が腐れかかっていることも、壁紙がはがれ落ちていることも、住まいの大きさや形や本来のつりあい次第にしばらくのこと、まるで知らなかった。

盲目の娘は、醜い形をしたデルフト焼や土器が食卓の上に置かれていることも、悲しみと気の弱さが家のなかにただよっていることも、ケーレブのわずかばかりの髪の毛が、彼女の視力のない顔のまえで、ますます白くなっていくことも、まるで知らなかった。

盲目の娘は、自分たちの主人が、冷酷で、口やかましく、無関心な男であることも、まるで知らなかった——要するに、タクルトンがタクルトンであることを、まるで知らなかった。

そうして、自分たちと冗談を交わすのを好み、自分たちの生活の守護天使であるのに、感

謝のひとことを聞くのも潔しとしない、エクセントリックな、ひょうきん者だと信じて生きていた。そして、それはすべてケーレブのこしらえごとだった。何から何まで、彼女の単純な父親のしたことだった！

しかし、ケーレブの炉辺にもこおろぎがいた。そして、母親のいない、目の見えない子がとても幼かったころ、そのこおろぎの美しいしらべに悲しく耳を傾けているとき、その精が、この娘の目が見えないという大きな損失さえも、ほとんど祝福に変えることができるかもしれないし、こういうささやかな手段で娘を幸福にすることができないかもしれないという考えを、ケーレブに吹き込んだのだった。

というのは、こおろぎと親しく交わるひとびとですらそれと知らないのだけれど（そういうことは、しばしばあるのだ）、こおろぎ族はおしなべて強力な精だからだ。そして、目が見えない世界においては、炉辺と炉の精たちが人間に話しかける声ほど、穏やかで、真実で、これほど絶対的に信頼できる、そしてこの上もなく優しい忠告しかあたえない声はないのである。

ケーレブとその娘は、いつもの仕事部屋でいっしょに仕事をしていた。そこは、同時に、ふだんの居間の役も果たしおり、いかにも奇妙な場所だった。そこには、あらゆる身分の人形のための仕上がった家や、まだ仕上がっていない家があった。中産階級の人形のための郊外住宅、下層階級の人形のための台所とひと部屋のアパート、身分の高い人形のための首都の邸宅など。

こういった住宅のなかには、限られた収入の人形の便宜をはかるために、見積りに応じてすでに家具がとりつけてあるのもあれば、椅子、テーブル、ソファ、寝台の枠組み、室内装飾品などを並べてある全部の棚から、即座に、最高の贅^{ぜい}を尽くして取りつけられるようになっているものもあった。

これらの住宅を設計して提供された貴族、紳士階級、一般大衆は、あちこちに、バスケットにはいったまま、まっすぐに天井をねめつけていた。しかし、かれらの社会的階級を表し、それぞれの身分にとじこめる点において（実生活においては、それは遺憾ながら困難であることは、経験から明らかである）、こういう人形の製作者たちは、しばしばつむじ曲がり

片意地な造物主よりも、はるかによい仕事をしていた。というのは、かれらは、サテン、木綿のプリント、ぼろ切れといった恣意的な特徴に頼らないで、まちがう余地のない、いちじるしい肉体上の相違を追加したのだ。

たとえば、身分の高い淑女人形は、完璧に均整のとれた、蠟の手足をしていた。しかし、これは、その種の人形とその同輩にかざられていた。そして、社会的階層の次に位する人形は、なめし革で作ってあり、その次は、粗末なリンネルで作ってあった。庶民はどうかと言え、かれらは、腕や脚として、マッチ箱から取り出した、ちようど同数の軸木をつけて、そこにいた——ただちに、かれらの領域にきつちりと押しこめられ、そこから抜け出す見込みはまったくないままに。

ケーレブ・プラマーの部屋には、人形のほかに、かれの手仕事になる、さまざまな見本があった。ノアの方舟があり、その中には鳥やけだものが、請け合ってもいいが、異常にきちきちに詰めこまれていた。もつとも、これらは、なんとかして屋根から押しこまれ、ガタガタ揺さぶって、とてつもなく狭い範囲に入れることができたのだった。

大胆な詩的許容*によって、こういうノアの方舟の大半には、ドアにノッカーをつけてあった。これは、朝の訪問客や郵便配達人を暗示するものとして、もしかすると、無定見な付属品かもしれないが、建物の外観にとつては気もちのよい仕上げになっていた。

陰気な、小さな荷馬車が山ほどあった。車輪がまわるとき、すぐくもの悲しい調べを奏でるやつだ。たくさんの小さなヴァイオリン、ドラム、ほかの責め道具、多数の大砲、楯、剣、槍と鉄砲。赤いズボンをはいた小さな起きあがりこぼしたちもあって、ひっきりなしに、赤いテープを巻いた高い障害物に群がってよじのぼっては、まっさかさまに、向こう側に転がり落ちていた。立派などとは言わないまでも、まっとうな無数の老紳士たちが、自分の家の戸口にわざわざ差しこんである横木を気が狂ったように跳び越えていた。

あらゆる種類の動物がいた。とくに、たてがみとして小さなケープをつけた、まだらの樽

* 詩的許容(poetic licence)とは、文学的効果を高めるため韻律・文法・論理などを破ることを許容すること。

ここでは、アナクロニズム的に、ノアの方舟の戸口に、訪問客や郵便配達人を暗示するノッカーがとりつけてあること。

に四本の木釘を付けた馬から、勇み立つ純血種の揺り木馬にいたるまで、あらゆる品種の馬がいた。

ハンドルをまわすと、あらゆる種類のとつぴな行為をやらかそうとしているグロテスクな姿をした人形が、何ダンスも何ダンスもあるのを数えるのは困難だっただろうが、それと同様に、人間の愚行、悪徳、あるいは弱点で、その直接的な、あるいは間接的な雛形で、ケーレブ・プラマーの部屋のなかに見いだされないものを挙げるのも、容易なわざではなかっただろう。しかも、ことさら誇張されたかたちで表現されていたわけではない。なぜなら、小さなハンドルを回せば、おもちゃの人形がさせられるのと同様な奇妙な行為を、実社会の男女もするものだからである。

こういう品物にとりかこまれて、ケーレブと娘は、すわって仕事をしていた。盲目の少女は、人形の衣裳づくりに忙しかった、ケーレブは、望ましい家族用の邸宅の五階の正面にペンを塗ったり、ガラスをはめたりしていた。

ケーレブの顔のしわに刻みこまれた心労と、放心した、夢みるような物腰は、錬金術師か、



深遠な研究に従事する人には似つかわしいものだっただろうが、はじめて見るときには、かれの仕事やまわりのつまらぬものは、奇妙な対照をなしていた。しかし、つまらぬものでも、パンのために発明され、追求されるとなると、至極深刻な現実の問題となってくるのだ。

こういう考慮はさておき、もしもケーレブが、侍従長とか、国会議員とか、弁護士とか、いや、なんなら凄腕の相場師であったとしたら、かれの玩具のとりあつかい方が、いまよりちよっぴり気まぐれではなくなっていただろう、と言うつもりは毛頭ないし、反対に、そういう連中が玩具と同じように無害なものになっていたかどうか、わたしは大いに疑問しいと思っている。

「じゃあ、ゆうべはあの美しい、新調のオーバーを着て、雨の中を出歩いていたのね、おとうさん？」

ケーレブの娘が言った

「美しい新調のオーバーだよ」

ケーレブは部屋のなかの物干しづなのほうをちらつと見ながら答えた。そのつなには、

まえに述べた、荒い麻布のオーバーが注意深くつるされて、乾かしてあった。

「おとうさんがあれを買ったので、あたし、とつてもうれしいのよ、おとうさん！」

「おまけに、あれほどの仕立屋だもんな」

ケーレブは言った。

「すごく高級な仕立屋だよ。わしにはよすぎるよ」

盲目の少女は、仕事の手を休めて、大喜びして、笑った。

「よすぎるって、おとうさん！ おとうさんによすぎるものなんて、いったい、あるのかしら？」

「でもな、あれを着ると、ちよつぱり恥ずかしいんだよ」

自分のことばが、娘のパツと輝いてきた顔に及ぼす効果を見守りながら、ケーレブは言った。

「まったくだよ！ 男の子やみんなが、わしのうしろから、へやあやあ！ 伊達男がいる

ぞ！ って言うのを聞くとねえ、わしはどこを向いたらいいかわからんのだよ。それから、

昨夜も、乞食がどうしても立ち去ろうとしなくてな、わしは普通の男だよ、と言ったんだが、

へとんでもない、閣下！ 閣下に神さまの祝福を！ そんなことをおっしゃるものではありません！〜と言ったときには、わしはまったく恥じ入ったよ。あれを着る権利なんかないような気もちがほんとにしたんだよ」

幸せな目の見えない少女よ！ 彼女は、歓喜にひたって、なんとはしゃいだことだろう！

「この目に見えるようだわ、おとうさん」

娘は、両手をにぎりしめながら言った。

「おとうさんがいっしょにいるときは目がほしいなんて決して思わないけど、まるでその目があるかのように、はつきりと見えるのよ。紺色のオーバー——」

「明るい紺色だよ」

ケーレブが言った。

「そうよ、そうよ！ 明るい紺色よ！」

少女は、喜びにあふれた顔を上に向けながら、叫んだ。

「ありがたい空の色から思い出せる色ね！ おとうさんは、まえに紺色だと言ったわね！

明るい紺色のオーバー——」

「からだにゆったりと仕立ててあるんだ」

ケーレブは、それとなく言った。

「からだにゆったりと仕立ててある！」

目の見えない少女は、心から笑いながら叫んだ。

「そして、それを着てね、おとうさん、楽しい目をして、にこにこ顔で、軽快な足どりで、黒い髪をして——とっても若々しく、ハンサムに見えるわね！」

「やあ！ やあ！」

ケーレブが言った。

「わしは、いまにうぬぼれ屋になってしまふぞ」

「そうなっているわ、とつくに」

盲目の少女は、歓声をあげて、ケーレブを指さしながら、叫んだ。

「あたし、ちゃんと知ってるわよ、おとうさん！ ハ、ハ、ハ！ そらね、見破っちゃっ

たでしょう！」

少女が心のなかに描く絵は、すわって少女を見ているケーレブとは、何という違いであったらうか！ 少女は、父親の軽快な足どりのことを口にした。その点はまちがっていないかった。幾年も幾年ものあいだ、ケーレブは、持ち前の、のろのした歩調で、あの敷居をまたいだことは一度だってなかった、娘の耳にきかせるために、いつわった歩調でまたいだ。この上もなく心がふさいでいるときでも、娘の心をあんなに快活にさせ、勇気をもたせるはずの軽快な足どりを、一度だって忘れたことはなかった！

神さまのみがご存じのことだが、ケーレブのぼんやりと戸惑ったような態度は、目の見えない娘を愛するあまり、自分自身や周囲のあらゆるものについて頭が混乱してしまったことに、半ば起因しているのかもしれない、とわたしは思う。あんなに長年のあいだ、自分自身の正体と、それといくらかでも関係のあるあらゆる事物の正体とをぶっこわそうと努力を重ねてきたあとで、この小男としては、戸惑ってしまう以外に、どうすることができたのだろうか！

「さあ、一丁あがりっ」

ケーレブは言つて、自分の作品をもつとよく判定するために、一、二歩あとじさりした。

「本物そっくりだ、半ペニー銅貨の六ペンス分が六ペンス銀貨に似てるみたいにな。家の正面が一度に全部あいてしまうのは、なんとも残念だな！　いまこの家に、階段がひとつと、どの部屋にも本物のドアがついていて、はいつていけたらなあ！　だが、わしは、いつも自分をあざむき、自分をごまかしているんだ。そこが、わしの商売のいちばんいけないところさ」

「おとうさんの声つて、とても低いわね。疲れてやしない、おとうさん？」

「疲れてるつて！」

ケーレブは、突然、えらく元気づいて、おうむがえしに言った。

「いったい、なんでわしが疲れるんだ。バーサ？　疲れたことなんかないよ、このわしは、疲れるつて、どういうことだい？」

そのことばをいっそう強めるために、ケーレブは、マントルピースの上でのびをしたり、

あくびをしたりして、腰から上が永遠に疲労の状態にある人を表している二つの半身像の真似を無意識にしそうになっている自分を抑えた。そして、ある歌のひとつくさりを鼻歌で歌った。それは、大酒宴の歌で、何か泡立つ大盃に関するものだった。その歌をがむしやらかな声を出して歌ったので、ケーレブの顔はいつもより千倍も貧弱で、物思いに沈んだ顔つきになった。

「何だ！ 歌を歌ってるのか、そうかい」

タクルトンが、戸口から首を突っこみながら言った。

「しつかりやれ！ おれは歌えんわ」

タクルトンが歌を歌えるなんて、だれも思いはしなかっただろう。タクルトンは、どう見ても、いわゆる歌を歌いそうな顔をしていなかった。

「おれは、歌なんか歌ってる余裕がないよ」

タクルトンは言った。

「おまえが歌えるとうれしいね。おまえが仕事のほうもできるといいんだがね。その二

つともは、やる余裕はないというわけだろう、たぶんな？」

「おまえにあのひとを見ることができさえしたなあ、バーサ、しきりにわしにウイंकしているところをさ！」

ケーレブが小声で言った。

「冗談がとつてもうまいんだ！ あのひとを知らなかったら、本気で言ってると思うだろう、え、そうじゃないかい？」

盲目の娘は、ほほえんで、うなずいた。

「歌えるのに歌おうとしない小鳥は、歌うようにしむけないといけない、と世間では言っている」

タクルトンが、不平がましく言った。

「歌えないし、歌っちゃあいけないのに、歌いたがるフクロウはどうだい、そいつにやらせなくちゃあならんことが、何かあるかい？」

「あのひとが、たったいま、どんなにウイंकしていることか！」

ケーレブは、娘に小声で言った。

「いやはや！」

「あたしたちにはいつも陽気で気軽にしてくださいのね！」

ほえんでいるバーサが叫んだ。

「おや、そこにいたのかい、そうかい」

タクルトンが答えた。

「かわいいそうなばか！」

タクルトンは、本当に、少女がばかだと信じていた。そして、意識的か、無意識かわからないが、少女がかれを好いているという事実にもとづいて、タクルトンはそう信じていた。

「なるほど！　そこにいるんなら——元気かい？」

タクルトンは、惜しみ惜しみ言った。

「ええ！　元気ですわ、すっごく元気ですわ。あなたが祈ってくださいているのに負けないくらい幸福ですわ。あなたが、できることなら、世間のすべてのひとを幸福にしたいと思

っていらっしやるのに負けなくらい幸福ですわ！」

「かわいいそうなばかめ！」

タクルトンがつぶやいた。

「理性のひらめきがない。ひとかけらもない！」

目の見えない少女は、相手の手をとって、キスした。しばらく、自分の両手につつんでいた。そして、放すまえに、自分のほおにやさしく押しあてた。その行為には、ことばに表せないほどの愛情と、熱烈な感謝がこもっていたので、タクルトンでさえ心を動かされて、いつもよりはおだやかな唸り声で言った。

「はて、どうしたんだね？」

「ゆうべ眠るときにね、枕元にあれを立てておいて、夢のなかで思い出したの。そして、夜があけて、輝かしい、赤いお日さまが——赤いお日さまだったわね、おとうさん？」

「朝と夕方は赤いんだよ、バーサ」

あわれなケーレブは、悲しそうな目で雇主をちらっと見ながら言った。

「お日さまが昇り、歩いていたらぶつかりそうに思われるほど輝く光が、部屋に射しこんできたとき、あたしはその光のほうへあの小さな木を向けて、これほど貴重なものをお作りになった神さまを祝福し、そして、そういうものを送ってくださって、あたしを元気づけてくださったあなたを祝福したんだわ！」

「精神病院から狂人が逃げだしたぞ！」

タクルトンは、声をひそめて言った。

「おれたちも、じきに拘束服や目隠しを付けるはめになるだろうよ。いや、もう付けかかっている！」

ケーレブは、娘が話しているあいだ、両手をゆるやかに組みあわせたまま、ぼんやりと前方を見つめていた。まるで、タクルトンが娘の感謝に値するようなことを何かしたかどうか、本当にはつきりしない（そのとおりだった、とわたしは信じる）様子だった。

もしも、その瞬間、かれが完全に自由にふるまえる人間で、違反すれば殺すという条件で、玩具商人をけとばすか、それとも、相手の足もとにひざまずくか、相手の真価に応じて、ど

ちらかせよと要求されたとしたら、かれがどちらの道を選ぶか、その可能性は五分五分だっただろ、とわたしは信じている。

けれども、ケーレブは知っていた、自分自身の手であの小さいバラの木を娘のためにあんなに注意深く持ち帰ったことを。そして、娘をそれだけ幸福にするために、毎日、どのくらい、どのくらいいたくさん、自制しているかを娘に感づかれないように、自分の口で罪のないうそをでっち上げてきたかを。

「バーサ！」

タクルトンは、さしあたって、少々思いやりのあるところを装いながら、言った。

「こつちへおいで」

「ああ！ あたし、まっすぐにそちらへ行けるわ！ 手を貸してくださいさうなくてもけっこうよ！」

少女は答えた。

「おまえさんにひとつ秘密を教えるか、バーサ？」

「ええ、よろしければ！」

少女は、熱心に答えた。

その暗い顔が、どれほど明るくなったことか！ 耳を傾けている顔が、どんなにパツと輝いたことか！

「きょうなんだろう、小さな何とかさん、あの甘んぼうのピアリングルのおかみが、いつものようにおまえさんのところへ訪ねてきて——ここで風変わりなピクニックをするのは。だろ？」

タクルトンは、その件全体に強い嫌悪感を示しながら、言った。

「ええ」

バーサは答えた。

「きょうがその日ですわ」

「そうだと思ってたんだ」

タクルトンが言った。

「わしもその仲間入りがしたいもんだな」

「いまのを聞いた、おとうさん？」

有頂天になって、目の見えない娘は叫んだ。

「うん、うん、聞いたよ」

ケーレブは、夢遊病者のように、すわった目つきをして、つぶやいた。

「だが、わしは信じないね。それはわしの嘘のひとつなんだ、きっとそうだ」

「なにね、おれは——おれはピアリングルの夫婦を、もう少しメイ・フィールディングと親しくさせたいんだよ」

タクルトンが言った。

「おれは、メイと結婚するつもりだからね」

「結婚ですって！」

目の見えない娘は、相手から飛びのきながら叫んだ。

「この娘は、とてつもない大ばかだから」

タクルトンはつぶやいた。

「わしの言うことなんかわかりっこないと思つてたのに。ああそうだよ、バーサ！

結婚だよ！ 教会、牧師、書記、教区吏、ガラス窓のついた馬車、鐘、結婚披露の宴会、ウエディングケーキ、贈り物、牛のすね骨、肉切り包丁、その他何やらかんやらのばかげたまねさ。結婚式だよ、いいかい、結婚式だよ。結婚式つてどんなものか、おまえさん知らないのかい？」

「知つてるわ」

目の見えない少女は、おだやかな口調で答えた。

「よくわかつてるわ！」

「そうかい？」

タクルトンはつぶやいた。

「予想してもいなかつたな。それでだね！ そのためにおれはお仲間入りをして、メイと母親を連れてきたいんだ。午後にならんうちに、何かかにかちよつとしたものを届けよう。」

羊の脚の冷肉か、何かそういったうまいものを少々な。おれを待っててくれるかな？」

「ええ」

バーサは答えた。

バーサは、うなだれて、顔をそむけた。そして、そのまま、腕組みをして、物思いにふけりながら立っていた。

「おまえさんが待っててくれるとは思えないな」

タクルトンは、娘をながめながらつぶやいた。

「もうそのことをすっかり忘れちゃったみたいだからね。ケーレブ！」

——思いきって、ここにいろよ、と言ってやろうかな。

ケーレブは考えた。

「へえ、へえ！」

「おれがいままで話していたことを、あの子が忘れないよう気をつけてくれ」

「あの子は絶対に忘れやしませんよ」

ケーレブは答えた。

「あの子が器用じゃないことはわずかですが、それもそのうちのひとつですから」

「だれでも自分のガチョウを白鳥と考えるもんさ」

玩具屋は、肩をぴくりとすくめて言った。

「あわれなやつだ！」

その所見を無限の軽蔑をこめて述べたあとで、年とったグラフ・アンド・タクルトンは退出した。

バーサは、タクルトンと別れた場所にとどまったまま、物思いにふけていた。うつむいた顔からは、陽気な色は消え去ってしまい、ひどく悲しそうだった。三、四度、バーサは、かぶりを振った、あたかも、何かの思い出か、何か喪失したものを嘆き悲しんでいるかのよう。しかし、彼女の悲しげな回想は、ことばとなっては表れなかった。

ケーレブが、馬の胴体の重要器官に馬具をくぎづけするという手つとり早い方法で、一連の馬を馬車につなぐ仕事にしばらく従事したあとではじめて、バーサは、かれの仕事用のス

ツールに近づき、かたわらに腰をおろして、言った

「おとうさん、あたし、暗いところにて寂しいの。目がほしいわ、辛抱強く、よく言うことをきいてくれる目が」

「ここにあるさ」

ケーレブが言った。

「いつでも役に立つよ。わしの目というよりも、バーサ、おまえの目だよ、四六時中、いつ何どきでもね。おまえの目は、何をしてあげようかな？」

「お部屋のなかを見まわしてよ、おとうさん」

「よしきた」

ケーレブは言った。

「言うが早いかやつてのけたよ、バーサ」

「お部屋の様子、話してちょうだい」

「いつもとほぼ同じさ」

ケーレブは言った。

「飾り気はないが、とても居ごこちがいい。壁紙は派手な色合い、平皿や大皿に描かれた生き生きとした花々、梁や羽目板のあるところにはぴかぴかしている木部、建物全体が気持ちよく、こざっぱりしているので、この部屋がとても美しくなっている」

バーサの手が忙しく触れることができるところは、どこも気もちよく、こざっぱりしていた。しかし、ケーレブの空想がそういうふうに変形してしまった、この古い、ぐらぐらする小屋のなかは、ほかはどこにも、気もちのいい、こざっぱりとしたところなど、なかった。

「おとうさんは仕事着を着ているわね、だから、あのきれいなオーバーを着ているときほど、ハイカラじゃないでしょう？」

バーサは、父親にさわりながら言った。

「あれほどハイカラじゃないね」

ケーレブが言った。

「でも、かなりしゃれてるよ」

「おとうさん」

目の見えない娘は、父親のそばに寄って、その首つ玉にそつと片腕を巻きつけながら言った。

「メイのこと、少し話してちょうだい。あのひと、とてもきれい？」

「たしかに、きれいだよ」

ケーレブは言った。そして、たしかにメイはきれいだった。嘘に頼らなくても済むということ、ケーレブにとっては、まったく珍しいことだった。

「あのひとの髪は黒いのね」

バーサはもの思わしげに言った。

「あたしのより黒いのね。声は美しくて音楽的だわね。あたし、たびたびあの声を聞いて楽しかったわ。あのひとの姿は——」

「あの子の姿に匹敵するような人形は、部屋じゅう捜してもないよ」

ケーレブは言った。

「それに目といたら！——」

ケーレブは、口をとじた。というのは、バーサがケーレブの首つ玉を前よりもしっかりと抱き、ケーレブにしがみついている腕から、かれがあまりにもよく知っている警告の圧力が加わったからである。

ケーレブは、ちよつと咳払いをし、ちよつとトントンとハンマーをふるい、それから、例の泡立つ大盃の歌にすがりついた。それは、そういったすべての窮地におちいったときの、絶対確実な頼みの綱だったのだ。

「あたしたちの友だちで、あたしたちの恩人よね、おとうさん。あのひとのこと、いくら聞いても飽きないわ、あたし。——ねえ、飽きたことがあつて？」
バーサは急いで言った。

「もちろん、ないさ」

ケーレブが答えた。

「そして、それにはわけがある」

「ああ！　なんてたくさん、そのわけがあることでしょう！」

目の見えない少女はさげんだ。その口調があまりにも熱がこもったものだったので、ケーレブは、動機は非常に純粹だったけれど、娘の顔をまともに見ることに耐えられず、目を伏せてしまった。まるで、ケーレブの目のなかに、娘が罪のないいつわりを読みとることができたかのように――。

「それじゃ、またあのひとのこと、話してちょうだい、おとうさん」
バーサは言った。

「何度も何度もね！ あのひとの顔は慈悲ぶかく、親切で、やさしいわ。正直で誠実だ、きつとそうよ。すべての親切な行為を、粗野な、しぶしぶしたのだというふりをして、覆い隠そうとする男らしい心が、顔つきや目つきのひとつひとつに脈打ってるんだわ」

「そして、それが顔を気高くしている」
ケーレブは、静かな自暴自棄でつけ加えた。

「そして、それが顔を気高くしている！」
目の見えない少女は叫んだ。

「あのひとは、メイより年上よね、おとうさん」

「そう——だね」

ケーレブは、しぶしぶ答えた。

「メイよりはちよつと年上だ。だが、そんなことは大したことじゃない」

「ああ、おとうさん、そうよ！ からだの弱いときや老齢になったときには、あのひとの忍耐づよい付き添いになる。病気のときはやさしい看護婦になり、悩んでいるときや悲しんでいるときは、誠実なお友だちとなる。あのひとのために働くときは、疲れを知らず、あのひとを見守り、お世話をする。あのひとが目をさましているときは、ベッドのそばにすわって話しかけ、眠っているときはあのひとのためにお祈りをする。

こういうことができたなら、何という特権でしょう！ あのひとに対する真実と深い愛情のありったけを証明する何というよい機会でしょう！ メイは、こういうことを全部するでしょうか、ねえ、おとうさん？」

「そりやもう疑いないさ」

ケーレブが言った。

「あたし、メイを愛してるわ、おとうさん、心の底から愛することができるの！」

目の見えない少女は叫んだ。そう言いながら、彼女は、哀れな、目の見えない顔をケーレブの肩に押しつけて、泣きに泣いたので、ケーレブは、この涙のあふれるような幸福を娘にもたらしたことをほとんど後悔するほどだった。

そうこうするうちに、ジョン・ピアリングルの家では、かなり激しい騒動が起こっていた。というのは、小柄なピアリングルのおかみさんは、赤んぼうを連れずにどこかへ出かけることなど当然考えることはできないし、赤んぼうを支度させるのは手間がかかったからだ。目方とか身長とかの点で、べつに赤んぼうが大きかったというのではなくて、身のまわりの世話があればこれとひどく手数がかかり、しかも、万事ゆっくりやらなくてはならなかったのだ。

たとえば、赤んぼうが、どうにかこうにか、着替えの一定の段階に漕ぎ着けて、もう一、

二度手を加えれば仕上げとなり、世界じゅうのどの子にも負けない、極上の赤んぼうになるだろうと当然考えてもよかったときに、不意にフランネルの帽子をすっぽりかぶせられ、急いでベッドに寝かせつけられてしまった。

そこで赤んぼうは、ほとんど一時間近くも二枚の毛布のなかで（いわば）ぐつぐついつていた。この無活動の状態から、赤んぼうは、汗でてらてらと輝き、激しく泣きわめきながら呼びもどされて、口にしたのは——さよう、もし一般的な言い方をするのをお許しくださるなら、こう言いたい——軽い食事だった*。それが済むと、赤んぼうは再び眠りについた。

ピアリビングルの細君は、この合間を利用して、小柄ながらも、いままで見ただれにも負けないくらい、ぱりつとした身なりになった。

そして、同じ短い休戦中に、スロウボーイ嬢は、短い外套に少ずつ体を押し込んでいたが、この外套、すこぶる驚くべき、独創的な型だったから、スロウボーイ嬢とも、宇宙のほかのいかなるものとも関係がなく、だれにも頓着することなく、ただひとり道をたどってい

* 「授乳」ということばをやめて、婉曲に「軽い食事」と言いかえたもの。

く、ちぢんで、いたんで、みすぼらしい、独立した現実といった代物だった。

このころまでには、赤んぼうはすっかり活発になって、ピアリビングルの細君とスロウボーイ嬢の共同の努力によつて、からだにはクリーム色のマントを着せられ、頭には南京木綿の、山形にふくませたパイのような形をした帽子をかぶせられた。

こうして、やがて、一行三人が戸口に降りていくと、そこには例の老いぼれ馬が、すでに、じりじりしながら肉筆で道路をひつかいて、この馬の一日の通行税以上の被害を通行料徴収所に被らせてしまつていた。また、そこからは、ボクサーがこちらを振りかえりながら、命令がなくてもやつてこい、と老いぼれ馬を誘っているのが、はるかな遠景にかすかに見えた。

ピアリビングルの細君が荷馬車に乗るのを助ける椅子については、そんなものが必要だとお考えなら、ジョンという人間をほとんど知らないというものだ。ジョンが彼女を地面から持ちあげてやつたと思うと、もう彼女は自分の席におさまつて、生き生きとバラ色の顔をして、こう言つていた。

「ジョン！ どうしたのよ！ ティリーのことも考えてあげて！」

もしも、若い女性の脚についてとまかく述べる事が許されるならば、わたしは、スロウボーイ嬢の脚について述べておきたい。あの脚には、不思議にかすり傷をうけやすいという宿命があつて、どんなわずかな登り下りをして、ロビンソン・クルーソーが木製の暦に日々を刻みつけたように、必ず、その折りの状況を脚の上に刻みつけずにはおかなかつたのである。しかし、こんなことは、上品でないと考えられるかもしれないので、考え直すことにしよう。

「ジョン！ あなた、子牛の肉やハムパイや何やかやを入れたバスケットと、ビールのびんを持ってきた？」

ちびが言った。

「持ってきていないのだったら、引き返さなきゃいけないわ、いますぐによ」

「やかまし屋のおちびさんだな、おまえは」

運送屋は答えた。

「たつぷり十五分も遅れさせたうえに、引きかえせって言うなんて」

「それはすまなかつたわ、ジョン」

ちびは、ひどくせわしげに言った。

「だけど、あたし、子牛の肉やハムパイや何やかやとビールのびんを持たないで、バーサの家へ行くことなんて、とても考えられないわ——どうあっても、そんなのいやだわ、ジョン。ドウ！」

この最後の単音節語は、馬に対して言われたのだが、馬はそれにてんで頓着しなかった。

「ねえ、ほんとにドウって言うてよ、ジョン！」

ピアリビングルの細君が言った。

「お願い！」

「そうする時間はたつぷりあるさ」

ジョンは答えた。

「おれがものを置き忘れるようになるまでにはな。バスケットはここにあるよ、安全無事

にな」

「あなたって、なんて無情な、極悪非道なひとなんでしょ、ジョン、すぐそう言っただし、あなたがこんなにびつくりしなくてもいいようにしてくれないなんて！ あたし、ちゃんと言ったでしょ、いくらお金をもらっても、子牛の肉や、ハムパイや、何やかやと、ビールのびんをもたずに、バーサの家へは行かないって。」

あたしたち、結婚してからずっといままで、きまつて二週間に一度ずつ、あそこでささやかなピクニックをしてきたわね、ジョン。もしそのことに故障が起こるようなことでもあれば、あたしたち、またと幸運にはなれまいとまで思っているのよ」

「それは、何よりもまず、親切な考えからだったな」
運送屋は言った。

「だから、おれはそのことでおまえを尊敬しているんだよ、小おんなさん」

「あら、ジョン！」

ちびは、真っ赤になりながら答えた。

不思議だな、だろ？ 奇妙なことが起こるもんだな」

「ほんとに奇妙なことだわ」

メアリーは、ほとんど聞きとれないような低い声で答えた。

「でもさ、あのひと温厚な老紳士だな」

ジョンは言った。

「そして、支払いも紳士のようだ。あのひとの言うことは、紳士のことばとして信用できると思うよ。けさもだいぶ長く話しあったんだが、おれの声に慣れるにつれて、おれの言うことが前よりもよく聞きとれるようになったと言ってるよ。あのひとは、長々と身の上話をし、こつちも、長々と自分のことを話したわけさ。あのひとはまた、あれこれとじつにたくさんのことを尋ねるんだよ。」

おれはな、自分の商売には、ほら、二つの巡回ルートのあることを教えてやったのさ。あの日は家から右へ行つて、また戻ってくる。次の日には家から左へ行つて、また戻ってくる。つてことをな（なにしろ、あのひとはよそ者で、このあたりの場所の名前を知らないからさ）。

そしたら、とても喜んでるようだったよ。

「おや、それじゃあ、今晩はあんたの通る道を帰ってくることにしますね」と言うのさ。
「あんたが正反対の方角から帰ってくると思っていたのに。そいつはすばらしい！　ご厄介だが、ひよつとすると、もう一度乗せてもらうかもしれないよ。だが、二度とあんなにぐっすり眠りはしないと約束しますよ」ってな。実際、ぐっすり眠っていたからな、ほんとにさ！
——おちびさん！　おまえ何を考えているんだ？」

「考えているって、ジョン？　あたし——あたし、あなたのお話に耳を傾けていたのよ」
「ああ！　それならいいんだ！」

正直者の運送屋は言った。

「おまえの顔つきからして、おれがあんまりだらだらと、とりとめなくおしゃべりしたので、何かほかのことを考えだしたんじゃないかと思っただよ。もうちよつとでそう思うところだったな、たしかに」

ちびが何の返事もしないまま、かれらはしばらく、だまって馬車に揺られながら進んでい

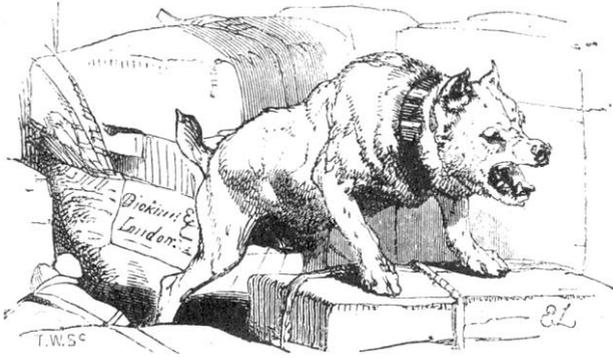
った。しかし、ジョン・ピアリピングルの荷馬車に乗っていて、とても長いあいだ黙っていることは、容易なことではなかった。というのは、路上にいるだれもが、何か話しかけたからである。もつとも、それは「こんにちは！」程度のことにすぎなかったとしても、また、実際、それだけにすぎないことが多かったのだけれど、それでも、きちんとまごころを込めてそれに答えるには、単にうなずきや笑顔ばかりではなくて、さらに、長つたらしい議演説に負けないほどの健全な肺の運動が必要だった。

ときどき、徒歩や馬上の通行人たちが、わざわざおしゃべりが目的で、荷馬車のわきをしばらく、とぼとぼ歩くことがあつたが、そういうときには双方に話すことがどつきりあつた。それから、ボクサーは、キリスト教徒が六人がかりでもできなかったらうと思われるほどに、運送屋があいそよくひとからあいさつされ、ひとにもあいさつするように仕向けてやつた！ 街道ぞいの者は、みんなボクサーを知っていた——とくに、ニワトリやブタがそうで、この犬がからだを一方に大きくかしげ、詮索好きに耳をびんと立てて、例のこぶのような尻尾を精いっぱい空中に振りまわしながら近づいてくるのを見ると、それ以上に親しくなる光

栄に浴するのを待たないで、ただちに、遠い奥の住まいにひっこんでしまった。

ボクサーは、いたるところに仕事があった。あらゆる曲がり角を下っていったり、あらゆる井戸をのぞき込んだり、あらゆる田舎家に飛び込んだり、飛び出したり、あらゆる老婦人経営の初等学校のまん中へ突入していったり、あらゆるハトをバタバタ飛びたせたり、あらゆるネコの尻尾をふくらませたり、あるいは常連の客のように、パブの中へトコトコとはいつていつたりした。

ボクサーがどこへ行っても、だれかしらが「やあ！ ボクサーが来たぞ！」と叫ぶのが聞こえた。すると、そのだれかしらが、早速、少なくとも二、三人の、ほかのだれかといっしよに出てきて、ジョン・ピアリングルとそのきれいな細



君に「こんにちは」と言うのだった。

この配達馬車を利用する荷物や小包は、無数にあった。そして、小包を預かったり、配達したりするために、荷馬車は何度も止まった。それは、決してこの行程の最悪の部分ではなかった。自分が受けとる小包のことで期待に胸をふくらませているひとたちもいれば、小包のことでしきりに感嘆するひとたちもいたし、自分の小包のことで、くどくどと、とめどなく指図をするひとたちもいた。そして、ジョンは、あらゆる小包に生き生きとした関心を示したので、旅路はまるで芝居のようにおもしろかった。

同様に、運送を委託される品物もあって、それについては、いろいろと検討したり議論をしたりする必要があったし、その調整と配置については、運送屋と送り主とで協議しなければならなかった。

すると、ボクサーは、いとも綿密な注意を払うという短い発作を起こしたり、集まっている物知りたちのまわりをくるくる回ったり、声がか^か噴れるまでほえたてるといふ長い発作を起こしながら、通例、その協議を補佐するのだった。

ちびは、荷馬車の自分の席から、おもしろそうに目を大きく見ひらいて見物していた。そ

して、彼女がそこに腰かけて見物しているとき——それはまさに、見事に幌まろの額縁にはめられたチャーミングな小さな肖像画だった——若い男たちはしきりに、ひじで突っつきあったり、ちらちら見たり、ささやきあったり、羨ましがったりしたものだ。

そして、このことは、運送屋のジョンをいたく喜ばせた。というのは、小柄な妻は、そんなことを気にしてはいない——どちらか言えば、おそらくまんざらでもないと思っ
て知っているたので、妻がひとから褒められるのを誇らしく思っていたからだ
だった。

その外出は、一月の天候とあって、たしかに、ちよつと霧が深く、冷え冷えとして寒かった。しかし、だれがそんな些細なことを気にしただろうか？　ちびは、断然気にしていなかった。ティリー・スロウボーイも同様だった。というのは、ティリーは、どんな条件にせよ、荷馬車に乗ることは人生の最高の喜び、この世で望める至高の状況であると考えていたからである。

赤んぼうも、気にしなかった。それはもう、請け合ってもよい。なぜなら、この幸せな幼いピアリングルくらい、途中ずっと温かく、ぐっすり眠るなんてことは（この二つの面

の赤んぼうの能力は、大したものではあるけれど、赤んぼうの性質にはないだからである。霧のなかでは、もちろん、そう遠くまでは見えなかった。しかし、いろいろ、さまざまなものを見ることができた。それより濃い霧のなかでも、労を惜しまずに捜そうとさえするなら、どんなに多くのものが見えるか、びつくりするほどだ。そうだ、野原の妖精の輪*や、生垣のそばや木々のそばの日陰にまだ点々と消え残っている白霜をすわって捜すことさえ、楽しい仕事だった。木立そのものが、思いがけない姿をとって、霧のなかからぬーつと現れて、また霧のなかに消えていくおもしろさは、言うまでもない。

生垣はからみあい、葉は落ちつくし、無数のしなびた花輪を風にそよがせていた。しかし、これには、ひとを落胆させるようなものは何ひとつなかった。それは、見て気もちのよいものだった。というのは、炉辺があることをいっそう暖く感じさせ、夏がいっそう緑濃いものであることを待望させたからだ。

川は、冷たそうに見えた。しかし、川は動いていた。しかも、かなりの速さで流れていた

* 芝地のなかにキノコが環状に生じてできた暗緑色の部分。妖精たちの舞踊の跡と信じられた。

——そこが、素晴らしい点だった。堀割は、かなりのろく、不活発だった。それは認めなければならぬ。だが、気にすることはない。本格的に霜がおく季節ともなれば、川はそれだけ早く凍るだろう、そうすれば、スケートや、氷すべりもできるだろうし、重たげな古い平底の荷船は、どこか波止場の近くに氷でとじこめられて、終日、錆びた鉄の煙突から煙をはいて、のんびりと時を過ごすことだろう。

あるところで、雑草か、麦の刈り株の大きな山かが燃えていた。昼間なので、真っ白なその火が、ただ、ところどころに一まつの赤味を添えて、霧のなかにゆらめいているさまを、一行は見つめていた。とうとう、スロウボーイ嬢のことに従えば、煙が「鼻の奥へのぼってきた」結果、スロウボーイ嬢は息がつかまって——彼女は、ほんの些細なことで、そのたぐいのことが何でもできたのだ——赤んぼうの目をさましてしまった。それで、赤んぼうは、もう二度と眠ろうとはしなくなった。

しかし、四分の一マイルかそこいら先に行っていたボクサーは、町の前哨地点をすでに通りすぎて、ケーレブと娘が住んでいる通りの角に達していた。そして、一行が戸口へ到着す

るずっとまえから、ケーレブと盲目の少女は、一行を出迎えるために歩道で待っていたのだ。

ちなみに、ボクサーは、バーサと意志を伝えあうときには、かれ独特のある種の微妙な區別をしていた。それによつて、かれはバーサが盲目であることをちゃんと知っているということが、わたしにはとくと納得できたのだ。かれは、ほかのひとびとに対してよくしたように、バーサを見つめることで注意をひこうとはしないで、必ずからだに触れたのだ。

ボクサーが、目の見えないひとびとや目の見えない犬について、これまでどういった経験をもっていたか、わたしにはわからない。かれは盲目の主人と暮らしたことは一度もなかった。また、父のボクサーも母のボクサーも、あるいは、父方、母方のりっぱな家族のうちの一匹といえども、これまで盲目になったものは、わたしの知るかぎりいなかった。ボクサーは、もしかすると、その方法を自分で見つけたのかもしれない。ともかく、どういふものか、それを会得していた。

それゆえ、かれはバーサについても、スカートをくわえて、ピアリピングルの細君と、赤んぼうと、スロウボーイ嬢とバスケットが、残らず安全に家のなかにおさまるまで、しっか

りつかまえて放さなかった。

メイ・フィールディングは、すでに来ていた。母親も来ていた——気むずかしい顔をした、愚痴っぽい、小さなこっぱみたいな老婦人で、寝台の柱みたいな腰を保持してきたという理由で、きわめて卓越した人物だと思われていた。また、かつて暮らし向きがよかったとか、あるいは、一度も起こらなかったし、その後も格別に起こりそうには思えなかった——どっちだって同じことだが——ことが、もしも実現していたなら、よい暮らしができたかもしれないという思い違いをしてきた結果、ほんとうにとても上品で、ひとを見下すようなところがあった。

グラフ・アンド・タクルトンもまたそこに来ていて、大ピラミッドの頂上に跳びあがった、ぴちぴちした若いサケ*に劣らず完全にくつろぎ、疑いもなく得意の境地にいることをはつき

* サケ(salmon)は、『オックスフォード英語辞典』によれば、ラテン語の salmo に由来し、salmo はおそらく salite (跳ぶ)からの派生語であろう、とある。サケは、一回のジャンプで一、二メートル跳ぶと言われている。

りと感じながら、しきりに愛想を振りまいていた。

「メイ！ あたしの大事なお友だち！」

ちびは叫んで、メイに会いに駆けだしていった。

「あなたに会えて、なんてうれしいことでしょう！」

メアリーの古い友だちは、メアリーと同様に、心の底から喜んだ。そして、わたしの言うことを信じてくださるなら、二人が抱擁するのを見るのは、まったく楽しい光景だった。タクルトンは、疑う余地もなく、趣味のいい男だった。メイは、とても見目麗しかった。

読者もときどき経験されるように、きれいな顔に見なれている場合、それがまたべつのきれいな顔にぶつかって比較されるとき、当座は十人前で色あせたものに見えて、これまでの高い評価に値しないように思われることがあるものだ。ところが、このことは、ちびにも、メイにも、まったく当てはまらなかった。というのには、メイの顔は、いかにも自然に気もちよく、ちびの顔を引き立て、また、ちびの顔はメイの顔を引き立てたので、ジョン・ピアリビングルが部屋へはいつてきたとき、もうちよつとで言いそうになつたように、二人は姉妹同

士として生まれるべきだった——読者に示唆できたかもしれない改良案は、ただひとつ、それだけだった。

タクルトンは、羊肉の脚と、おまけに、語るも不思議なことながら、タルトまでもつてきていた——だが、花嫁がかかわっているときには、だれだって、少しばかりの散財は気にしないものだ。毎日結婚するわけじゃないからだ——そして、こういったご馳走のほかに、子牛の肉やハムパイや、ピアリビングルの細君のいわゆる「何やかや」があった。それは、おもにナッツや、オレンジや、ケーキや、そうしたちよつとしたご馳走だった。

その食事が、食卓の上に並べられ、そのわきにケーレブの寄贈になる大きな木鉢に盛った、湯気の立つジャガイモ（かれは厳かな契約によって、ほかの食物を出すことを禁じられていた）が置かれたとき、タクルトンは、未来の姑しゅうとめを主賓席に案内した。この素晴らしい祝宴に光彩を添えるために、この威厳のある老婦人は、思慮なきひとびとに畏敬の念を吹きこむ腹つもりで、帽子で身を飾っていた。彼女はまた、手袋をはめていた。とにかく、お上品にしましょう。さもなくば、死にましょう！

ケーレブは、娘の隣にすわった。ちびとそのむかしの学校友たちは並んですわった。善良な運送屋は、食卓の末席にすわって、主人役を務めた。スロウボーイ嬢は、赤んぼうの頭をぶつつけるものが何かそばにあつては困るので、当分、すわっている椅子を除いて、あらゆる家具から遠ざけられた。

テイリーがまわりの人形や玩具をじろじろ見ていると、人形や玩具もテイリーや一座のものをじろじろ見ていた。戸口にいた立派な老紳士たちは、みんな活動の真つ最中だったが、このパーティーに特別の関心を示して、会話に耳を傾けているかのように、跳ぶまえにときどき休止したり、それから、息をつくために止まることもしないで、何度も何度も、がむしやらくりかえして横木を跳び越えていた——まるで、こういう成り行き全体に狂喜しているかのように。

たしかに、もしも、これらの老紳士たちが、タクルトンの失敗ぶりをながめることに悪魔めいた喜びを味わいたがつていたとしたら、満足するべき理由は十分にあった。タクルトンは、ちつともうまくやっついていけなかった。かれの未来の花嫁が、ちびと同席して快活になれ

ばなるほど（その目的で二人をいっしょにしたくせに）、ますます気に入らなかつた。なぜなら、正真正銘の天の邪鬼だったのだ、タクルトンという男は。そこで、二人が笑っているのに、自分が笑えないときには、ただちに、二人は自分のことを笑っているのにちがいない、と思ひこむのだった。

「ああ、メイ！」

ちびが言った。

「まあ、まあ、なんて変わりようなんでしょう！ あの楽しい学校時代のお話をしていると、若返るような気がするわ」

「でも、あんたは、格別ふけこんじやないじやないか、いつだって。だろ？」
タクルトンは言った。

「あすこにいる、あたしのまじめな、こつこつ働く旦那さまを見てちょうだい」
ちびが答えた。

「あのひとは、少なくとも二十歳はあたしの年齢をふやしているわ。ね、そうじゃなくつ

て、ジョン？」

「四十だよ」

ジョンは答えた。

「あなた、メイをいくつ老けさせるか、あたし、ほんとにわからないわ」

ちびは笑いながら言った。

「でもね、こんどの誕生日には百歳にはほど遠いってわけにはいなくなるでしょうよ」

「ハ、ハ！」

タクルトンは笑った。だが、ドラムのようにうつろだった、その笑いは。そして、ちびの首をねじってやれたら、さぞ気もちがよいだろう、というような顔をした。

「ほんとにねえ！」

ちびは言った。

「あたしたち、学校にいたころ、将来えらぶ夫のことをよく話しあったものよね。そんなことを思い出しただけでも……。どんなに若いか、どんなにハンサムか、どんな

に陽気か、どんなに活発か知らないけど、あたしの夫はそうはならなかったわ！　そして、メイの夫はというと！　——ああ！　あたしたち、なんて愚かな娘たちだったのか、と思うと、あたし、笑っていいのか、泣いていいのかわからない」

メイは、どちらにするべきかを知っているようだった。というのは、顔にさっと血の色がさして、瞳がぬれてきたからだ。

「現実の人間のことさえ——実際に生きている青年たちのことよ——ときどき意中のひとと決めたこともあったわね」

ちびが言った。

「物事がどうなっていくのか、ちつとも考えなかったんだわ、あたしたち。あたし、ジョンに決めたことなんか、一度もなかったわ、ほんとうよ。ジョンのことなんか、考えたことさえなかったわ。それで、もしあたしが、あなたはタクルトンさんと結婚することになるのよ、って言ったなら、きっとあなたは、あたしをびしゃりとぶつたことでしょうよ。そうじゃなくって、メイ？」

メイは、そうだとはいわなかったけれど、たしかに、いいえともいわなかったし、そういう表情も絶対にしなかった。

タクルトンは、笑った。それこそ喚わめいたと言ってもよかった。それほど大声の笑いだったのだ。ジョン・ピアリングルも、いつものひとのいい、満足した様子で笑った。しかし、かれの笑い声は、タクルトンのと比べると、ほんのささやきみたいな笑いだった。

「にもかかわらず、あんたらは、どうしようもなかったんだ。おれたちに抵抗できなかったんだ」

タクルトンは言った。

「だって、ここに来てるじゃないか！ 現にここにいるじゃないか！ あんたらの陽気で若い花婿たちは、いまだここにいるんだい？」

「死んだひともいるし」

ちびは言った。

「忘れてしまったひともいるわ。なかには、この瞬間、あたしたちのあいだに立ったとし

ても、あたしたちがむかしと同じ人間だとは信じないひともいるでしょうよ。見たり聞いたりしたことが本当だということも、あたしたちが、かれらをすっかり忘れることもできる、つてことを信じないひともいるでしょう。そうよ！ あの一とたちは、こう言ったつて、ひとことも信じないでしょうよ！」

「おいおい、おちびさん！」

運送屋は、語気を強めて言った。

「小おんなさん！」

ちびは、非常に真剣に、熱意をこめて話していたので、もちろん、少しわれに返らせる必要があつた。夫の制止は、非常におだやかだつた。というのは、年とつたタクルトンをかばうつもりでさえぎつたにすぎなかつたからだ。しかし、それは効き目があつた。ちびは、ピタツと話をやめ、それ以上何も言わなかつたのだ。ちびは、黙つてはいても、異常に興奮していた。その様子を、油断のないタクルトンは、例の半ばとじた目をちびのほうへ向けて、細かく注目し、そして、かなりよく覚えていたのだつた。

メイは、よかれ悪しかれ、ひとことも言わないで、目を伏せたまま、じつとすわっていて、ことのなりゆきに関心をもつそぶりは少しも見せなかった。このとき、メイの母親のりっぱな婦人が口をはさみ、まず第一に、少女は少女であり、過ぎ去ったことは過ぎ去ったことだ、若いひとびとが若くて思慮のないあいだは、おそらく、若い思慮のないひとのようにふるまうだろう、と言った。さらに、これに劣らず健全で議論の余地のないたぐいの意見を二、三、つけ加えた。

夫人は、それから、娘のメイがいつも孝行な従順な子供であったことを神さまに感謝している、と敬虔な気もちで述べた。それはもっぱら自分のせいだと信じるべき理由は十分にあるけれども、それを自分の手柄にはしたくないと言った。

タクルトン氏については、かれが道徳的見地から見て、非のうちどころのない人物で、婿選びという点から言えば、望ましい婿どのであることを、正気のひとつならだれも疑うことはできない、と言った（ここで、彼女は非常に語気を強めた）。

タクルトン氏が、いくらか懇願したあと、やがて出入りを許されるはずの家族について言

えば、タクルトン氏もご存じのことと信じるが、いまでこそ財産は減っているものの、家柄のよさを自負しており、インド藍貿易とまんざら関係がないでもないと言つてもよいが、これ以上とくに触れようとは思わない、ある事情が、違つた結果になつていたなら、一家はおそらく大金もちになつていたかもしれない、と言つた。

夫人は、それから、過去のことには触れたくないし、娘がしばらくのあいだタクルトン氏の求婚をこぼんでいたことも言いたくないと言つた。また、その他非常にたくさんのことについても言いたくないと言いながら、事実、それを長々と述べたてた。

最後に、自分の観察と経験の一般的な結果として、ロマンチックで、またおろかしくも恋愛と呼ばれているものが、もつとも含まれていない結婚が、つねにもつとも幸福な結婚であると言ひ、また、間近に迫つた婚礼からは最大限の幸福——有頂天の幸福ではなくて、堅実な信頼できる幸福——を期待している、と述べた。

夫人は、あすこそは、自分がとくに目標として生きてきた日であり、その日が終われば、どこか上品な埋葬地に荷造りして片づけられる以外のことは望んでいない、と一座に告げて、

ことばを結んだ。

こういった所見は、まったく返答のしようのないものだったので——それは、てんでのはずれの所見すべてに備わるおめでたい特性なのだ——一同は、会話の流れの方向を変え、みんなの注意を、子牛の肉とハムパイ、冷えた羊肉、じゃがいもやタルトに逸らした。びんづめのビールが軽んじられないように、ジョン・ピアリングルは、明日、すなわち、結婚式の日を祝って乾杯しようと發議し、自分がひとつ走り仕事に出かけるまえに、祝杯を挙げることを一同に求めた。

というのは、ぜひ知っていただきたいのだが、ジョンは、そこでひと休みして、年老いた馬に秣まぐさをあたえただけだったのだ。ジョンは、およそ四、五マイルほど先へ行かなければならなかった。そして、夕方帰ってくるとき、妻を迎えに立ち寄って、帰宅の途中、もう一度休むのだ。これがどんなピクニックの場合でも、当日の日程であり、この行事が開始されて以来のかれらの慣例であった。

やがて結ばれる花嫁・花婿のほかに、その場に居合わせたひとびとで、その乾杯に無頓着

な敬意しかしめさなかった者が、二人いた。その一人はちびで、彼女はあまりにも興奮し、落ち着きを失っていたので、そのときのどんな小さなできごとにも適応することができなかつた。もう一人は、バーサで、彼女は他のひとたちよりも先にあわただしく立ちあがって、食卓を離れた。

「さよなら！」

恰幅のよいジョン・ピアリングルは、厚ラシヤの外套をひっかけながら言った。

「おれは、いつもの時間に戻ってくるからな。みんな、さよなら！」

「さよなら、ジョン」

ケーレブが答えた。

ケーレブは、それを機械的に言い、同じく無意識的な態度で手を振っているように見えた。というのは、決して表情を変えない、心配そうな、げんそうな顔で、バーサを観察していたからだった。

「さよなら、坊や！」

陽気な運送屋はそう言って、腰をかがめて子どもに接吻した。子どもは、目下、せつせとナイフとフォークを動かしているテイリー・スロウボーイが、バーサがしつらえた小さい寝台なかに寝かしつけておいたのだった。（しかも、語るも不思議なことに、何の損傷もなく――。）

「さよなら！　なあ、小さな友よ、寒い外へおまえさんが出て行って、年とった父親を炉端でパイプと、リ्यूマチを楽しませておいてくれるときが、たぶん、いつか来るだろう、え？　おちびさんはどこかな？」

「ここにいるわ、ジョン！」

ちびは、びくつとしながら言った。

「さあ、さあ！」

運送屋は、よく鳴る手をたたきながら、言った。

「パイプはどこにあるんだい？」

「パイプのことは、すっかり忘れちゃってたわ、ジョン」

パイプのことを忘れる！　こんな不思議な話を聞いたことがあるだろうか！　ちびが！　パイプを忘れるなんて！

「あたし——あたし、すぐ詰めるわ。じきにできるわ」

しかし、それは、そんなにすぐにはできなかった。パイプは、いつもの場所——運送屋の厚ラシャ外套のポケットのなかに——ちびの手製の小さなパウチといっしょにはいつていた。そのパウチからいつもたばこを出して詰めていたのである。

しかし、手がひどく震えていたので、パウチからんでしまい（しかし、ちびの手は小さいので、きつと容易に抜けたはずだ）、おそろしくへまをやらかした。パイプにたばこを詰めて火をつけるといふ、わたしが彼女の慎重さを推賞しておいたあの小さな仕事が、初めから終わりまでじつに下手くそにおこなわれた。

その仕事をしているあいだずっと、タクルトン立って、例の半ばとじた目で悪意をもつてながめていた。その目がちびの目と会うたびに——というより、ちびの目を捕らえるたびにと言うほうがあたっている。なにしろ、その目は、むしろ、ひとの目を捕らえるわなのご

ときもので、とてもひとの目と会った、と言えるような代物ではなかったのだ——ちびの狼の度合は、みるみる高まっていった。

「おや、きょうは、なんて不器用なおちびさんだろう！」

ジョンが言った。

「おれがやつても、もつとうまくやれたろうよ、ほんとにさ！」

こういうひとのよいことばとともに、ジョンは、大股で歩き去った。と間もなく、ボクサーや年とつた馬や荷馬車といっしょに生き生きとした音楽をかなでながら道を下っていく音が聞こえた。

そのあいだ、ぼうつとしたケーレブは、顔に以前と同じ表情を浮かべたまま、目の見えな娘を見つめながら、まだ立ちつくしていた。

「バーサ！」

ケーレブは、静かに言った。

「何があつたんだい？ 二、三時間のうちに、すっかり変わっちゃったじゃないか——け

さほどからだよ。おまえは、一日じゅう、だまりこくって、ぼんやりしている！ どうしたんだい？ 言つてごらん！」

「ああ、おとうさん、おとうさん！」

盲目の娘は叫んで、ワツと泣きだした。

「ああ、あたしのつらい、つらい運命！」

ケーレブは、答えるまえに、手で両の目をぬぐった。

「でも、考えてごらん、バーサ、おまえはこれまでどんなに快活で幸福だったことか！ どんなにいい子で、どんなにたくさんのひとに愛されていたことか」

「それは身にしみて感じているわ、大事なおとうさん！ いつもあんなに気を遣ってくださるんだもの！ いつもあんなに親切にしてくださるんですもの！」

ケーレブは、ひどく困惑していて、娘の気もちがわからなかった。

「目が——目が見えないってことは、バーサ、かわいそうな娘」

ケーレブは、口ごもった。

「大きな苦しみだ。でもな——」

「いままでそんなこと、一度も感じたことなかなかつたわ、あたし」

盲目の娘が叫んだ。

「そんなこと、しみじみ感じたことなんか一度もなかつたわ。一度もね！　ときには、おとうさんを見ることができたら、あの方を見ることができたらと思つたわ——たつた一度でいいの、大事なおとうさん、ほんのちよつとのあいだでいいの——そうしたら、あたしがここに大事にしまつて——」

娘は、胸に両手をおいた。

「抱きしめているものの正体がわかるでしょう！　きつと、きちんととらえることができらるでしょう！　そして、ときには（でも、あときは子どもだったわ）、夜のお祈りのとき、おとうさんの姿があたしの胸から天へ昇っていくとき、それがおとうさんの本当の似姿ではないかもしれないと思つて、泣いたこともあつたわ。でも、そういう感情を長くもつていたことは一度もないの。そういうものは消え去つて、また静かな満ち足りた気もちになつたの」

「また、そうなるだろうよ」

ケーレブは言った。

「でもね、おとうさん！ ああ、あたしの素敵な、優しいおとうさん、あたしが悪い子でしたら、堪忍してくださいね！」

盲目の娘が言った。

「あたしをこんなに打ちひしがらせているのは、そういう悲しみじゃないの！」

娘の父親は、濡れた目から涙があふれ出るのにまかせるほかなかった。娘は、それほど真剣で、痛ましかった。けれども、かれはまだ娘の気もちがわかっていなかった。

「あのひとをここへ連れてきてちょうだい」

バーサは言った。

「あたし、この気もちを心のなかに隠してとじこめおくことができないの。あのひとをここへ連れてきてちょうだい、おとうさん！」

バーサは、父親が躊躇しているのを知ると、こう言った。

「メイよ。メイを連れてきてちょうだい、おとうさん！」

メイは、自分の名が言われたのを聞くと、静かにバーサのほうにやってきて、その腕にさわった。盲目の娘は、すぐに向き直って、相手の両手をつかんだ。

「あたしの顔を覗いてみて、いとしいひと、やさしいひと！」

バーサは言った。

「あなたの美しい目でそれを読んで、そこに真実が書いてあるかどうか教えてちょうだい」

「大事なバーサ、書いてあるわ！」

盲目の娘は、涙がポタポタと流れくだる、うつろな、視力のない顔をあげて、次のようなことばで話しかけた。

「あたしの心のなかには、あなたのためによかれと思わない願いや考えはひとつもないわ、美しいメイ！ あたしの心のなかには、そこにしまっている、深い追憶ほど強い、ありがたい思い出はほかにないわ。目もよく見え、美しさの盛りにあるあなたは、何度も何度も、目の見えないバーサのことを親身になって考えてくださったわね、また、あたしたち二人が子

どもだったころでさえ、あるいは、目が見えないためにバーサがまるで子ども同然だったころにもね。

あなたの頭上に、ありつたけの祝福がありますように！ あなたの幸福な行く手に光が射しますように！ にもかかわらず、あたしの大事なメイ」

バーサは、メイのほうへ近づいて、相手の手をいっそう強くつかんだ。

「にもかかわらず、かわいいひと、きょう、あなたがあのひとの奥さんになるということを知って、あたしは胸を締めつけられて、張り裂けそうだったの！ おとうさん、メイ、メアリ！ ああ、あたしがそうであっても、あのかたがあたしの暗い生活のわびしさを和らげるためにしてくださったことに免じて、また、立派なあのかたにこれ以上ふさわしい奥さんを望むことはできない、と神かけて誓うあたしのことを信じてくださって、どうか許してくださいね！」

話しているうちに、バーサは、メイ・フィールディングの両手を放して、懇願と愛情の入りまじった態度で、メイの着物をにぎりしめていた。不思議な告白をつづけながら、バーサ

は、次第にくずれ落ちていき、ついに友人の足もとに倒れて、目の見えない顔を友人のドレスのひだのなかに隠してしまった。

「偉大な神さま！」

一撃のもとに真実のうちくだかれて、バーサの父親はさげんだ。

「揺りかごのころから娘をあざむいてきたのに、結局は、娘の胸を張り裂けさせただけだったのでしょうか！」

一同にとって幸いだったことは、ちびが、あの晴れやかな、役に立つ、忙しく働くちびが——彼女はまさしくそうだった——どんな欠点があろうとも、また、やがては読者がどんなに彼女を憎むようになるうとも、そこに居合わせたことだった——彼女がそこにいたことは、わたしは言わせれば、一同にとって幸いだった。さもなければ、この場がどう収まったか、わかりかねたところだろう。しかし、ちびは、落ち着きをとりもどして、メイが返事をできないうちに、あるいは、ケーレブがもうひとことを言えないうちに、口をはさんだ。

「さあ、さあ、大事なバーサ！ いっしょに向こうへ行きましょう！ メイ、あなたの腕

をこのひとに貸してあげて。そう、そう！ ほら、このひと、もうすっかり落ち着いてきたわ。それに、あたしたちのことを気にかけてくれて、何てやさしいひとなんでしょー」
バーサのひたいに接吻しながら、陽気な小さい女は言った。

「向こうへ行きましょう、バーサ！ さあ！ 優しいおとうさんもいつしよに来てくれるわね、ケーレブ？ きつーとーね！」

やれ、やれ！ こういうことにかけては、すばらしく上手なちびだった。だから、彼女の影響力にさからえるのは、よっぽど頑固な性質な人間にちがいなかった。この父娘のみがおたがいに励まし慰めあうことができるということ、ちびは知っていたので、二人がそのようにできるように、哀れなケーレブとバーサを向こうへ連れていき、まもなくーことわざにもあるように、ヒナギクのように生き生きと、いや、わたしに言わせれば、ヒナギクよりもさらに生き生きと——弾むような足取りで帰ってきて、帽子をかぶり、手袋をはめ、そり返って威張っている、例のお偉い方の見張りに立って、この老女にいろいろなことを発見されないように努めた。

「それじゃあ、大事な赤ちゃんを連れてきて、ティリー」

椅子を暖炉のほうへ引きよせながら、メアリーは言った。

「そして、あたしがこの子をだっこしているあいだにね、ティリー、ここにいらつしやる
フィールディングの奥さんが、育児のいっさいについて話してくださって、あたしがとつ
もなくまちがえている、たくさんの点を直してくださいさるはずよ。そうしてくださいさるでしょう、
フィールディングの奥さん？」

通俗本の表現によれば、ひどく「とんま」なウエルズの巨人*だって——かれは朝食時に
自分の大敵がやってのけた手品を競いあつて、自分に致命的な外科手術をほどこしたのだが

* 「巨人殺しのジャック」の昔話から。ジャックはウエルズへ行つて、邪悪な巨人の家に泊まる。巨人は、
4ガロンのプディングを朝食に出したが、ジャックはひそかに上着の下に革袋を用意して、プディングを
これに全部入れて、食べてしまったふりをする。そして、手品を見せてやると言つて、ナイフで革袋を切
り開いてプディングを全部出してみせる。巨人はそれを見て、「そんな手品ならおれにもできるぞ」とナ
イフを取つて、自分の腹をかっさばいて死んでしまった。



——その巨人だって、この老婦人がこの巧妙な落とし穴にはまったように、自分のために仕掛けられたわなにその半分もやすやすとひっかかりはしなかっただろう。

タクルトンは、歩いて外へ出て行っていたし、そのうえ、二、三人の人たちがやや離れたところで二分間もこそ話してあって、夫人をほったらかしておいたという事実は、夫人をつんとさせ、あのインド藍貿易の不可思議な激変を二十四時のあいだ歎かしめるのに十分だった。けれども、この若い母親から、彼女の経験に対してふさわしい敬意を払われたのは、あまりにもあらがいがたいものだったので、少しのあいだ謙遜を装ったあとで、この上もなく気前よく相手に教えはじめた。

そして、ひとの悪いちびのまえに背筋をしやきつと伸ばしてすわったまま、三十分にわたって、絶対確実な家庭の秘訣や教訓のかずかずを伝授した。それは、あのピアリビングル二世が、よしんば幼児のサムソン*であつたとしても、(もしそのとおりに行しようものなら)、

*サムソンは、旧訳聖書「士師記」十三―十六章の出てくるヘブライの大力無双士師。愛人デリラにだまされて大力を失い、ペリシテ人に目玉をくりぬかれた。

すっかり体をこわされ、疲れさせてしまうだけでは済まないほどのものだった。

話題を変えるために、ちびは、少しばかり針仕事をした——彼女は、裁縫箱の中味をそっくりポケットに入れて持ちまわっていたのだ。どう工夫すれば、そんなことができたのか、わたしにはわからない——それから、ちよつと乳をのませ、それから、またちよつと針仕事をし、それから、老女が居眠りをしているあいだ、メイと小声でちよつとおしゃべりをした。このように、まさしくちびがいつもやっているとおりに、小さな仕事をばたばたとやっているうちに、午後が飛ぶように過ぎ去ってしまった。

それから、そろそろ暗くなってきたし、また、バーサのうちの家事を全部ひきうけることが、このピクニックの慣例の厳粛な部分になっていたので、ちびは、暖炉の火を整えたり、炉端を掃除したり、茶卓を出したり、カーテンを引いたり、ロウソクに火をともしたりした。それから、ケーレブがバーサのために作った粗末なハープで一、二曲奏でた。しかも、大変上手に奏でた。というのは、自然の女神は、ちびの優美な小さな耳を、もし身につける宝石をもっていたなら、すばらしく宝石の似合う耳にしたであろうと同様に、音楽に対しても

えり抜きの耳にしていたからだ。

もうこのころには、お茶にするおきまりの時刻になっていた。そして、タクルトンも、食事を共にし、夕べを過ごすために戻ってきた。

ケーレブとバーサは、それより少しまえに部屋に戻ってきていた。そして、ケーレブは、腰をおろして、午後の仕事にとりかかっていた。しかし、かわいそうに、娘のことが心配で、また後悔もしていたので、仕事に身を入れることができなかった。かれが仕事用のスツールにぼんやりとすわって、悲しそうに娘を見つめ、「おれはあの子を揺りかごのころからあざむいてきて、結局は、胸の張り裂ける思いをさせただけだったのか！」とその顔がいつも語っているのを見ると、なんとも哀れだった。

夜になって、お茶もすんで、ちびがカップやソーサーを洗いあげて、ほかにもうすることがなくなるとき、ひとくちで言えば——というのは、そのことに触れなければならぬし、それを先へ延ばしてもはじまらないからだ——遠くに車輪の音が聞こえるたびごとに、まもなく運送屋が帰ってくる時刻だということを知って、またしてもちびの様子が変わって、顔

色が赤くなったり、青くなったりした。そして、ひどくそわそわしていた。およそ夫の足音に耳をすましているときの善良な妻のようではなかった。いや、いや、いや。それとは違つた落ちつきのなさだった。

車輪の音が聞こえた。馬の足音。犬のほえる声。あらゆる物音が次第に近づいてくる。ボクサーの前足がドアをひっかく音！

「あれは、だれの足音？」

はつとして立ち上がりながら、バーサが叫んだ。

「だれの足音だつて？」

運送屋は、肌を刺すような夜気のため、褐色の顔を、冬期に赤い実をつけるモチノキのように真っ赤にして、やりかえした。

「なあに、おれのだよ」

「もうひとつの足音よ」

バーサが言った。

「おじさんのうしろの足音のことよ！」

「この子はだませないな」

運送屋は、笑いながら言った。

「こちらへいらっしゃい、旦那。歓迎されますよ、心配なく！」

運送屋は、大声で話した。そう言っているあいだに、例の耳の遠い老紳士がはいってきた。

「このひとはな、おまえさんが一度も会ったことがないというほど、見知らぬひとじゃな

いよ、ケーレブ」

運送屋は言った。

「おれたちが帰るまで、このひとを部屋においてくれるだろうか？」

「ああ、いいとも、ジョン。光栄に思うよ」

「このひとはな、内証話をするにはまたとない相手なんだ」

ジョンが言った。

「おれの肺はかなり丈夫だが、このひとが相手だと息切れがするんだ、まったくの話。お

すわんなさい、旦那。ここに居るのは、みんな友だちで、あなたにお目にかかって喜んでいますよ！」

ジョンは、この保証を、さきほど自分の肺について言ったことを十分に裏書きするような声で伝えると、こんどは普通の声で言い添えた。

「このひとが望んでいるのはな、炉端の椅子と、おし黙ってすわって、まわりを楽しく見まわす許可だけなのさ。このひとを喜ばすのは、造作ないことだよ」

バーサは、熱心に聞き耳を立てていた。ケーレブが椅子を出したとき、バーサは、かれをわきに呼び、客の特徴を説明してくれと低い声で頼んだ。かれが説明してきかせると（こんどは、忠実に、ものがたい正確をもって話した）、バーサは、客がはいつてきてからはじめて身じろぎし、ため息をついた。そして、客についてはそれ以上の興味を失ったように見えた。

運送屋は、なにしろ善良な男なので、すこぶる上機嫌だった。そして、これまでもまして、小さい妻が好きになった。

「不器用なおちびさんだったね、きょうの午後は！」

かれは、ほかの人たちから離れて立っている妻を無骨な腕で抱きかかえながら言った。

「だが、おれは、どういうものかおちびさんが好きだよ。あそこをごらん、おちびさん！」

かれは、老人を指さした。メアリーはうつむいた。思うに、震えているようだった。

「あのひとはな——ハ、ハ、ハ！——あのひとはな、おまえさんを褒めちぎっているんだよ！」

運送屋は言った。

「ほかの話はまるつきりしないんだ、ここまでの道中ずっと。いや、すばらしいじいさんさ。だから、おれはあのひとが好きなんだ！」

「あのひと、もつとましなことを話題にすればよかったのにね、ジョン」

メアリーは、不安そうに部屋のなかをちらっと見まわした、とりわけタクルトンを。

「もつとましな話題だって！」

陽気なジョンが叫んだ。

「そんなものがあるものか。さあ！ オーバーを脱いで、厚い肩掛けもとって、重たい上っ張りも脱いでしまえ！ それから炉端で気もちのよい半時間を過ごす、っと！ ご機嫌いかがです、奥さん。クリベッジをひと勝負どうです、ごいっしょに？ そいつは話せる。トランプと台だ、おちびさん。それに、残っていたらビールを一杯頼むよ、小さな奥さん！」

運送屋の挑戦は、老婦人に向けてなされた。彼女が愛想よく、すぐに応じたので、二人はただち勝負にとりかかった。はじめのうち、運送屋は、ときどき微笑を浮かべてあたりを見まわしたり、ときおり、ちびを呼んで、肩ごしに覗いてかれの手を見て、厄介なところは助言してくれ、と頼んだりしていた。

ところが、相手は規則にやかましく、それに、権利以上に得点をこまかすという弱点をとときどき見せたので、ジョンとしては目も耳も離せないほど警戒していなければならなかった。こうして、ジョンの注意は、徐々にすっかりトランプに集中されていって、ほかのことは何も考えなくなつた。と、やがて、だれかの手が肩にふれて、やっとなクルトンがいるのを思いだした。

「おじやましてすまんがね——ちょっとひとこと、いますぐにだ」

「いまカードを配るところなんだよ」

運送屋は、やりかえした。

「大事なところなんだ」

「そうさ、大事なところだよ」

タクルトンは言った。

「こつちへ来いよ、おい！」

タクルトンの青ざめた顔には、相手をただちに立ち上がらせ、いったい何事だ、と急いで尋ねさせるものがあった。

「しっ！ ジョン・ピアリングル」

タクルトンは言った。

「こんなことになって気の毒だ。ほんとうに。ずうっと心配してたんだ。初めっから怪しいとにらんでたんだ」

「何のことだい？」

運送屋は、おびえた顔をしてたずねた。

「しっ！ 見せてやるさ、いっしょに来ればな」

運送屋は、もうひとことも言わずに、タクルトンに従^ついていった。二人は、星が輝いている中庭を横切り、小さい脇戸からタクルトンの会計事務室にはいった。そこには、ガラス窓があつて、夜間は閉めてある商品保管所を見おろせた。事務室自体のなかには灯りはなかったが、細長い商品保管所にはランプがともっていた。そのため、窓は明るかった。

「ちよつと待て！」

タクルトンは言った。

「おまえさんは、あの窓から覗いて見るのに耐えられると思うかい？」

「どうして耐えられないんだい？」

運送屋がやりかえした。

「もうちよつと待て」

タクルトンは言った。

「乱暴なまねをしちやいかんぞ。そんなことをしたってしょうがないからな。それにまた危険でもある。おまえさんは、頑丈なからだをした男だからな。自分で気づかないうちに、人殺しをやらかしてしまうかもしれない」

運送屋は、相手の顔をじいっと見て、殴られたように一歩あとずさりした。ひとまたぎで、窓ぎわへ行き、そして見た――

おお、炉辺をおおう黒い影！ おお、正直なおろぎ！ おお、不貞な妻！

ジョンは、妻があの人といっしょにいるのを見た――老人は、もう老人ではなくて、からだがまっすぐで、雄々しい男で――白髪のかつらを手にしていた。そのかつらを着けて、かれらのわびしい、みじめな家のなかへはいりこんできたのだった。

ジョンは、男が頭をかがめて妻の耳もとでささやいたとき、妻が男のことに耳を傾けているのを見た。また、さっきはいつてきたドアのほうへ、二人が薄暗い木の廊下をゆっくりと歩いていくとき、男が妻の腰に腕を巻きつけるままにさせているのを見た。

ジョンは、二人が立ちどまって、妻が振り向くのを見た——あの顔、ジョンがあんなに愛していた顔を、真正面からかれの視線にさらしたのだ！——そして、妻が自分自身の手で、男の頭にかつらをかぶせてやり、そうしながら、疑うことを知らないジョンの性質を笑っているのを見た！

ジョンは、最初、たくましい右手をぎゅっと握りしめた。あたかも、ライオンでも打ち倒せただろうと思われるほどの勢いだった。しかし、すぐに開き、タクルトンのまえで広げてみせた（このときでさえ、ジョンは妻に対してやさしい気もちをいただいていたからだ）。こうして二人が部屋から出ていったとき、かれは机の上にごぼと身を伏せて、幼児のようになぐったりしてしまった。

ちびが帰り仕度をして、部屋にはいつてきたとき、ジョンは、あごまで外套にくるまって、馬や小包の整理で忙しくしていた。

「それじゃあ、ジョン！ おやすみなさい、メイ！ おやすみなさい、バーサ！」

メアリーは、かれらにキスできただろうか？ 別れに際して、朗らかに、陽気にふるまう

ことができただろうか？ 赤面もしないで、かれらに思いきって自分の顔をさらすことができただろうか？ できた。タクルトンが、しげしげとメアリーを見守っていたが、メアリーは、こういうことを残らずやってのけた。

ティリーは、赤んぼうをあやしていた。そして、タクルトンの前を数十回も通りすぎながら、眠たそうな声で、こうくりかえしていた。

「じゃあ、それが妻たちであることを知って、胸たちが痛んで張り裂けそうになったのですか？ また、おとうさんたちが、揺りかごたちのころからだましてきて、とうとう、胸たちを張り裂けさせてしまったのですか！」

「さあ、ティリー、坊やをよこして！ おやすみなさい、タクルトンさん。ジョンはどこにいるの、お願いだから？」

「あいつは、馬の頭のわきを歩いていくつもりだよ」

タクルトンは言って、手を貸してメアリーを席に着けた。

「まあジョン。歩いていくの？ 今夜は？」

外套にくるまった夫の姿は、急いでそうだという身振りをした。そして、偽物のよそ者と小さい子守がそれぞれ席に着くと、老いぼれた馬は動きだした。ボクサーは、何も知らないボクサーは、荷馬車のまえを駆けていったり、また駆け戻ってきて、荷馬車のまわりをぐるぐる走りまわったり、いつもに劣らず勝ちほこったように、そして陽気にほえたてた。

タクルトンが、メイとその母親を家までエスコートするために、同じように帰ってしまったとき、かわいいそうなケーレブは、暖炉のわきの娘のそばに、心底から心配し、後悔しながら、腰をおろした。そして、物思わしげに娘を見つめながら、「揺りかごのころから娘をあげむいてきて、とうとう、胸の張り裂ける思いをさせただけだったのか！」となおも言いつづけていた。

赤んぼうのために動かしてあった玩具は、どれもずっと前からぜんまいが切れて、動かなくなっていた。かすかな光と沈黙のなかで、平然と落ち着きはらった人形、目や鼻孔をふくらませて揺り動かされていた揺り木馬、表の戸口でからだをなかば二つに折って、衰えたひざとくるぶしで立っている老紳士たち、しかめっ面のクルミ割り、寄宿学校の遠足のように、

二列に並んでノアの方舟に乗りこむ途中のけだものたちまでが、いったい、どんな事情が組みあわさって、ちびが不倫を働いたり、あるいは、タクルトンが女性に愛されたりするのか、と奇異の感じに打たれて、ぼったり動かなくなったのだ、と想像してもよさそうだった。

第三声

運送屋が炉辺に腰をおろしたとき、隅っこのオランダ時計が十時を打った。あまりにも心が混乱し、悲しみに打ちひしがれていたので、かれは郭公をおびえさせたらしかった。郭公は、その十回の音楽的な告示をできるだけ早く切りあげ、ムーア風の宮殿のなかへ再び飛びこんで、この見慣れない光景は、自分の感情には耐えられないとでもいうように、小さいとびらをピシヤツと閉めてしまった。

かりに、あの小さな干し草作りが、世にも鋭利な大鎌で身を固めて、ひと振りごとに運送屋の胸に切りつけたとしても、ちびがやったように、深く切り、傷つけることはできなかつただろう。

それは、ちびに対する愛情でいっぱい胸だった。ちびの愛情にあふれた、かずかずの性

質が日ごとなせる業から紡がれた、愛嬌のある思い出の無数の糸でとじられ、束ねられた胸だった。それは、ちびがとでも優しく、とてもしつかりと安置されていた胸だった。真実にかけては、あまりにもひたむきで、あまりにも真剣で、善にかけてはあまりにも強く、悪にかけてはあまりにも弱い胸だった。そこで、はじめは激怒も復讐心もいざしくことができず、その偶像のこわれた面影を入れるだけの余裕しかなかった。

しかし、運送屋が、いまは冷たく、暗くなった炉辺にすわってじつと考えこんでいるうちに、ゆっくりと、ゆっくりと、べつの、一段と猛々しい考えが、あたかも荒れ狂う風が夜中に起こってくるように、胸のなかに湧きはじめた。あの見知らぬ男は、かれの踏みにじられた屋根の下にいるのだ。三歩歩けば、あの男の部屋のドアのところへ行ける。一撃を加えれば、ドアをたたきこわせるだろう。「おまえさんは、自分が気づかないうちに人殺しをやらかしてしまいかもしれない」とタクルトンは言っていた。あの悪党に取っ組みあうひまをあたえたなら、どうして人殺しになるだろうか？ あいつのほうが年が若いのだ。

それは、ジョンの暗い気分にとつて、時を得ない考えだった。それは、怒れる考えで、ジ

ジョンをそそのかして、何か復讐の行為に駆りたて、この楽しい家を幽霊屋敷に変えてしまいかねなかった。そして、ひとり歩きの旅人は、夜分そこを通るのを恐れ、臆病な人間は、月がおぼろのときには、こわれた窓辺に亡霊がもがいているのを見かけ、あらしの日には、狂気じみた物音を聞くことになるだろう。

あいつのほうが年が若いのだ！ そうだ、そうだ。かれがついぞ触れたこともない心をとらえてしまった、どこかの恋人なのだ。妻が若いときに選んだ恋人、かれのそばにいてあんなに幸せだと思っていたときに、妻はその恋人のことを考え、夢みていたのだ。その恋人に恋いこがれていたのだ。ああ、それを考えると、死ぬほど苦しい！

ちびは、赤んぼうと二階にいて、赤んぼうを寝かしつけていた。ジョンがじつと考えこんで炉辺にすわっているとき、ちびはすぐそばへやって来た。しかし、ジョンは、それに気づかなかった——かれの大きな苦悩の拷問台のまわる音のために、ほかの音はいっさい聞こえなかったのだ——それから、ちびは、自分の小さなスツールをジョンの足もとに置いた。ちびの手が自分の手の上に置かれるのを感じたときはじめて、ジョンはそれと気づき、ちびが

かれの顔を振り仰いで覗きこんでいるのを見た。

いぶかしそうにか？ 違う。これがジョンの第一印象だった。それを正すために、もう一度、ちびを見ないではいられなかった。やはり、いぶかしそうにはない。熱心な、もの問いたげな目つきだが、いぶかしそうにはない。はじめは、びっくりした、真剣な顔つきだった。それから、ジョンの考えを読みとった、奇妙な、狂気じみた、恐ろしげな微笑に変わった。それから、ひたいの上で指を組み合わせた手と、うつむいた頭と、垂れ下がっている髪の毛のほかは何も見えなかった。

全能の神の力が、この瞬間、ジョンのものとなって、それを行使できたとしても、ジョンの胸のなかには、それよりもっと神聖な神の慈悲の性質があふれていた。その力の羽根一本ぶんだって、ちびに加えることはできなかった。しかし、あんなに罪のない、陽気な愛情と誇りをもって、ちびをしばしばながめた、その小さい席にちびがうずくまっているのを見るに耐えられなかった。

そして、ちびが立ちあがって、すすり泣きながら、そばを離れていったとき、あのように

長いこと大事に慈いづくしんできたちびがそばにいるよりは、その席が空いているほうがむしろ救いと感じられた。このことは、それ自体、なによりも鋭い、身を切られるような苦悩であり、ジョンがいかに寂しくなってしまったか、ジョンの人生の大きな絆が、いかにずたずたに断ち切られてしまったかを思い出させた。

このことを考えれば考えるほど、そして、ちびが若死にして、かれらのかわいい赤んぼうを胸に抱いて、かれの前に横たわっているのを見るほうが、まだしもがまんしやすい、とわかればわかるほど、敵に対するジョンの慍いかりは、ますます高く、ますます強く、燃えあがっていった。かれは、あたりを見まわして武器を捜した。

銃が一挺、壁にかかっていた。ジョンは、それを下ろして、不実な、見知らぬ男の部屋のドアのほうへ一、二歩、足を運んだ。かれは、その銃に弾丸たまがこめてあるのを知っていた。この男を、野獣のように射ち殺すのは正しいことだ、という漠とした考えがジョンをとらえ、心のなかで膨張して、ついにはぞつとするような悪魔となって、ジョンを完全にとりこにし、おだやかな考えをすべて追い出して、統一帝国を打ち建ててしまった。

この表現は、まちがっている。ジョンのおだやかな考えを追い出したのではなくて、巧妙に変形したのだ。ジョンを追いたてる筈しもとに変えたのだ。水を血に、愛を憎しみに、優しさを盲目的な獐猛さに変えたのだ。悲しみつつ、卑しめられながらも、なおも、あらがいがたい力でもって、ジョンの優しさと慈悲を嘆願している妻のイメージは、決してジョンの心を離れることがなかった。そして、そこにとどまったまま、ジョンをドアへと駆りたて、武器を肩へになわせ、指を引き金にあてて、力を入れさせ、「あいつを殺せ！ ベッドに寝ているところを！」と叫んだ。

ジョンは、銃をさかさにもって、台尻でドアをたたこうとした。すでに空中に振りあげていた。後生だから、窓から逃げてくれ、と相手に向かって怒鳴ろうとする、ぼんやりした意図が気もちのなかにあった――

そのとき、突然、消えかかっていた火がパツと燃えあがり、煙出し全体を明るく照らし、炉辺のおろぎがリ・リ、リ・リ……と鳴きはじめたのだ！

ジョンがこれまでに聞きえたどんな音も、いかなる人間の声も、ちびの声でさえも、それ

ほどまでにジョンの心を動かし、和らげることはできなかっただろう。この同じこおろぎに對する愛情をジョンに話したときのちびの飾りのないことばが、もう一度、生き生きと語られた。あの折りのちびのうちふるえる真剣な態度が、再び、ジョンのまえによりがえった。ちびの心地よい声——ああ、正直な男の炉辺で家庭の音楽を奏でるのに、それはなんとすばらしい声だったろう！——それは、かれの良心の隅から隅までしみ渡り、それを目覚めさせ、活動させた。

運送屋は、恐ろしい夢からさめた夢遊病者のように、ドアからあとじさりした。そして、銃をわきへ置いた。それから、顔のまえに両手を組みあわせて握りしめながら、再び炉辺に腰をおろし、涙のなかに慰藉を見いだした。

炉辺のこおろぎは、部屋のなかに立ち現れ、妖精の姿で運送屋のまえに立った。

「へあたし、あれが大好きよ」

妖精の声が、ジョンがよく聞き覚えていることばをくりかえして言った。

「へ何度も何度も鳴くのを聞いてきたし、あの無邪気な音楽がいろいろな思いをあたえてく



れたんですもの」

「あれは、そう言った！」

運送屋は叫んだ。

「そのとおりだ！」

「へこは幸福な家庭だったわ、ジョン！ それだから、あたし、こおろぎが大好きなの！

」

「そうだった、神様もご存じだ」

運送屋が答えた。

「あれは、この家庭を幸福にしてくれた、いつも——いままではな」

「あんなに、しとやかで、気立てがやさしく、あんなに家庭的で、喜びにあふれて、よく働き、快活なひと！」

その声は言った。

「そうでなければ、おれが愛していたようには、あれを愛することは絶対でできなかったろ

うよ
「

運送屋は答えた。

その声は、かれのことばを訂正して、言った。

「愛しているように」

運送屋は「愛していたように」とくりかえした。しかし、きっぱりとではなかった。運送屋のどもりがちな舌は、かれの言うことをきかず、それ自身とかれのために、勝手にしゃべろうとした。

妖情の姿は、祈りの態度で手をさしあげて、こう言った。

「あなた自身の暖炉にかけて」

「あれが汚してしまった暖炉だ」

運送屋は口をはさんだ。

「あのひとが——ああ、なんとしばしば！——祝福し、明るくしてきた暖炉です」

こおろぎが言った。

「あのひとがいなかったら、その暖炉は、数個の石と煉瓦と錆びた鉄の棒にすぎないけれど、あのひとのおかげで、あなたの家庭の祭壇となり、その上にあなたは、夜ごと、つまりぬ激情や、利己心や、心配をいけにえとしてきた。そして、平静な心や、信頼する性質や、胸いっぱい的心情の貢ぎ物を捧げてきたのです。」

だから、この貧しい煙突からの煙は、この世のあらゆる華美な殿堂の内部のもっとも豊かな祭壇のまえで焚かれる、もっとも豊かな香料よりも、さらによい香りをただよわせて、立ちのぼっていったのです！——

あなた自身の暖炉にかけて、その静かな聖域のなかで、そのやさしい感化力と連想にとりまかまれて、あのひとの言うことをお聞きなさい！ わたしの言うことをお聞きなさい！ あなたの暖炉と家庭のことばを話す、あらゆるものに耳を傾けなさい！」

「そして、あれを弁護するあらゆるものにかね？」
運送屋は、たずねた。

「あなたの暖炉と家庭のことばを話すあらゆるものは、あのひとを弁護するにちがひあり、

「ま、せん！」

こおろぎは、やりかえした。

「なぜなら、かれらは真実を話すからです」

そして、運送屋が両手に顔をうずめて、椅子にすわって、思いに沈みつづけているあいだ、その精は運送屋のかたわらに立って、その力により、かれにさまざまなことを熟考させ、それを鏡か絵にでも映したように、かれの前に映し出して見せた。それは、ひとりぼっちの精ではなかった。

炉石から、煙突から、時計、パイプ、やかんや揺りかごから、床、壁、天井、階段から、外の荷馬車や屋内の食器棚や台所道具から、ちびがこれまで親しんできた、また、不幸な夫の心のなかで、ちびのひとつの思い出と絡みついているあらゆるもの、あらゆる場所から、妖精たちがぞろぞろと隊列を作って出てきた。

そして、こおろぎのように、ジョンのそばに立つのではなく、せわしく立ち働いていた。ちびの幻影にありつただけの敬意を表し、それが現れると、ジョンの裾を引っ張り、指ししめ

した。ちびの幻影のまわりに群がって、それを抱擁し、花をまいて踏んでいけるようにした。かれらのちっちゃな手で、その美しい頭に冠をのせようとした。自分たちはちびが好きで、愛していること、また、ちびをよく知っていることと主張するものに、醜い、意地悪な、ひとをとがめるようなものは一人もない——みんな陽気な、ちびを褒めるものばかりであることを示した。

ジョンの思いは、ちびの幻影に忠実だった。幻影はいつもそこにあった。

ちびは、暖炉のまえで、ひとりで歌いながら、せっせと針仕事をしていた。あんなに楽しそうに、榮えていく、しつかり者のかわいいちび！ 妖精の姿は、不意に、言い合わせたように、びつくりするほど大きな、集中した凝視をジョンに浴びせかけた。そして、こう言うように思われた。

「これが、あなたが嘆いている尻軽な奥さんですか！」

外から賑やかな音が聞こえてきた。楽器の音、さわがしい人声、笑い声だ。さんざめく若者の群れがなだれこんできた。そのなかに、メイ・フィールディングと、二十人ばかりのき

れいな娘たちがいた。ちびは、彼女らすべてのうちでもいちばん美しく、また、だれにも劣らず若かった。彼女らは、仲間に加わるように、とちびを呼びにきたのだった。ダンスパーティーだった。もしも、小さな足がダンスをするために作られたとするなら、ちびの足こそが、たしかにそうだった。

しかし、ちびは笑って、かぶりを振り、火にかけた料理と、料理を並べる用意のできた食卓を、勝ちほこったような挑戦的態度で指さした。その様子は、ちびをこれまでよりもいっそうチャーミングに見せた。

こうして、メアリーは、楽しげにかれらを去らせた。自分こそメアリーのパートナーにと思っていた連中が出ていくとき、その一人ひとりに向かつてうなずいたが、その態度がまた滑稽なほどよそよそしかったので、もしかれらがメアリーの賛美者だったら——かれらは実際多少ともそうであったにちがいない、賛美者にならずにはいられなかったのだ——ただちに、水に身を投げて自殺しただろうと思われるほどだった。

とはいえ、よそよそしきは、メアリーの性格ではなかった。ああ、断じて！　というのは、

やがて戸口に、ある運送屋がやってくると、ほんとにまあ、何という歓迎をその男にあたえたことだろう！

再び、じっと見つめていた妖精たちは、突然、ジョンのほうを向いて、こう言っているように思われた

「これが、あなたを見棄てた奥さんですか？」

ひとつの影が、鏡をいっても絵といってもよいものの上に落ちてきた、どちらでも好きなように呼んでほしい。はじめて、かれらの屋根の下に立ったときのままの、あの見知らぬ男の大きな影だ。それは、鏡か絵の表面いっぱいをおおい、ほかのものは、全部消してしまった。が、はしっこい妖精たちが蜜蜂のように働いて、それをまた拭きとってしまった。すると、再び、ちびがそこに現れた。やはり、晴れやかで、美しい。

揺りかごの小さな赤ん坊を揺り動かし、やさしく歌を歌ってやり、そして、こおろぎの妖精が立っているそばで、いま物思いにふけている姿に生き写しの男の肩に、頭をもたせかけていた。

その夜——わたしの言うのは現実の夜で、妖精の時計によるものではない——は、いまや更けつつあった。そして、運送屋の考えがこのような段階にあつたときに、月が突然現れて、空に皎々と照りわたつた。もしかすると、何か穏やかな、静かな光が、運送屋の心のなかに昇つてきていたのかもしれない。そこで、運送屋は、これまでに起こつたことを、まえよりも冷静に考えることができた。

見知らぬ男の影は、ときどき鏡の上に落ちた——つねにはつきりと、大きく、あくまでも輪郭がくつきりしていた——けれども、最初のときほど暗く映ることは一度もなかった。その影が現れるたびに、妖精たちは、いつせいに驚愕の叫び声をあげ、想像もつかないほど活発に、小さな手足をせつせと動かして、それを拭い消そうとした。そして、再びちびを見いだして、もう一度、晴れやかな美しい姿で、ちびをジョンに見せたたびごとに、心も浮き立つような喝采をした。

妖精たちは、美しく晴れやかでないちびを見せることは絶対になかった。なぜなら、かれらは、嘘をついたりすれば絶滅するほかない、家庭の精だったからだ。そうであつたから、

かれらにとって、ちびは、運送屋の家庭の光であり、太陽であるとも言うべき、活動的な、晴れやかな、気もちのよい、小おんな以外の何であつただろうか！

妖精たちは、メアリーが赤んぼうを抱いて、思慮深い年配の主婦の一団にまじつて世間話をしてながら、自分もすてきな年配の主婦らしいふりをしているところや、いつものように落ち着いた、つつましい態度で、夫の腕によりかかりながら——彼女ときたら！　まるで蓄みたいな小さな女のくせに——世間一般の虚栄を誓つて棄てて、母となることなどちつとも珍しいことじゃない、と考えるたぐいの人間であるという考えをひとに伝えようとしているところを示したときは、とてつもなく興奮した。

しかし、同時に、妖精たちは、運送屋が不器用だと言つてメアリーが笑つているところや、かれをスマートにしようとして、シャツの襟をひっぱりあげているところや、かれにダンスの仕方を教えてやろうと、その同じ部屋を楽しそうに気どつて歩いているところも見せた！　妖精たちは、メアリーが盲目の少女といっしょにいるところを見せたとき、向き直つて、運送屋を穴のあくほど凝視した。というのは、メアリーはどこへ行くときにも、明るさと生

気を運んでいったけれど、ケーレブ・プラマーの家へは、そういった感化力を、あふれるばかりに、どっさり山と積んで持ちこんだからだ。盲目の少女のメアリーに対する愛情や、信頼や、感謝。バーサの感謝を、せわしくしりぞけるメアリーの上手なやり方。その訪問の一瞬间を、何かしらその家にとって役に立つことをして満たし、休日を楽しんでいるように見せながら、じつは懸命に働いているという、メアリーの巧妙な、ささやかな技術。

子牛の肉や、ハムパイや、ビールのびんなどの、あのいつものご馳走をたっぷり用意しておくこと。戸口に着いたときと、いとまごいをするときの輝くばかりの小さな顔。この家の一部分——この家に必要不可欠で、この人がいなくては、この家は立ちいかないものであるということが、きれいな足から頭のとっぺんまで、不思議に全身に表れていること。これらすべてを妖精たちは大いに喜び、それゆえに彼女を愛した。

そして、もう一度、かれらは、いっせいに、訴えるように、ジョンを見て、そのうちの何人かが、メアリーのドレスにすり寄って、彼女を優しくなでているあいだに、「これがあなたの信頼を裏切った奥さんですか？」と言っているように思われた。

物思いにふけた、その長い夜のあいだに、一度や二度や三度どころではなく、妖精たちは、メアリーが、お気に入りの席にすわって、うなだれて、組みあわせた両手をひたいに押しあて、髪を垂れ下がらせている姿をジョンに見せた。それは、最後に見たとおりの姿だった。

そして、妖精たちは、メアリーがこうしているのを見ると、ジョンの方を振り向きもせず見もしないで、ぴったりとメアリーのまわりに集まって、慰めたり、接吻したりした。そして、メアリーに同情と親切を示そうと、たがいに押しあいへしあいをして、ジョンのことはすっかり忘れてしまった。

このようにして、夜は過ぎていった。月は沈み、星の光りはうすれ、寒い夜が明けて、陽が昇った。運送屋は、まだ炉端にすわって考えこんでいた。かれは、ひと晩じゅう、両手の上にうつぶせたまま、そこにすわっていた。夜どおし、忠実なこおろぎは、リリ、リリ、リリーと、炉辺で鳴きつづけていた。夜どおし、ジョンはその声に聞き入っていた。夜どおし、家庭の妖精たちは、ジョンのことでいそがしくしていた。夜どおし、メアリーは、鏡のなか

で愛らしく潔白であった、あのひとつの影が鏡に映ったときを除いて――。

夜がすっかり明けたとき、運送屋は立ちあがって、顔を洗い、着替えをした。かれは、いつもの楽しい仕事にとりかかることはできなかった――そうする元気がなかった――が、それは大した問題ではなかった。きょうは、タクルトンの結婚日で、代理人を集配にまわらせる手筈をしておいたからだ。ジョンは、ちびといっしょに、楽しく教会へ行くつもりであった。だが、そんな計画もおじやんになってしまった。その日は、かれら自身の結婚記念日でもあった。ああ、このような一年に、このような結末がくるなんて、ジョンは夢にも思っていなかった！

運送屋は、タクルトンが、朝早ばやと訪れてくるだろうと予想していたが、果たしてそのとおりだった。自分の家の前をいきつも戻りしはじめてから、何分もたたぬうちに、玩具商が二輪馬車で向こうからやってくるのが目にはいった。馬車が近づくにつれて、タクルトンが婚礼のために粹に着飾り、馬の頭を花やリボンで飾っているのがわかってきた。

馬のほうがタクルトンよりもはるかに花婿らしく見えた。タクルトンの半ばとじた目は、

以前よりもっと不愉快に表情に富んでいた。だが、運送屋はそれにほとんど気づかなかつた。かれの心は、ほかのことを考えていた。

「ジョン・ピアリングル！」

お悔やみを言うような態度で、タクルトンは言った。

「ねえあんた、けさはどんな具合かね？」

「ゆうべはよく眠れなかつたよ、タクルトンの親方」

運送屋は、首を振りながら答えた。

「ずいぶん気もちをかき乱されたんでね。だが、それももうすんだよ！ 内証の話をしたいで、半時間そこいら割いてくれるかい？」

「おれは、そのために来たんだ」

タクルトンは、馬から降りながら答えた。

「馬の心配はいらんよ。手綱をこの棒にかけただけで、十分おとなしくしてくれるさ、干し草のひと口もやつてくれたらな」

運送屋が、馬小屋から干し草をもってきて、馬のまえに置いてから、二人は家のなかへは
いった。

「昼まえには結婚はしないだろうな？」

ジョンは言った。

「と思うんだが？」

「そうだ」

タクルトンは答えた。

「時間はたっぷりある。時間はたっぷりある」

かれらが台所へはいつていったとき、ティリー・スロウボーイが、よそ者の部屋のドアを
コツコツたたいていた。そこは、台所から、二、三步しか離れていなかった。ひどく赤い目
(奥さんが泣いていたので、ティリーも、夜どおし泣いていたのだ)を一方だけ鍵穴にあて
がって、ドンドン音をたててノックしており、そしておびえている様子だった。

「あのおう、だれも答えてくれないんだけど」

テイリーは、あたりを見まわしながら、言った。

「どうか、だれも自殺なんてばかなまねをしてなきやいいんだけど！」

この博愛的な願望を、スロウボーイ嬢は、いろんな新しいドアのたたき方や蹴り方で強調したけれど、なんの結果もたらさなかった。

「わしが行ってみようか？」

タクルトンが言った。

「どうもおかしい」

運送屋は、ドアから顔をそむけていたが、行きたかったらそうしてくれ、と合図した。

そこで、タクルトンは、テイリー・スロウボーイの救援におもむいて、かれもまたドアを蹴ったり、ノックしたりしたが、やはり何の答えも得られなかった。しかし、タクルトンは、ドアの取っ手をまわしてみようと考えた。すると、ドアがわけなくあいたので、そっと覗きこみ、じっくり見てから、はいつていった。そして、まもなくまた走って出てきた。

「ジョン・ピアリングル」

タクルトンは、相手に耳うちして言った。

「ゆうべは何事もなかったんだろうな——何も早まったことはしなかっただろうな？」

運送屋は、すばやく、タクルトンのほうを向いた。

「だって、あの男はいなくなってるからさ！」

タクルトンは言った。

「それに窓があいている。何の跡形も見えない——たしかに、あの窓は庭とほとんど同じ高さだ。でも、何か——何か取っ組みあいみたいなものがあつたんじゃないか、と心配してるんだ。え？」

タクルトンは、例の表情に富んだ目をほとんどすっかり閉じてしまった。それくらいまじまじと運送屋を見つめていた。そして、かれの目、顔、からだ全体を鋭くねじった。まるで、相手から真相をねじり出したがっているかのように——。

「安心してくれ」運送屋が言った。

「あの男は、ゆうべ、おれからことばでも行為でも、ひどい目に遭わされたりしないで、

あの部屋へは行っていった、そのあと、だれもあの部屋には行っていない。あの男は、自由意志でいなくなつたのさ。もしあの男が来なかつたというように、過去を変えることができないものなら、おれは、喜んであの戸口から出て行って、一生涯、家から家へ物乞いをして歩いてもいい。しかし、あの男は、やって来て立ち去つたんだ。だから、あの男とはこれで縁が切れたのさ！」

「ああ！——とにかく、あの男は、かなりたやすく逃げおおせたってわけだ」
椅子にすわりながら、タクルトンは言った。

その冷笑は、運送屋には通じなかつた。かれもまた腰をおろすと、ことばをつづけるまえに、しばらく、片手で顔をおおっていた。

「あんたは、ゆうべ、おれに見せてくれたよな」
かれは、ついに言った。

「おれの妻が、おれの愛している妻が、ひそかに——」

「そして、やさしく」

タクルトンは、ほのめかした。

「あんたは、あの男の変装を見て見ぬふりをして、二人っきりで妻に会う機会をあたえたのだ。あれほど、見たくなかった光景はなかつたと思うよ。世界じゅうであんたぐらい、あの光景を見せてもらいたくなかつた人間はいないと思うよ」

「白状するが、おれはつねづね怪しいとらんでいたんだ」

タクルトンは言った。

「おかげで、この家では鼻つまみになっていたことも、知っている」

「だが、あんたがあれを見せてくれたので」

運送屋は、相手におかまいなくことばをつづけた。

「また、あんたがあれを、おれの妻を、おれの愛している妻を見たからには」

——こういうことばをくりかえしているうちに、ジョンの声、目、手は、次第に落ちついてしつかりしたものになっていった。明かに、ある確固たる目的を追求しているのだつた——

「あんたが、こういう不利な立場にいる妻を見たからには、あんたもまた、おれの目で見、

おれの胸のなかをのぞいて、この問題についておれがどう考えているかを知るのは、正しい、また正当なことだ。そのことは、もう決着がついているんだから」

運送屋は言って、相手をじつと見つめた。

「そして、どんなことがあっても、もうぐらつきはしない」

タクルトンは、何か潔白を証明するものが必要だということについて、漠然とした賛成のことばを、ふたこと、みことつぶやいたが、相手の態度に圧倒されてしまった。その態度は、率直で、素朴なものながら、どことなく、威厳のある、気高いところがあった。それは、この男に宿る寛大な道義心にしか伝えることのできないものであった。

「おれは、平凡な、無骨な男だ」

運送屋はことばをつづけた。

「とりえといつては、ほとんどない。おれは、あんたもよく知っているとおり、利口な男じゃない。おれは、若い男じゃない。おれがちびを愛したのは、おやじさんの家で子どもときから大人になるのを見てきたからだし、どんなに大事なひとか知っていたからだ。何年も

何年ものあいだ、おれの命であったからだ。世間にはおれなんか及びもつかない男はごまんといるが、おれみたいに、おれのちびを愛することなんか絶対できなかっただろう、とおれは考えているんだ！」

ジョンは、ことばを切った。それから、再び話をつづけるまえに、一方の足をしばらく静かに床に打ちつけていた。

「おれは、あれに十分ふさわしいほど立派な男じゃないけれど、あれにとって親切な夫になれるし、おそらく、ほかのだれよりも、あれの価値がわかっている、とよく考えたものさ。こうして、それを自分の心に納得させて、二人は結婚することができるかもしれないと考えるようになったんだ。そして、おしまいに、うまくことが運んで、おれたちはほんとに結婚したのさ」

「ハッ！」

タクルトンは言って、意味ありげに頭を振った。

「おれは、自分の心をじっくり覗いてみた。おれは、自分のことは経験でよく知っていた。

おれがどんなにあれを愛しているか、おれがどんなに幸福になれるかも知っていた」

運送屋は、ことばをつづけた。

「だが、おれは——いまにしてそう感じるのだが——あれのことを十分に考えていなかったのだ」

「たしかにな」

タクルトンは言った。

「浮わついで、浅薄で、移り気で、ちやほやされるのが大好き！　そういう点は考えなかつたんだな！　みんな目につかなかつたんだ！　ハッ！」

「話の腰を折らんほうがいい」

運送屋は、やや手厳しく言った。

「おれの言ってることがわかるようになるまではな。ところが、あんたはおれの言ってることがさっぱりわかっていない。きのう、あれのことをひとことでもあしざまに言う男がいたら、一撃でたたききめしたとすれば、きょうは、たとえ兄弟であろうと、その面を踏み

にじってやるんだ！」

玩具商人は、驚いてかれを見つめた。運送屋は、調子を和らげてことばをつづけた。

「おれは考えただろうか」

かれは言った。

「あれを——あの年齢ととしの、あの美しい彼女を——あれの若い仲間たちから、また、あれが飾りであり、これまでにないくらい輝かしい小さい星であった多くの場面から連れてきて、くる日もくる日も、おれの退屈な家に閉じこめて、おもしろくもないおれの相手をさせたってことを？」

おれは考えただろうか、彼女の活発な気質におれがどんなに向いていないか、また、おれのようなまじめがとりえの男が、あれのように、はしっこい精神の女性にとって、どんなに飽き飽きするものであるかってことを？

おれは考えただろうか、あれを知っているひとなら、だれだって愛するにちがいないのに、おれにはあれを愛するとりえもなければ権利もないってことを？

一度だって考えたことがない。おれは、あれの楽天的な性質と陽気な気だてにつけこんで、結婚してしまった。結婚しなければよかった！ おれのためにはなく、あれのために！」

玩具商人は、まばたきもせず、運送屋を見つめていた。例の半ばとじた目さえ、いまはあけていた。

「あれに神さまの祝福がありますように！」

運送屋は言った。

「このことをおれに知らすまいと努めてきた、あれの快活な貞節さに対して！ また、心の動きがのろいたために、いままでそれがわからなかったわたしをお助けください！

かわいそうな子！ かわいそうなちび！ おれたちのに似た結婚が話題になったとき、あれの目が涙でいっぱいになるのを見ながら、おれはそれに気がつかなかったなんて！ あれの唇がひそかに震えるのを百たびも見ながら、昨夜までそれを怪しんだことがなかった！ かわいそうな娘！ あれがおれを好きになるだろうなんて、よくも望んだものだ！ あれがおれを好いていてくれるなんて、よくも信じていたものだ！」

「あのひとは、そう見せかけていたんだ」

タクルトンは言った。

「あんまりそんな見せかけをするもんだから、実を言うと、そこがおれの疑いのもとだったのさ」

そして、ここで、タクルトンは、かれを好いているような見せかけなど全然しない、メイ・フィールディングのほうがまさっている、と主張した。

「あれは努めてきたんだ」

気の毒な運送屋は、これまで表したことのないような強い感動をこめて言った。

「おれは、いまごろになってやっと、わかりはじめたんだ、あれがおれの忠実な、熱心な妻になろうとして、どんなに一生懸命に努めてきたかということが。あれがどんなにやさしかったか、どんなに尽くしてくれたか、どんなに雄々しく強い心をもっているか、この屋根の下でおれが味わってきた幸福に証人になってもらおう！ おれがここに独りぼっちになっても、そのことがせめてものおれの助けとなり、慰めとなるだろう」

「ここに独りぼっちで？」

タクルトンは言った。

「ああ！ それじゃあ、あんたもこの件を見逃さないつもりなんだな？」

「おれのつもりは」

運送屋はやりかえした。

「力の及ぶかぎり、あれに最大の親切を尽くし、最上の償いをしてやることだ。おれは、不釣り合いな結婚による日々の苦痛と、それを隠そうとする苦闘からあれを解放してやれる。おれにしてやれるかぎり、あれを自由にしてやるんだ」

「あ、あの女に償いをするって！」

タクルトンは大声をあげ、大きな耳を両手でねじむけた。

「この耳はどうかしているにちがいない。もちろん、あんたはそんなことは言わなかったんだ」

運送屋は、玩具商人の襟をぐいとつかんで、アシの茎のように揺すぶった。

「よく聴け！」

かれは言った。

「聴きまちがえないように注意しろ。よく聴くんだ。おれは、はっきりと話しているかい？」

「ほんとに、とてもはっきりしているよ」

タクルトンが答えた。

「本気で言ってるようにかい？」

「たしかに、本気で言ってるようにだ」

「おれは、ゆうべ、あの炉端にすわっていた、夜どおし」

運送屋は語気を強めて言った。

「あれがやさしい顔でおれの顔をのぞきこみながら、たびたび、おれのそばにすわっていたところだな。おれは、あれの全生涯を、一日一日と思い起こしてみた。いとしいあれの姿を、ひとこま、ひとこま、目の前に浮かべて回顧してみた。そして、おれの魂にかけて、あれは潔白だ、もしも、潔白なものと、罪あるものを裁くお方があるとすれば！」

炉辺の忠実なおろぎよ！ 家庭の誠実な妖精たちよ！

「怒りと疑惑は、おれから去ってしまった！」

運送屋は言った。

「そして、いまは悲しみのほか何も残っていない。不幸な瞬間に、むかしの恋人が——あれには好みや年齢の点でおれよりもぴったりしていながら、もしかすると、おれゆえに、あれが心ならずも棄てた恋人が戻ってきたのだ。不幸な瞬間に、不意をつかれ、自分が何をしているか考える余裕もなく、その男の裏切りを隠したことで、その共犯者となってしまったのだ。昨夜、おれたちが目撃したあの会見において、あれはその男に会ったのだ。それはまちがいだった。だが、そのことを除けば、この世に真実というものがあるなら、あれは潔白だ！」

「それがあんたの意見なら——」

タクルトンは、切りだした。

「だから、あれを行かしてやろう！」

運送屋は、ことばをつづけた。

「あれが多くのご幸福な時をくれたお礼に祝福をあたえ、おれ心に引き起こした苦痛には赦しをあたえて、あれを行かせてやろう、あれを行かせて、おれがあれのために望んでいる心の平和をもたせてやろう！ あれは決しておれを憎みはしないだろう。おれがあれにとつて足手まといでなくなり、おれがしばっていた鎖がいまよりも軽くなつたときには、おれをもつと好きになつてくれるだろう。

きょうは、おれがあれの楽しみなことなどほとんど考えてやりもしないで、あれを実家から連れてきた日だ。きょう、あれをそこへ帰してやろう。そして、もうあれに迷惑をかけないようにしよう。

あれの両親が、きょう、ここへ来ることになつてゐる——おれたちは、いっしょに、結婚記念日を祝うささやかな計画を立てていたんだ——そして、両親にあれを連れて帰つてもらおう。あそこだと、いや、どこであろうと、おれはあれを信頼できる。あれは、潔白におれと別れ、潔白に生きていくだろう、おれはそう確信している。

もし、おれが死ぬようなことがあれば——あれがまだ若いうちに、もしかすると、おれは死ぬかもしれない。数時間のあいだに、おれはいくぶん氣力をなくしてしまった——あれは、おれがあれのことを忘れないで、最後まで愛していたことを知るだろう！　これが、あんたが見せてくれたことの結末だ。さあ、これでおしまいだ！」

「いいえ、違うわ、ジョン、おしまいじゃないわ。まだ、おしまいだなんて言わないで！　まだすっかりおしまいじゃないわ。あたし、あなたの氣高いことばを聞いたわ。こんなに深い感謝の氣もちで感動したことを知らないふりをして、こっそり出ていくなんてできなかったわ。時計がもう一度打つまで、おしまいだなんて言わないでちようだい！」

メアリーは、タクルトンのすぐあとからはいつてきて、そこにどまつていたのだった。メアリーは、一度もタクルトンを見ないで、じいっと夫に目をそそいでいた。だが、夫とのあいだにできるだけ距離をおいて、かれから遠ざかっていた。そして、非常に熱をこめて真剣な口調で話したにもかかわらず、そのときですら、夫に一歩も近づこうとはしなかった。これは、いつものメアリーとはなんという相違だろう！

「どんな職人だって、過ぎ去った時間をもう一度打つてくれるような時計を作ることはいかないよ」

運送屋は、かすかな笑みを浮かべて答えた。

「だが、おまえが望むなら、そういうことにしておこう、時計は、やがて打つだろう。おれたちが何を言おうと、そんなことは大したことじゃない。それよりもっと困難な場合にだって、おれはおまえを喜ばせようと努めるだろうよ」

「さてと！」

タクルトンはつぶやいた。

「わしは、もう行かなくちゃあ。こんど時計が打つときには、教会へ出かけていなきやならんからな。さよなら、ジョン・ピアリビングル、あんたが出席してくれる喜びがなくなつて残念だよ。その損失は残念だが、その原因もまた残念だ！」

「おれは、はつきりと話しただろう？」

運送屋は、戸口までタクルトンを送っていきながら言った。

「ああ、まったくね！」

「そして、あんたは、おれの言ったことを忘れないだろうな？」

「そうさな、もしあんたが無理やりおれに意見を言わせるのなら」

タクルトンは、用心して前もって自分の二輪馬車に乗りこみながら、言った。

「あんたのことばがあんまり思いがけなかったんで、とてもじゃないが、忘れそうになりね」

「そのほうがなおさら結構だよ、おれたち二人にとって」

運送屋は答えた。

「さよなら。お幸せに！」

「あ、ん、た、にも、さ、う、言、つ、て、や、れ、た、ら、い、い、ん、だ、が、ね」

タクルトンが言った。

「それができないからね。ありがとよ。ここだけの話だが（まえにも言ったよな、え？）メイがおれのことであんまりおせっかいいし、あんまり愛情をあらわに示さないからっ

て、わしの結婚生活がそれだけ喜びが少なくなるとは思わないね。さようなら！

お大事に！」

運送屋は、タクルトンの姿が遠くなつて、手近で見た馬の飾り花やリボンよりも小さくなるまで、立って見送っていた。それから、深いため息をつき、落ちつかない、打ちひしがれたひとのように、近くのニレの木立のあいだをぶらぶら歩きまわった。時計が鳴る寸前まで戻りたくなかったのだ。

かれの小さい妻は、一人残されて、悲しそうに泣きじゃくった。しかし、たびたび涙をぬぐっては、泣くのをやめて、あのひとは、なんといいひとなのでしょう、なんと立派なひとなのでしょうと言い、一、二度、声をたてて笑った。それがあまりにも心からの、勝ち誇つたような、つじつまの合わない（そのあいだ、ずっと泣きながら）、笑いだったので、テイリーは、すっかりぞっとしてしまった。

「おう、どうか、泣かないでください！」

テイリーは言った。

「そんなふうだと、赤ちゃんが死んで埋葬されちまいます、あのう、ほんとですよ」

「ときどき、この子を連れていってくれる、この子のおとうさんに会わせに、テイリー？」
女主人は、涙をぬぐいながらたずねた。

「あたしがここに暮らせなくなつて、里に帰つてからも？」

「おう、どうか、もうよしてください！」

頭をのけぞらして、わつと泣きわめきながら、テイリーは叫んだ——この瞬間、テイリーは、異様にボクサーに似た顔つきになっていた。

「おう、どうかもうよしてください！ おう、みんなが、みんなにどんなばかまねをしないで、ほかのみんなをこんな不幸にしちゃったんでしょ！ おうーうーうーうー！」

心やさしいスロウボーイは、このとき、次第に手のつけられないほど泣きわめきだした。

それは、長いあいだ抑えていたために、一段と大きくなった泣き声だったので、もし、テイリーの目が、娘の手を引いてはいつてきたケーレブ・フラマーの姿をとらえなかつたなら、絶対まちがひなく、赤んぼうの目を覚まさせ、おびえさせて、何か深刻な状態（たぶん、引

きつけ)におとし入れたにちがいない。

この光景が、テイリーに礼儀作法の念を思いおこさせたので、彼女は数秒のあいだ、口をあんぐりあけて立っていた。それから、あたふたと赤んぼうが眠っているベッドのところへ行って、床の上で奇妙な舞踏病にかかったみたいに踊り、同時に、顔や頭で布団の中をかきまわした。どうやら、そういう異常な動作から、大きな安心を得ているようだった。

「メアリー！」

バーサが言った。

「結婚式には出なかったのね！」

「あんたは行かないだろう、とこの子に言ったんだよ、おかみさん」

ケーレブは小声で言った。

「ゆうべ、あのことだけは聞いたよ。でも、かわいそうに」

小柄な男は、やさしく相手の両手をとりながら言った。

「連中が何を言おうと、わしは気にしないよ。連中の言うことなんか、わしは信じないよ。」

わしは大きなからだじゃないが、その小さいからだをずたずたに引き裂かれたほうがましだよ、あんたをあしざまに言うことばを信じるくらいなら」

ケーレブは、メアリーのからだに両腕をまわし、まるで子どもが自分の人形のひとつを抱きしめるように、メアリーをひしと抱きしめた。

「バーサは、けさは家にじっとしていることができなかったんだ」
ケーレブは言った。

「この子は、鐘が鳴るのを聞くのがこわかったんだ。そして、あのひとたちの結婚の日に、あのひとたちの近くにいることに耐えられなかったんだ。そこで、わしらは早めに家を出て、ここへ来たんだ。わしは、自分のやったことをずうっと考えていたんだ」

ちよっと黙っていたあとで、ケーレブは言った。

「この子の心を苦しめたことで、自分自身を責めているうちに、わしは、どうしたらいいか、どこへ行ったらいいか、わからなくなってしまった。そして、おかみさん、あんたがそばにいてくれるなら、そのあいだ、本当のことを話してやったほうがいい、というふうに関

を決めたんだ。そのあいだ、そばにいてくれるだろうね？」

ケーレブは、頭のとっぺんからつま先まで震えながらたずねた。

「それがこの子にどんな影響を及ぼすか、わたしにはわからない。わしのことをどう考えるか、わたしにはわからない。このあともかわいそうな父親を好いてくれるかどうか、わたしにはわからない。だが、あの子に真実を教えるのがいちばんいいことなんだ。だから、わたしは当然、その結果に対する責任をとらなくちゃならない」

「メアリー」

バーサが言った。

「あなたの手はどこ！ ああ！ ここね、ここね！」

微笑を浮かべながら、バーサは自分の唇をその手を押しつけ、自分の腕にかかえこんだ。

「ゆうべ、あたし、あのひとたちが何かひそひそとあなたの悪口を言いあってるのを聞いたのよ。あのひとたち、まちがってるわ」

運送屋の妻は、黙っていた。ケーレブが代わって返事をした。

「あの連中は、まちがっていた」

ケーレブは言った。

「あたしは、それがわかっていたわ」

バーサは、誇らしげにさげんだ。

「あのひとたちにそう言ったのよ。あんなこと、ひとことだつて聞きたくなかつたわ！ あの女は非難されて当然ですつて！」

バーサは、相手の手を両手で握りしめ、相手のやわらかい頬を自分の顔におしつけた。

「いいえ！ あたしはそれほど盲目じゃないわ」

バーサの父親は、バーサの一方の側へ行き、ちびは、相変わらずバーサの手をとつたまま、反対側にいた。

「あたし、あなたがたみんなのこと、よく知ってるのよ」

バーサが言った。

「あなたがたが考えていらつしやるよりも以上にね。だけど、だれよりもメアリーのこと

をいちばんよく知っているわ。おとうさん、おとうさんよりもよ。あたしには、このひとの半分も誠実で真実なところはないわ。たったいま、この目が見えるようになったとしたら、ひとことも言われなくなつて、大勢のなかからこのひとを選び出すことができるわ！ あたしのお姉さん！」

「かわいいバーサ！」

ケーレブは言った。

「わたしたち三人きりでいるあいだに、おまえに話したいと気にかかったことがある。どうか聞いておくれ！ おまえに、告白しなくちゃならんことがあるんだよ。かわいい子」

「告白ですって、おとうさん？」

「わたしは真実からさまよい出て、道に迷ってしまったんだよ、娘や」

ケーレブは、途方にくれた顔にみじめな表情を浮かべて言った。

「わしが真実からさまよい出てしまったのは、おまえのためによかれと思つてのことなんだが、結局、むごいことをしたことになる」

バーサは、驚きにうたれた顔を父のほうに向け、「むごいことですよ！」とおうむがえしに言った。

「おとうさんは、あんまりひどく自分を責めすぎてるのよ、バーサ」
ちびが言った。

「まもなく、あなたもそう言うわ。あなたがいちばん先におとうさんにそう言うでしょう」
よ

「おとうさんがあたしにむごいことをしたですよ！」

バーサは、とても信じられないといった微笑を浮かべて言った。

「そういうつもりはなかったのだよ、娘や」

ケーレブが言った。

「だが、事実そうだったんだよ。きのうまでは、そうではないかと一度だって思いもしなかったんだが。かわいい盲目の娘よ、わしの言うことを聞いて、赦しておくれ。おまえの住んでいる世界は、いとしい子よ、わしが話してきかせていたようなかたちで存在してはいな

いんだ。おまえが信用していたこの目は、おまえをあざむいてきたんだよ」

バーサは、驚きにうたれた顔をまだ父親のほうへ向けていたが、あとじさりして、いっそうしつかりと友人にしがみついた。

「おまえの人生行路は、でこぼこだった、かわいそうな子」
ケーレブは言った。

「それで、わたしはそれをなめらかにしてやりたかったのだ。いろんな物を変え、ひとびとの性格を変え、ありもしないものをたくさん作り出した、おまえを幸福にしてやろうと思つてな。わたしはおまえにいろいろと隠し立てをし、おまえをだましてきた。神さま、わたしをお赦してください！　そして、いろいろの空想の産物をおまえのまわりに置いたのだ」

「でも、生きているひとびとは、空想の産物じゃないわ！」

バーサは、あわてて言ったが、ひどく青ざめて、なおも父親から身をひこうとした。

「人を変えることなんかできないわ」

「それをやったんだよ、わたしは、バーサ」

ケーレブは、懇願するように言った。

「おまえの知ってる一人のひとがいるね、かわいい子——」

「ああ、おとうさん！ あたしが知ってるなんて、なぜおっしゃるの！」

バーサは、辛辣な非難のことで答えた。

「何を、そしてだれを、あたしが知ってるっていうのでしょうか！ 導いてくれるひともないあたしが！ こんなみじめにも盲目のあたしが！」

心の苦悶のあまり、バーサは、手探りで進んでいくかのように、両手を差しのべた。それから、いともわびしそうに、そして悲しそうに、両手を広げて顔をおおった。

「きょう、おこなわれる結婚は」

ケーレブは言った。

「苛酷な、下劣な、強欲な男との結婚なんだよ。もう長年ものあいだ、娘や、おまえやわしにとつて非情な主人なんだ。顔つきも、性質も醜い男だ。いつだって冷たい、無情な男だ。わしがおまえに描いてやったのとはあらゆる点で違っているんだよ、わが子よ。あらゆる点

でな」

「ああ、なぜ」

盲目の娘は、よそ目にも、耐え切れないほど苦悩の色を表して叫んだ。

「いったい、なぜ、おとうさんはそんなことをなさったの？　なぜ、おとうさんは、あたしの心をあんなにいっぱいにしておいて、それから死神のようにはいりこんできて、あたしの愛の対象をむしり取っておしまいになるのでしょうか？　ああ、神さま、わたしはなんと盲目なんでございましょう！　なんと無力な、ひとりぼっちの身なのでしょう！」

苦悶する父親は、うなだれたまま、ひとことも答えず、ただ、後悔と悲しみに沈むばかりだった。

バーサがこの悲嘆の激情にひたっていると、ほどなく炉辺のこおろぎが、バーサのほかだれにも聞こえずに、リ・リ……と鳴きはじめた。陽気にはなく、低い、かすかな、悲しんでいる調子だった。それは、とても物悲しそうなので、バーサの涙が流れはじめた。そして、運送屋のそばに一晚じゅういたあの妖精が、バーサのうしろに現れて、父親を指さしたとき

には、涙は雨のように流れ落ちた。

バーサは、やがてこおろぎの声を、前よりもつとはつきりと聞きとった。そして、妖精が父のまわりを心配そうにつきまといっているのを、盲目の目を通して感じた。

「メアリー」

目の見えない娘は言った。

「あたしの家がどんなところか教えてちょうだい。ほんとにどんななのか」

「みすばらしいところだわ、バーサ。とてもみすばらしくて、ちっとも装飾がないの。家は、あとひと冬、風雨をしのげないでしょうよ。どうやら風雨をしのいでいるのは「ちびは、低い、澄んだ声でことばをつづけた。

「あなたのかわいそうなおとうさんが、袋用の麻布のコートでしのいでいるのと同じなのよ」

盲目の娘は、ひどく動揺して立ちあがり、運送屋の妻をわきへ連れていった。

「あたしがあんなに大事にしている、ほしいと思うとほとんどすぐ来て、とてもありがた

かった、ああいう贈物は」

バーサは、ぶるぶる震えながら言った。

「どこから来たんでしよう？ あなたが送ってくださったの？」

「いいえ」

「じゃあ、だれが？」

メアリーは、バーサがすでに知っているのを見てとって、黙っていた。盲目の娘は、また両手で顔をおおった。が、こんどはまるつきり違ったふうになった。

「いとしいメアリー、ちよつと待って。ほんのちよつとよ。もつとこつちへ来て。小さな声で話してちょうだい。あなたは正直だつてこと知ってるわ。もう、あたしをだましはしないでしょう、ね？」

「ええ、バーサ、絶対に！」

「そうよ、あなたは、きつとそんなことはしないわ。あなたは、もつたいないほど、あたしのことをあわれんでくださるんですもの。メアリー、部屋の向こうを見てちょうだい——つ

いさつきまであたしたちがいたところよ——おとうさんが、あんなにあわれみ深くかわいがってくれるおとうさんがいるところよ——そして、あなたの目に見えたとおりを話してくださいな」

「あたしの目に見えるのは」

ちびは、相手の気もちがよくわかって、言った。

「椅子にすわって、悲しそうにその背にもたれかかって、片方の手に顔をふせている一人の老人だわ。まるで、あのひとの子どもに慰めてもらいたいといったふうだわ、バーサ」

「ええ、ええ、慰めてあげるわ。もつとつづけて」

「あのひとは、心配と仕事で疲れきった老人なの。憔悴して、しょんぼりとした、物思いに沈んだ、白髪の一となの。いまあたしの目に映るのは、意気消沈し、打ちひしがれ、戦うことをやめてしまった姿よ。」

でも、バーサ、あたしは以前たびたびあのひとを見たけれど、あのひとは、ただひとつの神聖な目的のために、さまざまに努力していたわ。だから、あたしは、あの白髪の頭を尊敬

し、あのひとを祝福するの！」

盲目の娘は、突然、メアリーから離れた。そして、いきなり父親の前にひざまずいて、その白髪の手を胸に抱きしめた。

「あたしの目が見えるようになったわ。あたしの目が！」
彼女は叫んだ。

「あたしは、いままで盲目だったけれど、いま目があったのよ。あたしは、これまでおとうさんを知らなかった！　こんなにあたしを可愛がってくれているおとうさんの本当の姿を見ないで、死んでしまったかもしれないと思うと！」

ケーレブの感動は、ことばで言い表すことができなかった。

「この世で、これほど、あたしが深く愛したいと思ひ、これほど真心こめて大事にしたいと思う、ハイカラなひとはいないわ！」

盲目の娘は、父親を抱擁しながらさげんだ。

「白髪になればなるほど、疲れ果てていればいるほど、余計いといわ、おとうさん！　あ

たしが盲目だなんて、もうだれにも言わせないわ。おとうさんの顔のしわひとつすじだって、髪の本一本だって、あたしの神さまへのお祈りや感謝のなかで忘れやしないわ！」

ケーレブは、やつとのことで「わしのバーサ！」と言うことができた。

「そして目が見えないために、あたし、おとうさんのことをまるで違ったひとだと思いいこんでいたんだわ！」

娘は、強い愛情の涙をたたえて、父親をやさしくなでながら言った。

「毎日毎日そばにいて、いつもあんなにあたしのことを気にかけてもらっていたのに、そのことを夢にも思わなかったなんて！」

「紺色のオーバーを着た、颯爽としたスマートなおとうさんだったね、バーサ」
哀れなケーレブは言った。

「あれは、もういなくなっちゃった！」

「何ひとつ、なくなっちゃいないわ」

バーサは答えた。

「そうよ、いちばん大事なおとうさん！ 何もかもここにあるわ——おとうさんのなかにあるわ。あたしが、あんなに愛したおとうさん、いくら愛しても足りないのに、あたしがちつとも知らなかったおとうさん、あんなにあたしに同情を寄せてくれたので、あたしが最初に尊敬し、愛しはじめた恩人、みんな、ここに、おとうさんのなかにあるわ。あたしにとつては、何ひとつ死んだものなんかないわ。あたしにとつて一番いとしいすべてのものの精髓が、ここにあるわ——ここに、疲れ果てた顔と白髪の間とともにあるんだわ。そして、おとうさん、あたしはもう、盲目じゃないのよ！」

この談話のあいだじゅう、ちびの注意はまるごと、父と娘の上に集中されていた。しかし、いまや、ムーア式宮殿のまえの草地にいる小さな草刈りのほうに目を向けて、あと二、三分足らずで柱時計が打つことを知ると、たちまち、そわそわと興奮した状態になった。

「おとうさん」

バーサは、ためらいながら言った。

「メアリー」

「何だい、かわいい子」

ケーレブは答えた。

「メアリーは、ここにいるよ」

「このひとには変わりはないわね。このひとについては、おとうさん、真実でないことは何も言わなかったでしょう？」

「たぶん、そうしたんじゃないかと思うよ、バーサ」

ケーレブは答えた。

「もし本物以上によく言うことができたとしたらな。だが、かりにメアリーのことを少しでも変えたりすれば、悪いほうに変えたにちがいない。どんなことばを使っても、メアリーのことを実物以上に言うことなんかできっこないよ、バーサ」

この質問をしたとき、盲目の娘は、確信してはいたものの、その返事を聞いたときの彼女の喜びと誇りと、あらためてちびを抱擁した様子は、見るからに美しいものだった。

「だけど、あなたには思いもよらない変化が起こるかも知れないのよ、バーサ」

ちびが言った。

「つまり、よいほうへの変化なの。あたしたちのうちの何人かにとっては、大喜びとなるような変化なの。万一そんなことが起こっても、あんまりびつくりしたり、からだに障ったりしちやいけないわ。あれは道路を走る車輪の音？　あなたは耳がいいわ、バーサ。あれは車輪の音？」

「そうよ。とても早くやってくるわ」

「あたし——あたし——あたし、あなたの耳がとてもいいことを知っているわ」

ちびは、片手を心臓の上に置き、明かに、その動悸をうっている状態を隠すために、できるだけ早口にしゃべりつづけた。

「だって、以前からたびたびそれに気がついてたし、ゆうべも、あの聞きなれない足音をあんなに早く聞きつけたんですもの。だけど、あなたが言ったのをいまでもとてもよく覚えてるけど、なぜ、あなたが、へあれは、だれの足音？　って言ったのか、また、なぜ、ほかのひとの足音以上に、あの足音に注意したのか、あたしにはわからないのよ。」

でも、さつきも言ったように、世のなかに大きな変化が起こっているのよ、大きな変化が——。だから、あたしたち、どんなことにも驚かないように、心の準備をしておくに越したことはないわ」

ケーレブは、メアリーがかれの娘だけにはなく、自分にも話しかけているのに気づいて、これは、いったいどういう意味かと首をひねった。ケーレブは、メアリーがほとんど息もできないほど、そわそわして気をもんで、倒れまいとして椅子につかまっている様子を見て、びっくりした。

「ほんとに車輪の音だわ！」

メアリーは、あえぎながら言った。

「だんだん近づいてくるわ！　だんだん近くに！　すぐそばへ来た！　そしていま、庭の門のところ止まるのが聞こえるでしょう！　いま、戸口の外に足音が聞こえるでしょう——同じ足音でしょう、ねえバーサ！　——そしていま！」

ちびは、抑えきれない歓喜のために熱狂的な叫び声をあげた。そして、一人の青年が部屋

のなかへ飛びこんできて、帽子をポーンと空中にほうり投げあげながら、みんなのところへ威勢よくやってきたとき、ちびはケーレブのところへ駆けよって、両手で目隠しをした。

「終わった？」

ちびが叫んだ。

「うん！」

「めでたく終わった？」

「うん！」

「あの声、覚えている、ケーレブ？ あれに似た声、以前聞いたことがある？」

ちびが叫んだ。

「もしも、黄金の南アメリカにいるせがれが生きていたら——」

ケーレブは、ぶるぶる震えながら言った。

「生きているのよ！」

ちびは、両手をケーレブの目から離して、有頂天になって手をたたきながら、金切り声で叫

んだ。

「かれを見てごらんなさいよ！ あなたのまえに、健康で丈夫な姿で立っているのをごらんなさいよ！ あなたの大事な実の息子さんよ！ あなたの大事な、生きている、愛している兄さんよ、バーサ！」

有頂天の喜びのゆえに、この小さい女にすべての栄光あれ！ 三人がたがいにひしと抱きあつたときの、彼女の涙と笑いにすべての栄光あれ！ 黒い髪をなびかせた、陽にやけた船乗りを途中まで出迎えて、バラ色の小さい口をそらしもせず、自由に接吻するにまかせ、相手の高鳴る胸に抱きしめられるのにまかせた彼女の誠実さに、すべての栄光あれ！ そして、郭公にもまた栄光あれ——なぜ、いけないのだ！——ムーア式宮殿のはね戸から、押し込み強盗みたいに跳びだしてきて、喜びに酔いしれたかのように、そこに集まったひとびとに、十二回もしゃっくりをした郭公にも！

運送屋は、はいつてきて、はっと後じさりした。こんなよい仲間のなかにはいったのだから、それも無理からぬことだった。

「見てくれ、ジョン！」

ケーレブが、いかにもうれしそうに言った。

「これを見てくれ！ 黄金の南アメリカから来た、わしの実のせがれを！ あんたが出立の仕度をととのえて、あんた自身が送り出してくれたせがれを！ あんたといつもあんなに仲良しかったせがれを！」

運送屋は、相手の手をとろうと進み出たが、その顔のなかのある特徴が、荷馬車に乗った耳の遠い男の記憶を呼び起こしたので、しりごみしながら言った。

「エドワード！ おまえだったのか？」

「さあ、かれにすっかり話してしまいなさい！」

ちびは叫んだ。

「すっかり話してしまいなさい、エドワード。あたしのことは容赦しなくていいの。どんなことがあっても、このひとの目のまえでは、あたし、自分のことを容赦するつもりはないんだから、二度とね」

「ぼくがああの男でした」

エドワードは言った。

「それで、よくも変装して、古い友だちの家へ忍びこめたもんだな？」

運送屋はやりかえした。

「以前、率直な少年がいた——もう何年になるかな、ケーレブ、あの子が死んだといううわさを聞いて、そして、それが事実らしいとわしらが思いこんでから——あの子なら、こんな真似は決してしなかつただろうね」

「以前、ぼくには鷹揚な友人がいました。ぼくには、友人というよりは父親みたいなひとでした」

エドワードは言った。

「そのひとは、ぼくであれ、ほかのだからであれ、言い分も聞かずに判断しようとはしなかつたでしょう。あなたがそのひとでした。だから、いまもぼくの言うことを必ず聞いてくれるだろうと思うんです」

運送屋は、まだ自分から遠のいているちびを困ったような目でちらりと見ながら。答えた。

「そうだな！ そりゃいかにも公平だ。聞かせてもらうよ」

「ぜひ承知していただきたいのですが、ぼくが少年時代にここを去ったとき、ぼくは恋におちていました。そして、その恋は報いられたのでした。そのひとはごく若い娘で、もしかすると、自分の気もちがわからなかったのだ（とあなたはおっしゃるかもしれない）、でも、ぼくは自分の心を知っていました。そして、彼女を熱愛していました」

「そうかい！」

運送屋は、声を強めて言った。

「おまえが！」

「事実そうでした」

相手は答えた。

「そして、娘はそれに応えてくれました。応えてくれたとそれ以来ずっと信じてきました
が、いま、それが確かになったのです」

「神さま、わたしをお助けください！」

運送屋は言った。

「こいつは、何よりもひどいことだ」

「娘に対する気もちは少しも変わらず」

エドワードは言った。

「かずかずの苦難と危険のあと、むかしの約束のぼくのぶんを果たそうと、希望に胸をふくらませて帰ってきたところ、二十マイルさきで、娘がぼくを裏切って、ぼくのことを忘れてしまって、ほかの、もつと金もちの男と結婚の約束をしてしまった、という話を聞きました。ぼくには娘を責める気もちはなかった。ただ、娘に会って、このことが真実であることを疑問の余地がないまでに確かめたいと思いました。娘が自分の望みや思い出にそむいて、無理やりそうさせられたのであってほしい、と思いました。それは、大した慰めにはならな

いだろうが、いくらかは慰めになるだろう、とぼくは思いました。

そして、その足でぼくはやってきました。真実を、ありのままの真実を知るために、一方

では、邪魔されることなく、自分で自由に観察し、自分で判断を下せるように、他方では、娘を心を動かす力を（かりに、そんなものがぼくにあるとして）示すために、ぼくは自分とは似ても似つかない身なりをし——どんな身なりか、ご承知のとおりです、そして街道で待っていました——どの辺かは、ご存じのとおりです。あなたは、ぼくをちつとも怪しまず、また、彼女のほうも」

と、ちびのほうを指さしながら、

「ちつとも怪しみませんでした。ついに、ぼくがああのかまどで彼女の耳もとにささやいて、彼女がもう少しでぼくの正体をあばいてしまいそうになったときまではね」

「でも、彼女は、エドワードが生きていて、帰ってきたことを知ると」

ちびは、この打ち明け話のあいだずっと、しゃべりたくてたまらなかつたので、泣きじゃくりながら、こんどは自分でしゃべりだした。

「そしてかれの目的を知ると、ぜひとその秘密を隠しておくように忠告したのです。なにしろ、かれの古い友人のジョン・ピアリングルは、性質があまりにもあけつびろげで、

たくらみごとなんかからきし下手で——何につけても不器用な人ですから」

ちびは、半ば笑い、半ば泣きながら言った。

「それを自分の胸にしまっておけないからです。それで、彼女が——それはあたしのことよ、ジョン」

小さな女は泣きじやくった——

「かれに事情をすっかり話したの。エドワードの恋人がかれを死んだと信じていることや、彼女がとうとう母親に言い含められて、その愚かなお年寄りが、有利だと称する結婚をする気になったことなどを話したとき、また彼女が——それは、またあたしのことよ、ジョン——二人はまだ結婚していない（日は迫ってはいるけれども）ことや、彼女の側には愛情がひとかけらもないのだから、このまま進めば犠牲に終わるのは明らかだ、というようなことを話したとき、そして、エドワードがそれを聞いた喜びで、ほとんど気が狂いそうになったとき、そのとき、彼女が——またあたしのことよ——二人の仲をとりもってあげましょう、むかし何度もしたようにね、ジョン、そして恋人の気もちを探り、彼女が——これもあたし

よ、ジョン——言ったり、考えたりしていたことが本当かどうか、確かめてあげましょうと言ったの。そして、それは事実ほんとうだったのよ、ジョン！　それで二人はいっしょになったのよ、ジョン！

そしてね、ジョン、一時間まえに二人は結婚したの！　そら、花嫁さんが来たわ！　だから、グラフ・アンド・タクルトンさんは、独り者のまま死んでしまうかもしれないわ！　だから、あたしは、とても幸福な小さな女なのよ。メイ、あなたに神様の祝福がありますように！

ちびは、愛さずにはいられないほど愛くるしい小おんなだった（こういうことばが少しでも当たっているとすれば）。そして、いま有頂天になっているちびくらい、まったく愛さずにはいられないほど愛くるしい女はいなかった。彼女が自分と花嫁に浴びせた祝辞くらい、かわいらしい、気もちのよいものはなかった。

胸のなかの感動のあらしのまったなかで、正直者のジョンは、面食らったまま立っていた。いまや、ちびのほうへ飛んでいくと、ちびは手を差しのべてジョンをとどめ、前と同じ

ように、後じさりした。

「だめよ、ジョン、だめよ！ すっかり聞いてちょうだい！ あたしの言うことばをひとことももらさず聞き終わるまでは、ジョン、あたしを愛してはいけないわ。あなたに隠しごとをしたのはまちがいだったわ、ジョン。ほんとにすみませんでした。ゆうべ、あたしが、あなたのそばの、小さなストールにすわりに行くまでは、それを悪いことだとは思わなかったのよ。」

でも、あなたの顔に書いてあることから、あたしがエドワードと廊下を歩いていたところを、あなたに見られたことを知ったとき、あなたが何を考えているかわかったとき、それがどんなに軽はずみで、どんなにまちがっていたか、わかったの。でも、ああ、いとしいジョン、どうして、どうして、そんなふうに思ったの！」

小柄な女、彼女は再び、なんと泣きじゃくったことだろう！ ジョン・ピアリングルは、彼女を両腕に抱きしめたいところだった。けれど、だめだった。彼女はどうしても、それを許さなかった。

「まだあたしを愛さないでちょうだい、お願い、ジョン！　これから長いあいだというのじゃないの！　あたしがこの予定された結婚のことを悲しく思ったのは、あのね、メイとエドワードが、あんなに若い恋人同士であることを覚えていたし、また、メイの心がタクルトンさんから遠く離れていたことを知っていたからなの。これであなたも信じてくださるわね。そうでしょ、ジョン？」

ジョンは、この訴えを聞いて、もう一度突進しようとしたが、ちびは再び、押しとどめた。

「だめよ。どうかそこにおいてちょうだい、ジョン！　あたしがときどきやるように、ジョン、あなたのことを笑ったり、不器用だとか、かわいいおばかさんだとか、そういった悪口を言ったりするときはね、あなたをとても愛しているからなのよ、ジョン、あなたのやり方がともうれしいからなのよ。あなたをあす王さまにしてやると言われたって、あなたがほんのちよっぴりでも変わるのを見たくないわ、あたし」

「万歳！」

ケーレブが、いつにない活気を見せて言った。

「同感だ！」

「そして、あたしがひとのことを中年だとか、着実だとか言ったり、自分たちはことごと歩いていく平凡な夫婦だといったふりをするときはね、ジョン、ただ、あたしがすごいおばかさんだから、ときどき赤ちゃん相手に芝居みたいなことをやったり、そのほか、いろんなふりをするからのよ、ジョン」

メアリーは、ジョンがやってくるのを見てとって、まともや押しとどめた。しかし、もうちよつとで手おくれになるところだった。

「いけません、どうか、あと一、二分、あたしを愛さないでちょうだい、ジョン！ あなたにいちばん話したいことは、いちばんあとまで取っておいたのよ。あたしのいとしい、善良で、寛大なジョン、こないだの晩、あたしたちがおろぎのことを話していたとき、あたし、もう少しで口に出してしまうところだったのよ、ジョン！ はじめあたしは、いまあなたを愛しているほど深くはあなたを愛していなかったことや、はじめてこのおうちへ来たとき、自分が望んだり、祈ったりしているように、完全にあなたを愛するようにはならないん

じゃないか——だって、あのとおりとでも若かったから——と半ば恐れていたことをね。

だけど、いとしいジョン、日ましに、そして一時間ごとに、ますます、あたしはあなたを愛するようになったの。そして、もしあたしがあなたを現在よりももつと愛するようになることができたとしたら、けさ、あなたがおっしゃった気高いことばが、あたしにそうさせたことでしょう。だけど、あたしにはできないの。あたしのもっていた愛情（それはとてもたくさんだったのよ、ジョン）は、残らず、ずっとずっとまえに、それを受ける資格のあるあなたにあげてしまって、これ以上はもう何も残っていないの。

さあ、あたしのいとしい旦那さま、もう一度、あなたの胸にあたしを受け取ってちょうだい！　そこがあたしのおうちよ、ジョン。だから、絶対に、絶対に、あたしをよそへやろうなんて考えないでちょうだいね！」

素晴らしい小さい女が第三者に抱かれるのを見たとしても、ちびが運送屋の胸に飛びこむのを見たときに感じたほどの大きな喜びは、決して味わえないだろう。それは、読者がこれまでの日々に一度も見たことのないほど、完全な、純粹な、心のこもった、厳粛な光景だっ

た。

運送屋は、完全な有頂天の状態にあつたと信じていい。また、ちびも同様であつたと信じていい。さらに、スロウボーイ嬢を含めて、かれら一同がそうであつたと信じていい。この子ときたら、喜びのあまりさんざん泣いて、自分の幼い預かりものを一座のひとびとの祝辞の交換のなかに入れてもらいたくて、まるで何か飲物でもあるかのように、次から次へと、みんなに赤んぼうをまわしたものだ。

ところが、いまや、ふたたび車輪の音が戸口の外に聞こえ、だれかが、グラフ・アンド・タクルトンが戻ってくるぞ、と叫んだ。すぐさま、あの立派な紳士が、興奮した、あわてふためいた様子で現れた。

「おや、いったい全体、これはどういうことかね、ジョン・ピアリングル！」
タクルトンは言った。

「何か手ちがいが生じたのだ。おれはタクルトン夫人と教会で会う約束をしたんだが、誓つてもいいが、ここへくる途中の夫人と道ですれちがったんだ。おや！ 彼女、ここにいる

じゃないか！ 失礼ですがね、おはつにお目にかかります。その若いご婦人をわたしにお渡し願えませんか。このひとは、けさ、ちよつと特別な約束がありますんでな」

「しかし、ぼくはこのひとを手放すわけにはいきません」
エドワードがやりかえした。

「そんなことは思いもよらぬことです」

「どういうつもりかね、このごろつきめ？」

タクルトンが言った。

「ぼくのつもりはですね」

相手は、微笑を浮かべてやりかえした。

「あなたがいらだっていることも斜酌してあげられるので、昨夜の話を全部聞かなかったように、けさのとげとげしい話も聞かないことにするってことです」

タクルトンが、相手にあたえた目つきと、かれが示した驚きときたら！

「お気の毒ながら」

エドワードは、メイの左手、とりわけ薬指を差し出しながら言った。

「この若い婦人は、あなたのお伴をして、教会に行くわけにはいきません。でも、けさ、すでに一度あそこへ行ってきたんですから、たぶん、あなたも容赦してくださいでしょう」

タクルトンは、その薬指をまじまじと見つめた。それから、指環のはいつているとおぼしい小さい銀紙を、チョッキのポケットから取り出した。

「ミス・スロウボーイ」

タクルトンは言った。

「すまないが、こいつを火のなかへ投げこんでくれないか？ や、ありがとう」

「妻があなたとの約束を守れなかったのは、先約が、すごく古くからの約束が、あったためなんですよ、請け合ってもいいですが」

エドワードは言った。

「タクルトンさんも、あたしがそのことを誠実に打ちあけて、あたしはどうしても忘れられない、と何度も申しあげたことを公平に認めてくださるでしょう」

メイは、顔を赤らめながら言った。

「ああ、もちろん！」

タクルトンは言った。

「ああ、たしかに！ いや、気にしないで。まったくおっしゃるとおりです。エドワード・プラマーの奥さん、だね？」

「そういうことです」

花婿が答えた。

「ああ、おれがあんたがわからなかったのは当然だね」

タクルトンは、相手の顔をしげしげと調べるように見て、低くお辞儀をしながら言った。
「おめでとう！」

「ありがとう」

「ピアリングルの奥さん」

タクルトンは、メアリーが夫といっしょに立っているほうへ、突然、振り向いて言った。

「すまなかつたね。あんたは、おれに大して親切にしてくれたことはなかつたが、ほんとうに、すまなかつた。あんたは、おれが考えていたよりもいいひとだ。ジョン・ピアリビングル、すまなかつたな。おまえさんは、おれの気もちをわかつていてくれる。それで十分だ。これは、まったく正しいことだ、紳士淑女のみなさん、まったく申し分なしだ。さようなら！」

こう言いながら、タクルトンは、あつけらかんとして、出て行った。戸口のところでちょっと立ち止まって、馬の頭から花やリボンを取りはずし、かれの手はずが狂ったことを馬に知らせる手段として、その動物のわき腹を蹴とばした。

もちろん、きょうの日を、これらのできごとがピアリビングル家の暦に大宴会・大祝祭として永遠に記録されるべき日として愉快に過ごすことが、いまや重大な仕事となつた。そこで、ちびは、この家にも、関係のあるすべてのひとにも、不滅の榮譽をもたらすようなご馳走を作ろうと仕事にとりかかった。そして、まもなく、えくぼのある肘まで小麦粉のなか突っこみ、運送屋がそばへ来るたびごとに引きとめて接吻するので、運送屋の上衣は真っ白になつてしまった。この善良な男は、野菜を洗つたり、カブの皮をむいたり、皿を割つたり、

火の上にかけてある、冷たい水がいっぱいはいっている鉄なべをひっくりかえしたり、ありとあらゆる方法で役に立った。

一方、近所のどこからか大急ぎで呼んできた、二人の本職のお手伝いさんは、生きるか死ぬかの瀬戸際でもあるかのように、戸口という戸口、曲り角という曲り角で鉢あわせばかりいるし、だれもかも、いたるところで、テイリーと赤んぼうにつまづいて転んばかりいた。

テイリーが、これまでにこんなに存在感を示したことはなかった。テイリーの遍在ぶりは、一同の驚嘆の的であった。彼女は二時二十五分過ぎには、廊下で邪魔物だったし、かつきり二時半には台所で人捕りわな*となった。また、三時二十五分まえには、屋根裏部屋でおとし穴になった。赤んぼうの頭は、いわば、あらゆる種類の物質——動物、植物、鉱物の試金石となった。その日使われたもので、赤ちゃんの頭といつかしら親交を結ばないものは、何ひとつとしてなかった。

*むかし、領内や猟場の侵入者をとらえるために用いたわな。

それから、大遠征隊が、徒歩でフィールディング夫人を捜しに出かけ、その非常にすぐれた貴婦人に陰気な顔をして詫びを入れ、必要とあらば、力づくでも連れ戻って、二人の結婚を喜んで許してもらったことになった。

ところが、遠征隊がはじめて夫人を見つけたときは、夫人はどんなことばにも、てんで耳を貸そうともしないで、数えきれないほど何度も、生き長らえてこんな日を見ようとは！　と言ひ、「さあ、わたしを墓場へ運んでおくれ」と言うほかに、何も言わせることはできなかった。ところが、夫人は死んでもどうしてもいないのだから、このことばは理屈に合わないように思われた。

しばらくすると、夫人は、恐ろしいほど冷静な状態におちいって、インド藍貿易であの一連の不幸なできごとが起こったとき、自分はこれから一生、あらゆる無礼や侮辱に身をさらすことになるだろうと予期していたし、それが事実になってうれしいと言った。

それから、自分のことなどかまってくれな——だって、わたしはいったい何者なのでしよう！　ほんとにまあ！　つまらぬ人間でござあますわ——そんな人間が生きているなんて

ことは忘れて、自分なんかかまわずに、それぞれの道を生きて行ってほしい、と歎願した。この激しい、いやみな気分から、腹だたしい気分に移って、虫けらだって、踏みつけられれば反抗する*という注目すべき表現を洩らした。

そのあとで、静かな悔悟に身をゆだねて、秘密を自分に打ち明けてくれさえしたら、どんな知恵でも貸してあげられないものでもなかったのに、と言った！ フィールディング夫人の感情のこの転機に乗じて、遠征隊は、夫人をうまくまるめこんだ。そこで夫人は、まもなく手袋をはめ、ほとんど主教冠のように高くて、まったく同じくらい堅い、威厳のある帽子を入れた紙包みをわきにかかえ、非の打ちどころもないお上品な様子をして、ジョン・ピアリベングルの家へ行く道をたどっていた。

それから、もう一台の小さい二輪馬車で、ちびの父親と母親がやってくることになっていたが、二人の到着が遅れたので、みんなが心配して、まだ来ないかと、しきりに道路を見わたした。

* Even a worm will turn (虫けらだって(踏まれれば)反抗する)ということわざから。

フィールディング夫人は、いつも、事実上だれも来そうもない、まちがった方向を見ようとするのだった。そのことを注意されると、好きな方向を勝手に見させてもらいたいののだ、と言った。ついに、ちびの両親がやってきた。ふつくらした小さな夫婦で、ちび一家独特の、気もちのいい、気楽な、かわいい様子で、とことことやってきた。そして、ちびと母親が並んで立っているのを見るのは素晴らしかった。二人はそれほどよく似ていた。

それから、ちびの母親は、メイの母親と旧交を暖めなければならなかった。メイの母親は、いつも家柄のよさを自慢した。一方、ちびの母親は、そのきびきびしたな小さい足のほかは何も自慢しなかった。そして、年寄りのちび——ちびの父親をこう呼ぶわけだが、それがかれの本名でないことを、わたしは忘れたけれど、でもかまうものか——は、なれなれしくふるまって、初対面なのに握手をして、帽子などは糊とモスリンの塊にすぎないと考えている様子だったし、インド藍貿易にはまるつきり敬意を払わず、いまとなってはどうしようもないと言った。フィールディング夫人の概評によれば、かれは気さくな親切な人だが——しかし、あれじゃ下品だわね、ということだった。

ちびがウエディングドレスを着て、接待役を勤めている姿（彼女の輝やく顔に祝福あれ！）を、いくら金をもらっても、わたしは見のがしはしなかっただろう。そうだ！ 食卓の末席で、あのように陽気な、赤い顔をした善良な運送屋のことも。また、褐色の、生き生きとした船乗りと、その美しい妻のことも。また、一座のひとびとのだれ一人も。この正餐を見逃すことは、人間が食べる必要のある、もつとも楽しい、もつとも実のある食事を見逃すことになっただろう。また、かれらが結婚式を祝って飲んだ、なみなみとあふれる盃を見のがすことは、何よりも大きな見のがしとなったことだろう。

正餐のあとで、ケーレブは、「泡立つ大盃」の歌を歌った。おいらは生きている人間で、あとひととせ、ふたとせは生きていたいと思うから、とかれは最後まで歌った。

そして、ついでながら、ケーレブが最後の一行を歌い終わったちようどそのとき、まったく思いがけないできごとが起こった。

ドアをノックする音がした。そして、一人の男が、ごめんなさいとも、失礼しますとも言わないで、頭に何か重そうなものをのせて、よろめきながらはいつてきた。この荷物を食卓

の中央に、クルミや、リンゴのまん中に、釣り合いよく置いてから、男は言った。

「タクルトン氏からよろしく、とのことです。あのかたは、自分はこのケーキに用がなくなったから、たぶん、あなたがたが食べてくださるでしょう、って」

そして、そう言うと、男は歩き去った。

読者も想像されるように、一座のひとびとは、少々びっくりした。フィールディング夫人は、無限の洞察力をもった婦人だったから、このケーキには毒がはいっているんじゃないか、と言いだし、夫人の知っている範囲内でも、ある女学校全体を真っ青にさせてしまったケーキの話を語ってきかせた。しかし、夫人の話は、賛成の声に圧倒されてしまった。そして、メイは、そのケーキをいとも儀式ばって、大喜びで切ったものだ。

まだだれもケーキを味わっていなかったと思われるとき、またしてもドアをノックする音がして、まえと同じ男が、大きなハトロン紙の包みを小脇にかかえて現れた。

「タクルトン氏からよろしく、とのことです。そして、赤ちゃんにおもちやをいくつか持たせてよこしました。みにくいやつじゃありません」

その口上を述べてから、男はまた立ち去った。

一座のもののみんな、たとえ、自分の驚きを表すことばを捜す時間がたつぷりあったとしても、そのことばを見つけるのに大変な困難を覚えたことだろう。しかし、かれらにはそんな時間は全然なかった。というのは、使いの者が、ドアを閉めて出ていくかいかないうちに、再びドアをノックする音がして、タクルトン自身がはいってきたからだ。

「ピアリビングルのおかみさん！」

玩具商人は、帽子を手にしたまま言った。

「すまなかつたね。けさよりも、もつとすまなかつたと思っている。おれは、あのことをじっくりと考えてみた。ジョン・ピアリビングル！ おれの性格は、気むずかしい。だが、おまえさんのような男と面と向かうと、多少とも、やさしくならずにはいられない。ケーレブ！ この、何も知らない子守娘が、ゆうべ、きれぎれの暗示をあたえてくれたので、それでおれは話の筋道がつかめたんだ。おれは、赤面してしまうよ、おまえと娘を、いともやすやすとおれに縛りつけていたかもしれないと考え、また、おまえの娘を馬鹿だなんて考えて

いたなんて、自分こそ、なんとみじめな馬鹿ものだったのかと考えるとな！

友人たち、みな衆、おれの家は、今夜とても寂しい。おれの炉辺には、一匹のおろぎさえもない。おどかして、すっかり追っばらってしまったから。おれに愛想よくしてくれ、この幸福な仲間におれも入れてくれ！」

タクルトンは、五分もたつと、もうくつろいでいた。読者は、こんな男に会ったことはあるまい。これまでの生涯に、この男は、いったい、どういう仕打ちを自分にしてきたのだろう、快活になれる素質を自分が十分にもっていることに、いままで知らないでいたなんて！あるいは、妖精たちは、いったい、どんなことをこの男にしてきたのだろう、こんな変化を起こさせるなんて！

「ジョン！ あなた、今夜あたしを里へ帰しはしないでしよう、ね？」
ちびは小声で言った。

だが、かれはもうちよつとで、そうするところだったのだ！

このパーティーを完全なものにするためには、生き物がただひとつだけ欠けていた。そし

て、またたくまに、かれはやつてきた。懸命に走つたために、ひどくのどが乾いていたので、首の細い水差しに頭をねじこもうとして望みのない努力をしはじめた。かれは、ご主人のいないのにつくづくうんざりし、代役に猛烈に反抗しながらも、荷馬車といっしよに旅の終わりまで行つてきたのだった。

老いぼれ馬を扇動して、勝手に帰るといふ叛乱行為をさせようと試みたが、無駄になつたので、しばらく馬屋のあたりをうろついてから、酒場へはいつていつて、暖炉のまえに寝そべつた。しかし、不意に、あの代役はペテン師だから見棄てなければならぬという確信に従つて、再び起き上がると、尻尾をめぐらして、帰つてきたのだった。

夕方、ダンスがおこなわれた。それがまったく独創的ダンスで、まったく珍しい振りつけの踊りだったと考えるなにかの理由がなかつたなら、その娯樂については、わたしは、「ただダンスがおこなわれた、と概括的に述べるだけでやめておいたはずだった。が、それは、奇妙なふうにはじまつたのだ。つまり、こんなふうのだ。」

あの水夫のエドワード——かれは善良で、率直な、威勢のいい若者だった——は、オウム

だの、鉱山だの、メキシコ人だの、砂金だのについての、さまざまな不思議な話をみんなに話していたが、突然思いついて、座席から跳びあがって、ダンスをやるうじやないか、と言い出した。というのは、バーサのハーブがそこにあつて、彼女はめつたに聞けないほどの名手だったからである。

ちび（その気になれば、氣どつてみせるずい小さいやつ）は、自分のダンスする時代は終わったと言った。運送屋はパイプをふかしていたし、ちびはかれのそばにすわっているのが一番好きだったからだ。とわたしはにらんでいる。

フィールディング夫人も、もちろん、そのあとでは、わたしのダンス時代は終わった、と言わざるをえなかった。そして、メイを除いて、だれもかも同じことを言った。メイは待つかまえていた。

そこで、メイとエドワードは、大喝采のうちに立ちあがって、二人きりで踊りはじめ、そして、バーサは、この上なく陽気な曲を奏でる。

いやはや！ わたしの言うことを信じてくださるなら、二人が踊りはじめて五分とたたな



うちに、だしぬけに、運送屋がパイプを投げ捨てて、ちびの腰のまわりを抱いて、部屋の中央へ飛び出して、つま先とかかとを床に打ちつけて、とてもすばらしい踊りを踊りだす。

タクルトンは、これを見るやいなや、フィールディング夫人のところへ滑るように飛んでき、夫人の腰のまわりを抱いて、先例にならう。

老ちびも、これを見るやいなや、元気いっぱい立ちあがり、ちび夫人をダンスのまん中へさらって行き、そこで先頭に立つ。

ケーレブも、これを見るやいなや、ティリー・スロウボーイの両手をつかんで、威勢よく踊りだす。スロウボーイ嬢は、ほかのペアのあいだに猛烈にもぐりこんで、何度でも相手とぶつかるのが、ダンスの唯一の原則というものだ、と堅く信じて疑わない。

聴け！　こおろぎが、リ・リ、リ・リ、リーと鳴いて音楽に加わるのを。そして、やかんが、ブン、ブンと鼻声で歌っているのを！

* * * * *

しかし、これはどうしたことか！　わたしが心たのしくその歌声に耳を傾け、わたしにと

って、とても気もちのいい小さい姿を最後にひと目見ようと、ちびのほうを向いたちようど
そのとき、彼女もほかの人たちも空中に消え失せて、わたし一人が残されたのだ。一匹のこ
おろぎが炉辺で歌っている。こわれた子どもの玩具がひとつ、床の上に横たわっている。ほ
かには何も残っていない。

解 説

チャールズ・ディケンズは、ビクトリア女王から一般大衆にいたるまで、さらに、アメリカの読者層にも熱狂的に愛読され、外国では、ドストエフスキー、プルースト、カフカなどからも絶賛されている、英国の作家である。十九世紀最大の文豪であったばかりでなく、二十世紀になると真剣な学問的な注目を浴びるようになり、その作品は、数多くの言語に翻訳され、何度も映画、演劇、ミュージカルなど改作されている。

生涯と作品

ディケンズは、下級官吏の長男として、一八一二年二月七日にポーツマス海港に近いランドポートに生まれ、三歳のときロンドンに移った。幼年時には父の家の屋根裏部屋で、スモークレット、フィールディング、デフォー、ゴールドスミス、ル・サージュ、セルバンテスな

どを耽読した（その影響は、のちの作品にもうかがわれる）。

家計不如意のため、十二歳のときには靴墨工場に働きに出され、父親は借財不払いのため投獄された。工場生活は一生忘れることのできない屈辱的な経験をかさに味わせた。かれの小説に登場する多くの子どもたちと同様に、デイケンズの幼年時代は、困難な、不幸せなものであった。

十五歳のとき、初等教育を終えたばかりで弁護士事務所の事務員となったが、その仕事になじめず、ジャーナリストを志して、速記術を習得し、国会記者、新聞の報道記者となり、一八三六年、二十四歳のとき、かねて雑誌や新聞に発表していた写生文や短編を集めて『ボズの素描集』と題して出版した。

一八三七年、二十五歳のとき、画家フィズの挿絵を付けて、分冊月刊していた『ピックウイック・ペーパーズ』を出して、一躍、国民的作家になった。続いて、『オリバー・トウィスト』（一八三八）を出版して、当時の新貧民救済法や養育院制度の非人間性を暴露した。

以後、次々に小説を発表、長編としては『骨董店』（一八四一）、『ドンビー父子』（一

八四八）、『デイヴィッド・コッパーフワールド』（一八五〇）、『荒涼館』（一八五三）、『リトル・ドリット』（一八五七）、『二都物語』（一八五九）、『大いなる遺産』（一八六一）、中編としては『クリスマス・キャロル』（一八四三）、『炉辺のおろぎ』（一八四五）などが代表作として知られる。

一八四二年、三十歳のときに、妻とともにアメリカを旅行し、大歓迎をうける。十月、『アメリカ覚え書』を出版、奴隷制度廃止と国際的版權を主張した。あまりに率直な批判のため、アメリカ人の反発を買った。

一八五八年、デイケنزは自作の公開朗読をはじめた（若いとき俳優を志し、何度も素人芝居を演出し、また、それに出演していたデイケنزの朗読は、単なる朗読ではなく、身振り手振りをまじえた一人芝居の趣があったと思われる）。一八六七―八年、アメリカを再訪、各地で自作の公開朗読*をおこなった。

* 公開朗読は、『クリスマス・キャロル』、『炉辺のおろぎ』、『鐘の音』など『クリスマス・ブックス』

所収の作品を簡約にしたもので、初回は慈善朗読であった。朗読は、聴集の大きなすすり泣きによってた

著作のほかに慈善事業、雑誌編集、素人芝居、自作の公開朗読などが重なったため、健康がとみに衰え、ついに、一八七〇年六月九日、『エドウィン・ドルードの謎』を未完成のまま急逝し、国民的文豪としてウエストミンスター寺院に葬られた。享年五十八歳。

ディケンズの卓抜で多彩な性格創造とユーモアの質の高さは、しばしば、シェークスピアのそれと比較される。アメリカの詩人・批評家のウィリアム・ローズ・ベナーは、ディケンズについて、次のように述べている。

「英語の作家のうちで、ディケンズほど、特徴的に残酷な、あるいは苦しんでいる、あるいは滑稽な、あるいは嫌悪感を引き起こす、おびただしい人物を創造したものはいない。十九世紀の大人が子どもに加えた不法行為をかれくらい説得力をもって描いた作家はいない。ディケンズの感傷性や、とかく戯画に傾きがちな点に対する攻撃も、偉大なユーモリスト、キャラクターの創造者としての名声をほとんど減じるものではない」

『クリスマス・ブックス』

びたび妨げられたという。

デイケンズは、一八四三年の『クリスマス・キャロル』を第一作として、『鐘の音』（一八四四）、『炉辺のおおろぎ』（一八四五）、『人生の戦い』（一八四六）、『憑かれた男』（一八四八）の五つの中編小説をクリスマスごとに、次々と発表した。そして一八五二年、これらの五篇は『クリスマス・ブックス』として一冊の本にまとめられた。

ヴィクトリア朝の初期には、クリスマスを祝うことは衰退していた。清教主義による規制と産業革命の最盛期のさなかにいる労働者階級には、クリスマスを祝う時間はほとんどなかった。折しもデイケンズのクリスマスの本、とりわけ、『クリスマス・キャロル』が出版されて、英米両国においてクリスマスの喜びを再びかきたて、デイケンズの名前は、クリスマスと同義語になった。一八七〇年にかれを死を聞いた、ロンドンの行商人の娘の少女は、「デイケンズさんが死んだんですって？ それじゃあ、サンタのおじさんも死んじゃうの？」と訊いたという逸話はよく知られている。

『炉辺のおおろぎ』

デイケンズは、一八四五年に、「家庭の小さな守護神」とするクリスマス物語

を書くことを思いつき、その着想を結実させた『炉辺のこおろぎ』は、『クリスマス・ブックス』のなかでも、もっとも人気があつたようで、当初、さきに出版された『クリスマス・キャロル』と『鐘の音』の二倍もの売れ行きを示した、とデイケンズの親友で伝記作者のジョン・フォースターは語っている。そして、出版後ひと月以内に、戯曲に脚色されてロンドンの十七もの劇場で上演された。

この物語は、中年の、不器用な、正直者の運送屋ジョン・ピアリングルとその若い、小柄な妻メアリー（夫から「ちび」と呼ばれている）、子守女のティリー・スロウボーイ、生後二か月の赤んぼう（すでにしっかりと存在感がある！）、それに犬のボクサーからなる一家と、一家にかかわる人びとの日常生活の愛情、喜び、悲しみ、悪意、疑惑、そして赦しを、深い愛情と共感をこめてしみじみとした筆致で描写している。

メアリーは、こおろぎについて、次のようなことばで夫に語る。

「あのリ・リ・リ、リ・リ・リという鳴き声は、あたしにとつて、それは大変な歓迎だったわ！ 将来の約束と激励でみちあふれているようだったわ。あれはこう言っているみたい

だった。あなたは、あたしに親切に優しくしてくれるでしょう。そして、あなたの愚かな、小さい妻の肩の上に、賢いおつむがのっかっているなんて期待しないでしようよ、ってね……」

「こおろぎが、そう言ったような気がしたときに、ジョン、本当のことを言ってたんだわ。だって、あなたはあたしにとって、たしかに、いつもいちばんよい、いちばん思いやりのある、いちばん愛情深い旦那さまでしたもの。ここは幸せな家庭だったわ、ジョン。それだから、あたし、こおろぎが大好きなの！」

ジョンの友人のケーレブと盲目の娘バーサは、玩具商のタクルトンに雇われている職人で、もうひと冬もたないような、あばら屋に住んでいる。ケーレブは、目の見えない娘の苦しみを少しでも和らげてやりたいという思いから、自分はスマートな伊達男で、住まいはござっぱりしていて、冷酷で、意地悪な雇い主のタクルトンは、非常に親切な、自分たちの恩人だ、と娘にうそを教えている。そのため、ケーレブはいつも、道に迷ったひとのように、疲れて、途方にくれた顔つきをしている。バーサは、タクルトンを世にも親切な恩人として、

ひそかな、強い思慕の情を寄せている。

あるあらしの晩、ジョンが、耳の遠い老紳士を連れて戻ってきて、頼まれるままに一夜の宿を貸す。この老紳士は、ケーレブの息子で、水夫となって南アメリカへ出かけたまま、生死のほどもわからなくなっていたエドワードという青年の仮装だった。かれは、むかし恋人同士であったメイ・フィールディングが、老人の玩具商タクルトンと結婚するといううわさを聞いて、多くの困難と危険を冒して故国に戻ってきたのだった。

その夜、タクルトンは、かつらを取って、威勢のいい青年の姿にかえったエドワードが、ちびと親しげに語りあっているところをジョンに見せる。妻が自分を裏切っているのではないかと、と一晚じゅう寝もやらず苦悩するジョンは、こおろぎの妖精に、やさしく貞淑だった妻のさまざまな姿を見せられて、ようやく妻を許し、年の違った自分から解放して、里へ帰してやろうと決心する。ジョンは、その心境をタクルトンに吐露して、次のように言う。

「おれは考えただろうか。あれを——あの年齢との、あの美しい彼女を——あれの若い仲間たちから（中略）連れてきて、くる日もくる日も、おれの退屈な家に閉じこめて、おもしろ

くもないおれの相手をさせたってことを？ おれは考えただろうか、彼女の活発な気質におれがどんなに不向きであるか、また、おれみたいなまじめだけがとりえのような男が、あれのように、はしっこい精神の女性にとつて、どんなに飽き飽きするものであるかってことを？」

父親が描いてみせた、雇い主のタクルトンの虚像を心から敬愛するようになっていた、目の見えないバーサは、タクルトンが、自分の幼なじみのメイ・フィールディングと結婚するということを知って、大きなショックをうける。娘の本心をはじめて知ったケーレブは、「揺りかごのころから娘をあざむいてきて、結局は娘の胸を張り裂けさせたただけだったのだろうか」と悲嘆にくれる。

一方、メアリーから父親の本当な姿は、「やせて、しょんぼりした、もの思いに沈んだ」老人であることを聞かされたバーサは、いきなり父親のまえにひざまずいて、その白髪の手を胸に抱きしめて、「あたしの目が見えるようになったわ！ あたしは、いままで盲目だったけれど、いま目があったのよ。あたしは、これまでおとうさんを知らなかった！ こんな

にあたしを可愛がってくれているおとうさんの本当の姿を見ないで、死んでしまったかもしれないと思うと！」と叫ぶ。このあたりの、一〇ページにわたるシーンは、哀切きわまりなく、感動的である。

翌朝、ちびの仲立ちで、めでたく教会で結婚式を終えて戻ってきたエドワードから、一部始終を聞いて、ジョンは自分の誤解を悟り、妻を抱きしめる。同時に、こおろぎが再び鳴き始める。そして、メアリーは夫に向かって言う。

「あなたに隠しごとをしたのはまちがいだっただわ、ジョン。ほんとにすみませんでした。うべ、あたしが、あなたのそばの、小さなスツールにすわりに行くまでは、それを悪いことだとは思わなかったのよ。でも、あなたの顔に書いてあることから、あたしがエドワードと廊下を歩いているところを、あなたに見られたことを知ったとき、そして、あなたが何を考えているかわかったとき、それがどんなに軽はずみで、どんなにまちがっていたか、わかったの。でも、ああ、いとしいジョン、どうして、どうして、そんなふうに思ったの！」

タクルトンは、自分の生き方がまちがっていたことを悟り、幸福な仲間に加えてほしいと

頼む。

そのほかの登場人物としては、一見知恵足らずのように見えながら、周囲の人たちを鋭く観察している子守女のテイリー・スロウボーイ、いつも家柄のよさを自慢して、夫がインド藍貿易で失敗していなかったら、いまごろは大金もちになっていただろうと信じている、メイの母親のフィールディング夫人、自分の気配りは家族全般に、公平に分配されるべきであると信じている犬のボクサー、さらに、ディケンズ特有のアニミズム的心情から生き生きと躍動的に描かれている、こおろぎとやかん、柱時計、柱時計の郭公、もろもろの人形たちも、忘れたい存在である。

思うに、この小説ほど、庶民の日常の暮らしの哀歓を、限らない共感と愛情をもってしみじみと描きあげた小説は、おそらくほかにないであろう。

この翻訳は、オックスフォード・イラストレイテッド・ディケンズを底本とし、かたわら、ペンギン・イングリッシュ・ライブラリ版を参照した。挿絵は、前者から採録した。また、二、三の先行訳も参考にさせていただき、有益であった。

二〇〇九年五月

安藤貞雄